

令和元年度国際子ども図書館

児童文学連続講座講義録

絵本から

児童文学基礎講座

ヤングアダルト

文学まで

2020年9月

国立国会図書館 国際子ども図書館

『令和元年度児童文学連続講座講義録』の刊行に際して

国際子ども図書館では、国立の児童書専門図書館として、児童サービスに従事している図書館員等の方々を対象に、国内外の児童書・児童文学に関する幅広い知識のかん養に資するため、平成16年度からほぼ毎年度、「児童文学連続講座」を開講しています。平成30年度までの過去14回の連続講座では、初回テーマ「ファンタジーの誕生と発展」を始めとして、児童文学に関わる多様なテーマを取り上げてきました。これまでの児童文学連続講座の概要及び講義録については、当館ホームページにも掲載しております。詳しくは、次のURLを御参照ください (<https://www.kodomo.go.jp/study/chair/outline/index.html>)。

令和元年度の児童文学連続講座は、「絵本からヤングアダルト文学まで一児童文学基礎講座」と題し、令和元年11月11日及び12日に実施しました。企画に当たっては、平成31年4月から客員調査員を委嘱している白井澄子先生（白百合女子大学教授）に監修をお願いしました。今の子どもたちは、ゲームやアニメなど本以外のメディアに強く惹かれ、本の楽しみを知らないまま成長することも多いようです。本には手にしたときの感触やページをめくる楽しみがあります。また、本は空想の世界への入り口であり、人生や社会を知る窓でもあります。では、子どもたちに本の面白さを気付かせるためには、どのような本を選び、手渡していったらいいのでしょうか。今回の連続講座では、子どもの成長段階の特徴を意識しつつ、幼い子どもが最初に本を通して世界と出会う絵本、自分で読み始める小学校低学年にふさわしい幼年童話、世界を見る目が広がる小学中高学年向けの児童文学、さらにティーンエイジャー向けのテーマを扱ったヤングアダルト文学について、先生方にお話を伺いました。なお、当館からは「国立国会図書館が提供するデータベース紹介—子どもの本を探すには」と題して、子どもの本を探すという観点から、当館が提供しているデータベースを紹介しました。

本書は、各講師の語り口をそのままに記録した講義録です。各講義録には、講義で使用したレジュメと、講義で紹介された資料のリストを併せて収録しました。様々な御事情から受講することができなかった方、受講した内容を再確認して研究を深めたい方など多くの方々に、本講義録を御活用いただければ幸いです。今回の連続講座が、子どもたちに本を手渡す上での新たな視点を得るきっかけとなることを願っています。

末尾ながら、監修及び講師をお引き受けくださった白井澄子先生、そして講師をお引き受けくださった金原瑞人先生、佐々木由美子先生、細江幸世先生に厚く御礼申し上げます。

令和2年9月

国立国会図書館国際子ども図書館長

堀 純 子

凡例

- 本書は、令和元年11月11日及び12日に国際子ども図書館で開催した「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って」（総合テーマ：絵本からヤングアダルト文学まで—児童文学基礎講座）を基に編集した講義録です。
- 各講師の「レジュメ」、「紹介資料リスト」も併せて掲載しました。「レジュメ」は講義本文の前に、「紹介資料リスト」は講義本文の末尾に掲載しています。それぞれ刊行に際し、必要に応じて改訂を行っておりますので、講義当日に配布したものとは異なる場合があります。
- 「紹介資料リスト」は、講義の中で紹介された資料のリストです。原則として国立国会図書館の所蔵資料の書誌情報を掲載しています。国立国会図書館に所蔵のない資料については、「国立国会図書館サーチ」等の書誌情報を参照しました。
- 「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、当館の請求記号を記載しました。国際子ども図書館が所蔵しない場合は、（東京本館）と付記しました（所蔵状況：令和2年7月現在）。
- 本講義録におけるインターネット情報の最終アクセス日は、令和2年7月1日です。
- 講師の肩書きは連続講座当時のものです。
- 講義等の記録・配布資料等における意見にわたる部分は、講師等の個人的な見解であり、国立国会図書館の見解ではありません。

令和元年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「絵本からヤングアダルト文学まで一児童文学基礎講座」

目 次

『令和元年度児童文学連続講座講義録』の刊行に際して	堀 純子	1
凡例		2
講座概要		4
講師略歴		5
はじめに	白井 澄子	6
この本よんだ？ 小学校中高学年に向けて	白井 澄子	8
ヤングアダルト文学概観	金原 瑞人	30
多彩なテーマで幅広い読者をつなぐ絵本の魅力	細江 幸世	45
幼年童話事始め	佐々木由美子	67
国立国会図書館が提供するデータベース紹介 一子どもの本を探すには一	福田 由香	88
おわりに	白井 澄子	99

講 座 概 要

令和元年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って
総合テーマ「絵本からヤングアダルト文学まで—児童文学基礎講座」

○講義日程 令和元年 11月 11日（月）～12日（火）

	内 容	講 師
11 月 11 日	開講、諸注意、講師紹介	
	はじめに	白井 澄子 (白百合女子大学教授、 国立国会図書館客員調査員)
	この本よんだ? 小学校中高学年に向けて	白井 澄子
	ヤングアダルト文学概観	金原 瑞人 (翻訳家、法政大学教授)
	国立国会図書館が提供するデータベース紹介 —子どもの本を探すには	福田 由香 (国立国会図書館国際子ども図書館 資料情報課主査)
	館内見学	
11 月 12 日	多彩なテーマで幅広い読者をつなぐ絵本の魅力	細江 幸世 (編集者、白百合女子大学非常勤講師)
	幼年童話事始め	佐々木 由美子 (東京未来大学教授)
	おわりに	白井 澄子
	受講者交流及び監修者コメント・質疑応答	
	閉講	

講師略歴

(五十音順、敬称略)

金原 瑞人 (かねはら みずひと)

法政大学文学部英文学科卒業、法政大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程修了、同博士課程単位取得満期退学。1998年4月から法政大学社会学部教授。1993年、『地球を救おう』(ベティ・マイルズ 作)の翻訳で産経児童出版文化賞推薦。特に英語圏のヤングアダルト小説の翻訳、及び内外のヤングアダルト文学の書評を多く手がける。

訳書 『さよならを待つふたりのために』(ジョン・グリーン 作、共訳、岩波書店、2013) 等

監修 『金原瑞人「監修」による12歳からの読書案内 多感な時期に読みたい100冊』(すばる舎、2017)、
『13歳からの絵本ガイドYAのための100冊』(共同監修、西村書店東京出版編集部、2018) 等

佐々木 由美子 (ささき ゆみこ)

幼稚園教諭を経て大学院に進学。白百合女子大学大学院児童文学専攻修士課程修了、同博士課程満期退学。鶴川女子短期大学専任講師、准教授を経て、東京未来大学こども心理学部教授。主な研究分野は児童文化・文学、幼児教育。特に絵本や幼年文学。

著書 『子どもの本と〈食〉 物語の新しい食べ方』(共著、玉川大学出版部、2007)、

『絵を読み解く絵本入門』(共著、ミネルヴァ書房、2018) 等

論文 「幼年文学における食べ物の描かれ方をめぐって 「たべもののおはなしシリーズ」を中心に」(『東京未来大学研究紀要』13、2019.3 所収)、「幼年文学史研究—試論・解題稿—」(『日本児童文学史の諸相 試論・解題稿』、2003.4 所収) 等

白井 澄子 (しらい すみこ)

青山学院大学文学部卒業、ブリティッシュ・コロンビア大学(カナダ)図書館情報学科修士課程修了。立教女学院短期大学助教授、白百合女子大学助教授等を経て、白百合女子大学人間総合学部児童文化学科教授。主な研究分野は英語圏、特にカナダの児童文学。2014年から2016年まで日本イギリス児童文学学会会長。2019年4月から国立国会図書館国際子ども図書館客員調査員。

著書 『赤毛のアン』(シリーズもっと知りたい名作の世界; 10) (共編著、ミネルヴァ書房、2008)、
『英米児童文化55のキーワード』(世界文化シリーズ; 別巻1) (共編著、ミネルヴァ書房、2013) 等

論文 「ヤングアダルト文学のゆくえ—英米のYA文学を概観して(特集 YA(ヤングアダルト)文学)」(『白百合児童文化』17、2008.3 所収) 等

細江 幸世 (ほそえ さちよ)

編集者、白百合女子大学・東京成徳大学非常勤講師。東京女子大学在学中は児童文学研究会で評論、創作を手がける。卒業後、ほるぷ出版に入社。絵本『ルピナスさん 小さなおばあさんの話』(バーバラ・クーニー 作)が編集者としての初めての担当作となる。ジョン・バーニングやエロール・ル・カインなど海外翻訳絵本のほか、「猫のダヤン」シリーズ、『ルラルさんのにわ』(いとうひろし 作)などの創作絵本も担当。その後フリーランスとなり、子どもの本の企画編集、書評、インタビューなどの執筆、絵本についての講義、講演などを行っている。

著作 「編集者座談会 フリー編集者の仕事と魅力」(『絵本bookend』絵本学会機関誌編集委員会、2017 所収)、「『翻訳出版』事情 本作りの現場から(特集 翻訳の舞台裏)」

(『日本児童文学』日本児童文学者協会、57(5)(通号595)、2011 所収)、『13歳からの絵本ガイドYAのための100冊』(共著、西村書店東京出版編集部、2018) 等

はじめに

白井 澄子

皆様おはようございます。白井澄子と申します。どうぞよろしく申し上げます。

今回の児童文学連続講座の総合テーマは、「絵本からヤングアダルト文学まで」ということで、いわば基礎講座と考えております。前は絵本に関する連続講座でしたが、今回はさらに幅広いテーマになっています。絵本からヤングアダルト文学まで、小さいお子さんから高校生くらいまでを含む読者層に、どんな本を手渡していったらいいか、どんな本が街中に出回っているか、いろいろな方面からお話を伺うことができるようにと考えて、この講座を企画いたしました。

受講者の皆さんは、地域もバックグラウンドも、普段お仕事でどんなことを担当していらっしゃるかも、様々だと思います。絵本に関わったり、少し大きな子どもたちの本に関わったりと、それぞれの立場があると思います。今回は幅広いテーマでお話ししていきたいと思いますので、どうぞ耳と心を開いて、様々な可能性を感じ取っていただければと思っています。

一般的な順序としては、「絵本」、次に小学校低学年くらいまでに向けた物語である「幼年童話」、それから小学校中高学年に向けての「児童文学」、そしてもう少し大きくなった中高生向けの「ヤングアダルト文学」とよくいわれますので、その四つに大きく区切って、4人の講師の先生にお話ししていただきます。

講義の順序は、本来なら、読者層の年齢が小さいところから大きいところに順序良く進むと宜しいのですが、講師の先生の御都合もあり、本日11日は私の児童文学の話が最初になります。小学校の中高学年向けの作品と、その受け手である子どもたちの様子について、双方を絡めて話ができればと思っています。そして、続いてヤングアダルト文学のお話です。12日は対象年齢を下げて、絵本の講義と幼年童話の講義があります。4人の講師のお話を聞いて、皆さんの中でシャッフルして、上手につなげていただければいいかなと思います。

全体の講義が終わりましたら、明日の午後には少し時間をとって、皆様で意見交換ができる時間を設けておりますが、それが、ワールドカフェ方式という方法なのだそうです。一所で同じメンバーで話を続けていくのではなく、席を移動していろいろな方と意見交換するのだそうです。私もとても楽しみで、わくわくしています。皆さんもどうぞ楽しみにしててくださいね。

では、講師の先生について簡単に御紹介したいと思います。

まず私は、白百合女子大学児童文化学科で、英米とカナダの児童文学を教えています。普段は学生たちと、古い本の話から新しい本の話まで、様々なテーマを取り上げて話をしています。私自身が児童文学の世界に入ったきっかけは、子どもの図書館に興味を持っていたからです。石井桃子さんや松岡享子さんたちの児童文庫の活動や、子どもに対して書かれた物語をどうやって手渡したらいいかということに関心がありました。そこで、「よし、児童文学をちゃんとやってみよう」と思い立ったのですが、私が勉強していたころは日本で児童文学の講座をもつ大学がごく限られていたので、思い切ってアメリカ、カナダに足を延ばしました。そして、たまたまカナダで面白い先生に出会い、今のようなかたちで児童文学と子どもの図書館を専門

にするようになりました。本日は小学校中高学年を対象にした児童文学についてお話しします。作品から何が読み取れて、どんなふう到手渡していったらいいか、受け取る子どもの様子も含めてお話しできればと思います。

今日の午後は金原瑞人先生に、「ヤングアダルト文学概観」と題して、ヤングアダルト文学について話していただきます。金原先生はヤングアダルト文学を、翻訳を通して日本に紹介してきた先生で、法政大学で教えていらっしゃいます。ヤングアダルト文学というものが日本に定着する前から、海外の作品をたくさん翻訳して、それらを日本に紹介して、大いに活躍してこられた方です。まさに第一人者ですね。私もお話を伺うことを楽しみにしています。今日は基本的な、ヤングアダルトの定義から始まって、様々な本を紹介してくださると思います。

明日は、絵本の話が最初になります。細江幸世先生がお話ししてくださいます。細江先生は、白百合女子大学でも絵本論の講義を担当されています。今回のタイトルは「多彩なテーマで幅広い読者をつなぐ絵本の魅力」ですので、いろいろなお話が出てくるのが期待できます。絵本の魅力は本当に様々あると思います。子どもから大人まで、絵本は多様なかたちで人々を魅了します。細江先生は御自分でも絵本を翻訳されていますし、絵本の編集者もなさっていて、単に絵本研究だけをやっていらっしゃる方ではありません。そういった、実践の立場からの御意見も伺えるかと思い、私も楽しみにしています。

最後に「幼年童話事始め」と題して、佐々木由美子先生にお話しいただきます。佐々木先生は東京未来大学の教授でいらっしゃいます。幼年物語とか幼年童話と呼ばれる、絵本よりちょっと長く、しかしまだストーリーはそんなに複雑でない物語、これは意外と取り扱いが難しいことがあるのです。作品はたくさんありますが、じゃあどんなふう到手渡していったらいいか。読者も、「そろそろ自分で読みたいな」という歳に差し掛かっている子どもたちです。そういった幼年童話の特徴と、子どもに寄り添ってそれを手渡していくという話も伺えるのではないかと思います。佐々木先生は幼稚園で先生をしていらした経験もおありですので、子どもに寄り添った話が、実感をもって皆さんに伝えられていくのではないかと思います。

二日間、非常に密度の高いかたちでお話が進んでいくと思いますが、どうぞ時には肩の力を抜いて、いろいろ吸収していただきたいと思います。こういうお話は、「これを聞いたからすぐにこう生かそう」とはいかないかもしれませんが、おそらく心の中で熟成して、いろいろなかたちで花開いていくと思います。ワインならば、とても芳醇なおいしいワインになっていくのではないかと思います。それを期待して私たちも、皆さんと共に頑張りたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

レジュメ

この本よんだ？ 小学校中高学年に向けて

白井 澄子

幼い頃には絵本の読み聞かせなどで本と親しむ機会があった子どもたちも、小学校の学年が上がるにつれて、本離れしてしまうことが多いようです。本を読むことは一種の人生経験だといえます。それは、読書によって自分の日常では体験できないような事柄に触れたり疑似体験できるからでしょう。子どもたちの視野を広げ、様々な感覚を磨いてくれる読書に出会うきっかけになるような本を紹介します。

きょうは、まず簡単に小学校中高学年の子どもの成長に触れ、次に、20世紀半ばに起きた児童文学の変化（特にアメリカ）を概観した上で、テーマ別に本を紹介します。今回は、子どもにとって身近なテーマである〈家族〉〈友達〉〈成長〉〈冒険〉〈動物と人間〉を取り上げました。（レジュメに記された書名直後の年代は初版出版年です。）

I. 10歳の壁？

1. 10歳前後の子どもたちについて（『子どもの「10歳の壁」とは何か？』渡辺弥生）
2. 子どもの読書傾向

II. アメリカ20世紀前半の作品 vs 20世紀後半以降の作品

アメリカの1960-70年代は児童文学の変化が顕著に表れる時代で、翻訳書が多い日本もその影響を受けています。明るく楽しい作品が書かれた1960年代以前の児童文学から、現実を反映した児童文学への変化、および子どもの描かれ方を概観します。

1. 20世紀前半の児童文学—子どもが活躍する明るく楽しい物語
『オズの魔法使い』（1900）フランク・ボーム
『ひとまねこざる』（1947）H.A.レイ
『エルマーのぼうけん』（1948）ルース・スタイルス・ガネット
『がんばれヘンリーくん』（1950）ベバリイ・クリアリー
2. 20世紀後半以降の児童文学—タブーの崩壊と子どもの内面や悩みを描く物語
『かいじゅうたちのいるところ』（1963）モーリス・センダック
『クローディアの秘密』（1967）E.L.カニグズバーグ
『ガラスの家族』（1978）キャサリン・パターソン
3. ヤングアダルト小説（YA小説）の登場
『チョコレート・ウォー』（1974）ロバート・コーミア

III. テーマにそって

1. 家族
『ふたりのロッチ』（1949）エーリッヒ・ケストナー

『ヘンショーさんへの手紙』(1983) ベバリー・クリアリー
『お引越し』(1990) ひこ・田中
『ロボママ』(2003) エミリー・スミス

2. 友達

『それいけズッコケ三人組』(1978) 那須正幹
『山賊のむすめローニャ』(1981) アストリッド・リンドグレーン
『みそっかすなんていわせない』(1989) ジャクリーン・ウィルソン
『夏の庭』(1992) 湯本香樹実
『ドレスを着た男子』(2008) デイヴィッド・ウォリアムズ

3. 成長

『魔女ジェニファとわたし』(1967) E.L. カニグズバーグ
『魔女の宅急便』(1985) 角野栄子
『ハンサム・ガール』(1993) 佐藤多佳子
『西の魔女が死んだ』(1994) 梨木香歩

4. 冒険

『グリックの冒険』(1970) 斎藤惇夫
『モモ』(1973) ミヒャエル・エンデ
『秘密の島のニム』(1999) ウェンディー・オルー
『ケンスケの王国』(1999) マイケル・モーパーゴ

5. 動物と人間

『ロボ・カランポーのオオカミ王』(1898) E.T. シートン
『ドリトル先生航海記』(1922) ヒュー・ロフティング
『シャーロットのおくりもの』(1952) E.B. ホワイト
『きいてほしいの、あたしのことーウィン・ディキシ어의いた夏』(2000) ケイト・デイ
カミロ

この本よんだ？
小学校中高学年に向けて
白井 澄子



今回は、小学校中高学年に向けて、どんな本を手渡すことを考えていけばいいかというお話です。「この本よんだ？」と、少しざっくりばらんなタイトルを付けてみました。

小学校中高学年に向けて書かれた本は、本当にたくさんあります。しかし一方でこの時期は、読者の子どもが様々に変わっていく年代でもあります。幅はありますが、だいたい10歳前後、小学校3年生から6年生までの年代です。この年代についてよく言われるのは、読書離れです。世の中にはゲームやアニメなど、面白いことがいろいろありますから、本だけに喜びを見出さず、楽しいことに興味を持つのは当たり前のことではあります。そんな中で、どのように子どもたちを読書の楽しみに導いていけばよいかということも含めて、考える手だてにさせていただきたいと思っています。

読書というのは一種の人生体験といえます。大抵の子どもは、自分の住んでいる環境のことしか見えていません。けれども、本の中には、自分と似た環境、あるいは違う環境、様々な主人公が出てきて、いろいろな体験をします。主人公も、人間もあれば、動物もあれば、いろいろなものが出てきます。それらを読んで、「あ、これ、知らなかったな」とか、「こんなふうに見えるといいんだな」という経験をしてほしいと思います。

今日はまず、この10歳前後の子どもの成長と読書について触れます。次に、少し雰囲気が変わりますが、20世紀半ばのアメリカで起きた児童文学の変化に触れます。なぜかといいますと、1960年頃、アメリカの児童文学は、それまでの楽しいものから、シリアスなものへと変化したからです。こうした流れはどこの国にも起こっているのですが、アメリカでそれが非常に顕著に出ているということで、触れておきたいと思います。最後にいよいよ、児童文学の話です。今回はテーマを五つに絞りました。「家族」、「友達」、「成長」、「冒険」、そして「動物と人間」です。いずれも子どもたちが興味を持ち、あるいは自分に引き付けて考えられるテーマかと思います。

1. 10歳の壁？

① 10歳前後の子どもたちについて

『子どもの「10歳の壁」とは何か？』¹という本が、10年程前に話題になりました。この本が出た頃、「9歳の壁」「10歳の壁」ということがいわれました。壁とはつまり、「9歳や10歳くらいまでにはこういうことができないと将来つまづきが出てくるよ」ということで、それでお父さんやお母さん、学校の先生たちは焦っていました。しかしこの本は、そのような言説に対して、「そうではない」と述べています。10歳というのはいろいろな可能性があり、これから伸

1 渡辺弥生著『子どもの「10歳の壁」とは何か? : 乗り越えるための発達心理学』(光文社新書: 514) 光文社, 2011.

びていく楽しい年代なので、「あれをやらなきゃ駄目」、「これができなきゃ駄目」と抑えつけてしまわず、もっと広い視点で見てあげる必要があると説いたのです。それを念頭に置きながら、考えていきたいと思います。

では、10歳前後の子どもたちとは実際にはどんな様子なのでしょうか。例えば、この年代の子どもは小さい子どもから脱皮し、少し大人になる時期です。まだティーンエイジャーの一步手前ですが、意外とティーンエイジャーよりも大人的な感覚が分かっていたり、子どもとは違う何かを感じ取る力が備わっていたりします。その根底には自己意識、つまり「自分はこんな人間だよ」という意識が芽生え始めることが関係しています。

実は自己意識は、一生の中で何度も芽生えます。幼児期もそうですし、大人になっても実は何度も何度も、「私ってこういう人間かしら」、「自分はこれでいいのかな」という問いかけが出てくるのです。10歳頃にはそれが、自分探しというかたちで出てきます。そして、それが児童文学の中に取り入れられることも、結構あります。この自己意識が目覚めてくると、他者との関係を強く意識し、自分と他人はこんなふうが違うのだと考えるようになります。もっと幼い頃にも似た現象はあるのですが、10歳頃になると、もう少し深く考える可能性が出てくるのです。

これに関連して、10歳頃には、友達との関係も非常に重要になります。つまり、親や家族との関係より友達との関係が重要だと考えるようになるそうです。確かに自分も10歳くらいの時、友達との関係をとっても大切にしていたと思います。そして大切にすあまり、友人関係でつまずくと辛いのです。そんなことが作品に描かれることもあります。また、この「自分と他者」という関係が、もう少し広い社会というものにもつながるといことも、見えてくる頃かと思います。

②子どもの読書傾向

このような子どもたちの、読書傾向を見てみましょう。大きくなると、親と一緒に読書をするのがなくなり、自分で読むことが増え、自分で好きな本を選びたいという気持ちも出てきます。皆さんも経験があるかもしれませんが、それが自然なことかと思います。小さい時は大人から本を与えられることが多いでしょうが、少し大きくなってくると、友達に勧められたり、図書館で本を探したりして、面白い本を見つけてきます。親から見ればくだらない本を読んでいることもあるでしょうけれど、このように、自分でやってみたいという傾向が出てくる時期なのです。

また、たくさん読む子と読まない子の差が出てくるのも、この時期かと思います。自分で読む、つまり親が周りにいない環境で読書が行われることも一因かと思います。また、読むという行為、文字を通して想像し、一つの世界を作っていくということがうまくできる子とそうでない子の差が出てくるためでもあるでしょう。これらは、本の勧め方や本に触れるチャンスの作り方で変わっていく可能性もあります。つまり、全体的に考えてみると、読書の好みが分かれてくる時期かと思います。そういうことも、私たちは心に留めたほうがいいでしょう。

また、私が心に留めていることとして、ただ子どもに「こういう本がいいよ」と渡すだけでなく、その本を読むことで何か面白いことがあると伝えられたらいいと思っています。先ほども述べたように、読書はいろいろな経験をさせてくれます。読んだときに主人公に共感し、悩んでいるのは自分だけじゃないなと思ったり、こんな子もいるのかなと面白く思ったり、泣いたり笑ったりして人生の幅が広がり、子どもながらに「こんなに面白い人生だ」と思ってくればいいなと思っています。

2. アメリカ 20 世紀前半の作品 vs 20 世紀後半以降の作品

さて、ここで話題を変えます。20 世紀、子どもの文学に対して、楽しくて面白いもの子どもたちのために作ろうという意識をはっきり持っていたのが、アメリカです。ですから、図書館も非常にたくさんできましたし、図書館が出版界に対して意見を述べたりもしました。主張をしっかり持っている図書館、あるいは図書館員がたくさんいた時代です。そのような背景の中で作られた面白く楽しい児童文学が、20 世紀後半、世の中の流れを受けて変化していきます。その流れを具体的に見てみましょう。

① 20 世紀前半の児童文学—子どもが活躍する明るく楽しい物語

まずは『オズの魔法使い』²、作者はフランク・ボーム (Lyman Frank Baum, 1856-1919) です。1900 年の出版ですから、かなり古い作品です。ボームは序文でこのように述べています。

新しいお話では、きまりきった小鬼や小人や妖精はでてきませんし、身の毛がよだち血も凍るできごとともまったく起こりません。昔の作者たちは、それぞれの物語でおどましい教訓を示すために、このようなできごとを考えたものでした。現代の教育は、道徳も教えます。ですから現代の子どもは、楽しみだけを求めて、ふしぎなお話を読み、すべてのふゆかいなできごとは、喜んで、なしですませます。

このことを心に掛けながら、わたしは、『オズの魔法使い』を、現代の子どもたちを、ひたすら喜ばすために書きました。ふしぎさと喜びを保ち、傷心と悪夢を除いた、現代の妖精物語であることを切望しております。³

このような所信表明をしています。そうして生み出されたのが、この『オズの魔法使い』なのです。

主人公のドロシーという女の子は、カンザス州に住んでいます。カンザスというところは実際に竜巻が多いのですが、ドロシーは竜巻に巻き上げられて、オズの住んでいる国に運ばれてしまいます。そこで、めそめそしている臆病ライオンや、脳みそのないかかし、心がないと思っているブリキの木こりと出会います。そして、みんながそれぞれに抱えている願いを、魔法使いのオズにかなえてもらう旅をします。この物語の面白いところは、実はオズが本当の魔法使いではなかったというところなのです。ですから、魔法の杖をぽんと振ってみんなの願いをかなえるということはできません。どうしたかという、望んでいるものは、「もう持っているじゃないか」と言うのです。例えば、ライオン君が欲しがっていた勇氣。それはもうすでに自分の中にあるじゃないか。勇氣をもって、大変なとき皆を支えてきたじゃないか。脳みそのないとかかし君もそうだ。脳みそがいろいろ考えたから、冒険の旅が成功したんじゃないかと、そのようなことを言ってくれます。ある意味、非常にアメリカ的かもしれません。自分に自信をもって前に進みなさいということです。女の子が率いていく、非常に前向きに進んでいく冒険です。

この他にも、20 世紀前半のアメリカでは、どんどん面白い話が作られていきます。例えば『ひとまねこざる』⁴。子どもがやってみたくと思ういたずらを、おさるのジョージが次々やらかし

2 Lyman Frank Baum, *The Wonderful Wizard of Oz*, George M. Hill Company, 1900.

3 L.F.バウム 作、渡辺茂男 訳、W.W.デンスロウ 画『オズの魔法使い』(福音館古典童話シリーズ; 28) 福音館書店, 1990, p.1

4 エッチ・エイ・レイ文・絵、岩波書店 訳編『ひとまねこざる』(岩波のこどもの本 幼・1・2 年向; 10) 岩波書店, 1954. (Hans Augusto Rey, *Curious George takes a job*, Houghton Mifflin, 1947.)

ます。最近、『おさるのジョージ』という新しい版も出ていますね。

また、『エルマーのぼうけん』⁵。これも非常に有名な話です。エルマーは、空から落ちてしまった竜の子どもが、ジャングルで動物たちにこき使われ、乗り物代わりにされているという話を聞きます。エルマーは竜の子どもを助けに行くのですが、用意したのは虫眼鏡やチューイングガム、くしとりボンなど、変なものばかりです。いよいよどうぶつ島に着いたエルマーは、怖いライオンに遭遇するのですが、「たてがみがもつれていますよ」と言って、くしで整えてリボンを結んでやります。そしてくしとりボンを渡して、ライオンが一生懸命にたてがみを整えているうちに逃げてしまいます。そういうふうには、怖い猛獣に出会っても機転を利かせて危機をしのぎ、最後には竜を解放します。子どもパワー全開のお話です。

そして『がんばれヘンリーくん』⁶。これもタイトルから分かるように、小学生のヘンリーくんの日常を描いた、リアルで面白いお話です。表紙に描かれている犬は、ヘンリーくんのペットになる犬です。犬が欲しくて仕方がないヘンリーくんは、あるとき、がりがりに痩せた野良犬を見つけます。ごつごつあばらが見えているので「アバラー」と名付け、家に連れ帰るのですが、そこで一騒動あります。ノミがいっぱい付いていたでしょうね。両親がどれだけ嫌だと思ったことか。でも結局、なんとか家で飼わせてもらいます。作品にはこのような日々の出来事がつづられています。作者のベバリー・クリアー (Beverly Cleary) は、子どものやることや考えることを非常にうまく表現する作家です。「ヘンリーくん」シリーズのほかにも、「ラモーナ」という女の子のシリーズも有名です。どの作品も、子どもが生き生きと愉快に過ごしており、子どもパワーがすばらしいものだということがつづられています。

② 20 世紀後半以降の児童文学—タブーの崩壊と子どもの内面や悩みを描く物語

ところが 20 世紀後半になっていくと、状況が変わっていきます。最初に御紹介するのは絵本ですが、皆さんもよく御存じだと思います。『かいじゅうたちのいるところ』⁷ という絵本で、作者はモーリス・センダック (Maurice Sendak, 1928-2012) です。主人公のマックスは、機嫌が悪く、家で大暴れをしてお母さんに叱られます。「このかいじゅう」と言われ、夕食抜きで部屋で反省させられます。マックスが部屋にいと、木がよきによき伸びてきて森のようになり、だんだんジャングルめいてきます。マックスはジャングルから船で出奔し、1 年と 1 日かけて、怪獣たちのいる島にたどり着きます。そこで怪獣たちを手懐け、しばらくは王として君臨するのですが、やがてなんとなく、誰かさんのことが懐かしくなってきます。そしてまた船で戻ると、マックスは自分の部屋にいて、そこには食事が準備してあり、まだホカホカと湯気が立っていました——そういうお話です。この作品はいろいろな読み方ができます。例えば、マックスは心の中にある怪獣のような嫌な自分にたどり着き、そして一緒にかいじゅうおどりをして怪獣を治め、そしてまた元に戻るとお母さんへの気持ちも収まっていると読むこともできます。いわば子どもの内面の、中の中まで入っていった話なのです。このような物語はそれまで書かれておらず、非常に新しい試みでした。

次に御紹介するのは『クローディアの秘密』⁸ です。主人公のクローディアは、11 歳なので

5 ルース・スタイルス・ガネット さく、わたなべしげおやく、ルース・クリスマン・ガネット 絵『エルマーのぼうけん』福音館書店、1963。(Ruth Stiles Gannett, illustrations by Ruth Chrisman Gannett, *My Father's Dragon*, Random House, 1948.)

6 ベバリー・クリアー 作、松岡享子 訳、ルイス・ダーリング 絵『がんばれヘンリーくん 改訂新版』学習研究社、2007。(Beverly Cleary, *Henry Huggins*, Morrow, 1950.)

7 モーリス・センダック さく、じんぐうてるおやく『かいじゅうたちのいるところ』富山房、1975。(Maurice Sendak, *Where the Wild Things Are*, HarperCollins, 1963.)

8 E.L.カニグズバーグ 作、松永ふみ子 訳『クローディアの秘密 新版』(岩波少年文庫) 岩波書店、2000。(E.L.Konigsburg, *From the Mixed-Up Files of Mrs. Basil E. Frankweiler*, Atheneum Publishers, 1967.)

先ほどのマックスより年上です。作者のE.L.カニグズバーグ (E.L. Konigsburg, 1930-2013) は、子どもの自分探しをテーマにした作品を数多く書きました。このカニグズバーグも、先ほどのセンダックも、少し前に亡くなってしまって、とても残念に思っています。

さて、主人公のクロードディアは、みんなから「オール5のクロードディア」と呼ばれる、何でもできる子です。けれどクロードディア自身は、みんなにそのように言われることに必ずしも満足していません。そんなのは自分じゃないかもしれない、私ってもうちょっと違うんじゃないかと思っています。そして、この「自分」を見つけるためには、ぜひとも家出をしなくっちゃということで、家出を企画します。けれど、汚いところに家出するのは嫌なので、ニューヨークにある立派なメトロポリタン美術館に家出をしようと決めます。メトロポリタン美術館は博物館でもあるので、古いベッドなどもありますから、そこならば格好良く家出ができるかもしれないと考えたのです。そこで、小金を持っている弟も連れて、そこに寝泊まりし、いろいろ考えてみることにします。ところが、一日経っても二日経ってもなかなか「自分」が見えてきません。やはり、自分探しの旅というのはそうそう甘いものではないのです。クロードディアも一人だけでは「自分」を探せず、もう家出を終えて家に帰らなければいけないかもしれないと思い、さめざめ泣いてしまうのですが、最後には理解ある大人の後押しがあって、彼女なりの成長の一步を踏み出すことができます。このような、一人の女の子が自己を探す心の旅というもの、描かれたのはこの頃が最初です。このような描き方、テーマの見つけ方というのも、非常に新しかったと思います。

続いて、これは少し痛いお話です。家族を扱った、『ガラスの家族』⁹です。これを書いたキャサリン・パターソン (Katherine Paterson) は、家族ものが得意な作家です。この物語の主人公は、表紙の絵でも分かる通り、とても気が強そうな、そしてあまり幸せそうではない女の子、ギリーです。年齢は11歳くらいです。ギリーには実のお母さんはいるのですが、一緒に住んではいません。アメリカではそのような子を、成年に達するまでの育ての親、つまり里親に委託して育ててもらいます。しかしギリーはお母さんが一番だと思っていますから、どの里親さんともうまくいきません。ギリーはある日、新しい里親のところへ委託されます。最初のうちは、そこでもううまくいきそうにありませんでした。けれどもその里親さん、一見したところとてもだらしなく見えるのですが、ギリーのことを非常によく分かってれています。どういうことかという、これまで自分中心で、人に何かをしたことなかったギリーに、自分には人に対してできることがあると自覚させようと取り計らってくれるのです。でも、ギリーはそれがいまひとつ分かっていません。

一つ例を挙げると、里親さんがギリーに、一緒にご飯を食べるから、隣に住んでいる目の不自由な黒人のおじいさんを連れてきてちょうだい、と言います。ギリーは、おじいさんの手を引いてくるなんて嫌だと思うのですが、ちゃんと手を引いて連れてきます。すると、おじいさんからとても感謝されるのです。そのようにしてギリーは、自分にもできることがあると気付き、いろいろな人に感謝されて、少しずつ心を開いていくのです。それでも、ギリーはやっぱりお母さんが一番です。そんなある時、お母さんに会うチャンスができます。しかし会ってみると、お母さんはギリーが思っていたような人ではありませんでした。ギリーと一緒に住みたいなんて、ちっとも思っていなかったのです。それでは元の里親さんのところに戻れるかという、実はそれも福祉社会の落とし穴で、うまくいかないのです。

9 キャサリン・パターソン 作、岡本浜江 訳『ガラスの家族』偕成社、1984。(Katherine Paterson, *The Great Gilly Hopkins*, Thomas Y. Crowell Co., 1978.)

このような社会的な受け皿の話、そしてその中で子どもが揺れ動く様子を、11歳の子どもの目線で書いています。落としどころがどこにあるのか、それは読んでいただければと思うのですが、すごい話ですね。こんな話が書かれるようになりました。20世紀前半の話とは全く違う、非常に難しい問題を突きつけるお話です。

③ヤングアダルト小説（YA小説）の登場

この流れで、ヤングアダルト小説の登場についても少しお話しします。これまで見てきたように、70年代には子どもを取り巻く難しい状況が生じ、それを描いた作品が数多く登場してきます。これがアメリカから出てくるというのが重要です。詳しくは金原先生がこの後にたっぷりお話ししていただきますが、それまで思春期小説とかティーン向け小説と呼ばれていたジャンルに、ヤングアダルト小説という新しい名前が使われるようになり、リアルな現実立ち向かう若者たちを扱った話が増えていきます。

そのリアルな現実とはどういうものかという、20世紀前半の子どもの本では扱われなかった、しかし現実にはたくさんある、タブーといわれるものです。子どもの本で扱ってはいけないタブーというのが、アメリカの出版界には存在します。例えば暴力、飲酒、性の問題、親の離婚、家庭崩壊などで、他にもたくさんあります。しかし、子どもや若い人の周りには、このようなものは、日常茶飯事的にあります。それなのに、それを抜きにして楽しく明るい児童文学を書く。本当にそれでいいのか、というのが、現実に本を作る人や、読む子どもたちの意見でした。このように子どもの本がシフトする中で、ヤングアダルト小説が出てきます。

1作品だけ御紹介します。『チョコレート・ウォー』¹⁰、1974年の作品です。この少し前からヤングアダルトものが書かれるようになりますが、非常に若者の心をつかんだ作品です。作者はロバート・コーミア（Robert Cormier, 1925-2000）というジャーナリストです。彼が記事を書こうとして、若者たちの現状をインタビューしていたところ、若者たちが「僕たちが読めるような本がない」と言い始めました。児童文学はあるんだけど、特に自分の年代や、自分たちを取り巻く状況を書いた本は少ないし、読むものがないんだよねと。コーミアさんは、それもそうだなということで、それじゃあ自分が書いてみようと思案したのが、この『チョコレート・ウォー』です。このお話は、男子校が舞台です。一人の男の子が中心になりますが、学校のいろいろな人物の目を通して、生徒同士や先生と生徒のどろどろした関係が学校の中に渦巻いていることが見えてきます。物語は、その男の子の視点からだけではなく、いじめグループのボスや、いじめグループの手下の視点でも書かれます。複数の視点を織り交ぜながら、この学校で一体何が起きているか、そして先生たちはこの学校でどんなことを考え、生徒たちに何をさせているのかが浮き彫りになります。その先生が、実は汚いのです。いじめグループにいろいろないじめをさせると、生徒は皆いじめグループが怖いので言うことを聞きます。そうすると、先生がわざわざ、ああしろこうしろと言わなくても、学校の中はそれなりに和が保たれていくかもしれない。その様子を先生はじっと見つめている。そんな物語です。

これが当時の若者に非常に受けました。かなり時代性がありますから、今こういう書き方は痛すぎるといわれるかもしれませんが、しかし、これは非常にヒットした作品の一つで、時代をととてもよく表していると思います。

10 ロバート・コーミア 著、北沢和彦 訳『チョコレート・ウォー』（扶桑社ミステリー）扶桑社、1994。（Robert Cormier, *The Chocolate War*, Pantheon Books, 1974.）

3. テーマにそって

さてそれでは、いよいよ本題に入りましょう。今日扱うテーマとして、「家族」、「友達」、「成長」、「冒険」、それから「動物と人間」の五つを挙げました。それぞれのテーマについて、作品を数点ずつ紹介します。

①家族

一つ目のテーマは「家族」です。家族というものは、特に小学校中高学年くらいの子どもたちにとって、やはり一番身近でいろいろな影響力のある人たちだと思います。そんな家族のお話をいくつか挙げてみたのですが、離婚の話が多いです。その痛みを超えて自分と向き合う子どもたちの物語が見えてくるかと思います。その他にも、忙しいお母さんと子どものコミカルなお話なども交えて、お話したいと思います。なるべく現代の作品をお見せしようと思いますが、古いものも、時代によってこんなふう伝え方が違うということで御紹介します。

最初は古いお話を持ってきました。『ふたりのロツテ』¹¹、随分前ですが、映画にもなりました。作者はエーリッヒ・ケストナー (Erich Kästner, 1899-1974) というドイツの作家です。ケストナーは『エーミールと探偵たち』¹² という作品で御存じの方もいらっしゃるかもしれません。『ふたりのロツテ』が書かれたのは1949年、つまり20世紀半ばの作品です。主人公のロツテは、実は双子です。双子のもう一人はルイーゼといいます。二人のお父さんとお母さんは離婚してしまい、一人がお父さん、一人がお母さんに引き取られて育てられています。今二人は9歳ですが、物心付いてからはお互いに会ったことがありません。たまたま二人は同じサマーキャンプに参加し、そこで出会ってしまいます。自分とそっくりな子がいるということで、興味を持って話したところ、自分たちは双子で、お父さんとお母さんが離婚してばらばらになっていることが分かります。二人は、お父さんとお母さんを元の夫婦に戻しちゃおうということで一計を案じ、サマーキャンプが終わったときに入れ替わって家に帰ります。ですが、お互いに性格も生活状況も全然違いますから、ととても苦労します。それが面白おかしく書かれていくのですが、やはり違う環境で違う自分を演じていると、だんだんと苦しい状況が出てきてしまいます。そしてついに、ロツテが体調を崩してしまい、またサマーキャンプで二人が一緒に撮った写真が、偶然ロツテのお母さんの手に渡ります。そこで初めてルイーゼは、自分たちが何をもくろみ、何をしているかを打ち明けます。親はびっくりし、そして、自分たちがどんなに子どもたちを悲しませていたかと気付くのです。そしてもちろん、めでたしめでたしの結末が待っています。

一昔前の物語はこのように、たとえ別れてしまった親でも、子どもたちの努力、子どもパワーで元に戻る可能性があるということを描いています。とても前向きな楽しい物語です。

ところが、そうはいかないのが現在です。次に御紹介するのは、1983年にアメリカで出た『ヘンショーさんへの手紙』¹³です。これは先ほど『がんばれヘンリーくん』や「ラモーナ」シリーズの話をしたベバリー・クリアリーによって書かれた、ちょっと痛いお話です。クリアリーは楽しい作品を書くことが上手なのですが、やはり時代ですね、こういう話も書きました。

主人公はリー・ボッツという少年です。彼は今、お母さんと住んでいます。お父さんは離婚

11 ケストナー 作、高橋健二 訳、ワルター・トリヤー エ『ふたりのロツテ』(岩波少年文庫) 岩波書店、1975。(Erich Kästner, *Das Doppelte Lottchen*, Atrium-Verl., 1949.)

12 エーリヒ・ケストナー 作、池田香代子 訳『エーミールと探偵たち』(岩波少年文庫) 岩波書店、2000。(Erich Kästner, *Emil und die Detektive*, Williams & Co., 1929.)

13 B.クリアリー 作、谷口由美子 訳、むかいながまさ 画『ヘンショーさんへの手紙』あかね書房、1984。(Beverly Cleary, *Dear Mr. Henshaw*, William Morrow, 1983.)

してしまったので、一緒に住んではいません。しかも長距離トラックの運転手なので、一緒に住んでいた時でもお父さんは不在がちでした。このリー・ボッツが通う学校で、皆の好きな作家を選んで手紙を書きましょうという企画がありました。そこで選ばれたヘンショーさんという作家に、彼は手紙を書きます。僕も作家になりたい、どうしたらいいでしょう、という手紙です。するとヘンショーさんから返事が来ます。一番良いのは書く練習をすることで、そのためには、手紙を書いたり日記を書いたりしなさいというのです。リー・ボッツはそれを読んで、ヘンショーさんに宛てて一生懸命に、何通も何通も手紙を書きます。でもヘンショーさんは、あまりのことに辟易したのでしょうか、僕に手紙を書くのではなく、誰かへの手紙のつもりで日記に書きなさい、と提案します。そうして彼は、ディア・ミスター・ヘンショー、つまりヘンショーさんへということで、日記のような手紙を書きつづっていきます。

その中で書かれるのは、学校での出来事だけではなく、彼が別れてしまった両親の元で、何を思っているかということです。お母さんとはうまくやってはいますが、お父さんのことも気になるし、いなくて寂しいのです。お父さんはたまに戻ってきてくれたり、電話をかけてくれたりします。けれどもリー・ボッツにしてみれば、なぜ別れちゃったの、なぜ戻ってきてくれないのという気持ちがあります。それをいろいろなかたちでつづります。たまにヘンショーさんに実際に手紙を出して返事をもらったりもしますが、ほとんどが日記のかたちでつづられます。その中で彼は、書くのがだんだん上手になり、彼の作文が選ばれて文集に載ったりもします。そして、お母さんと話すうちに、お母さんがなぜお父さんと別れなければならなかったのか、お母さんの気持ちが少し分かってきます。お父さんとお母さん、二人はだいぶタイプが違うのです。お父さんは、いつも能天気で、遠くに行かずずっと運転してるのが好き。でもお母さんは一所に留まっていろんなことを考えていたい。そういう違いが見えてきます。リー・ボッツも、いろんなことを書きつづるうちに、自分の気持ちだけでなく、親への気持ちもだんだん整理ができていきます。

ある日、お父さんが久しぶりに戻ってきます。お父さんに「ぼうず」なんて小さい子みたいに呼びかけられた少年は、違和感を覚えます。そして、お父さんは気付かないかもしれないけれど、僕はやっぱり前とはちょっと変わった、成長したんだな、と思うのです。そういう少し大人びたことを、6年生の子どもが考えます。そこで彼は何をしたかという、この表紙に描かれている犬が鍵になります。これは彼が飼っていた犬で、迷子になった時にはお父さんが一生懸命探してくれたのですが、この犬をお父さんに渡します。お父さん寂しいでしょ、一緒にトラックに載せて連れて行っていいよと言って、愛犬を手離すのです。リー・ボッツは書くことによって、自分のことが見えてきて、成長したといえるでしょう。

続いて御紹介するのは日本の作品で、『お引越し』¹⁴です。1990年、ひこ・田中の作品で、これも離婚の話です。主人公は小学6年生の女の子で、お父さんとお母さんが離婚し、お父さんが荷造りをして出ていく場面から始まります。この子もやはり、お母さんと一緒に暮らすようになって、なぜ離婚したのかがとても気になるのです。そして、女の子とお母さんが話す中で、離婚の原因も、ちらっと見えてきます。これは女性ならではの意見かもしれませんが、お母さんは結婚したことによって姓が変わり、食べ物の好みも何となく旦那さんに合わせてしまって、自分が元々好きだったものが何だったか、だんだん分からなくなってしまったと言います。つまり自分が何となく揺らいでしまって悲しく感じるということが、一つの理由だったようなのです。女の子にはその辺りがいまひとつ分からないのですが、お父さんとお母さんに

14 ひこ・田中 著『お引越し』福音館書店、2013。（初版：ひこ・田中 作『お引越し』（Best choice）福武書店、1990。）

はそれぞれに違う生き方があるんだなということが、何となく見えてきます。それが、渦中にいる子どもの目線から、そこはかとなく伝わってきます。語り口はとてもユーモラスですが、ちょっと辛い話です。

このお話の面白い点の一つに、お母さんが女の子に、二人のルールを作らないかと提案するところがあります。そして、家事の分担などについての契約書を作って、二人の間で交わします。もちろんうまくいかないこともあります。調整しながら生活していきます。誰かと一緒に暮らしたり、あるいは友達と一緒に過ごしたりする上では、社会的なルールがありますね。ここは踏み込んじゃいけないとか、これはシェアしなきゃいけないというのは、小学校中高学年くらいになると意識し始めることかもしれません。この作品には、視点を変えると、家庭から広がって社会にもつながる部分もあることが分かります。

次はアメリカの、ちょっとユーモラスな作品です。『ロボママ』¹⁵、英語のタイトルも *Robomum* です。その名の通り、ロボットママのお話です。主人公の男の子は、お母さんと二人家族です。お母さんはロボット研究者として非常に有能なのですが、忙しくてしょうがない。それに、家の中では全然駄目なママです。そのせいで、いろいろなことがいい加減になっていたり、面倒をちゃんと見ていなかったりして、男の子はいつもいらいらしたり、悲しい思いをしたりしています。それをお母さんに訴えると、お母さんはロボットママを連れてくるのです。ロボットママは完璧なのですが、やることがとても四角四面な感じ。男の子の要求にいろいろ応えてくれますが、でもちょっとなあ…というところがあります。実際の駄目なお母さんとロボットのママ、どっちがいいでしょうという面白い問いかけがなされます。

家族をテーマに、この話はうまくできているなと思ったものを拾っていったら、思いがけず離婚の話が多くなってしまいました。皆さんもいろいろと読んでいただくといいと思います。

②友達

二つ目のテーマは「友達」です。これも子どもたちの間では非常に身近なテーマですね。お話の中には、安心できるいつもの友達や、親より大切な友達など、いろいろな仲間が出てきます。それから、友達の中で痛みを分かち合うお話や、中には友達以上の、恋愛も関わるようなお話も御紹介します。どんなお話が出てくるか見ていきましょう。

最初に御紹介するお話、これは少し古いですがよく知られていて、子どもたちも手に取りやすい本だと思います。1978年に那須正幹が書いた『それいけズッコケ三人組』¹⁶です。シリーズになっています。表紙の三人が主人公で、すごくやんちゃなハチベエと、がり勉型でいつも勉強しているのに成績の悪いハカセ、それからとても人が良くて体の大きいモーちゃんの三人組です。この三人組がいろいろな事件に遭遇したり、おかしなことをやったりしていきます。いつも仲良しで、安心できる三人組です。

面白いエピソードを一つだけ御紹介します。ハカセがいつものようにトイレにこもって一生懸命勉強していると、家に泥棒が入ってきて、ハカセはトイレから出られなくなってしまいます。それでどうしたかという、トイレットペーパーに助けを求める手紙を書いて、トイレの窓からびよんと外に出して助けを呼び、ハチベエとモーちゃんに助けてもらうのです。そういったいろいろなエピソードが出てきます。何があってもこの三人がいれば安心できるという、

15 エミリー・スミス 作、もりうちすみこ 訳、村山録子 絵『ロボママ』（文研ブックランド）文研出版、2005。（Emily Smith, illustrated by Georgie Birkett, *Robomum, Young Corgi*, 2003.）

16 那須正幹 著、前川かずお 絵『それいけズッコケ三人組』（ポプラ社文庫）ポプラ社、1983。（初版：那須正幹 作、前川かずお 絵『それいけズッコケ三人組』（子ども文学館）ポプラ社、1978.）

あつ
篤い友情が描かれています。

次は『山賊のむすめローニャ』¹⁷です。これが先ほど、友達を一步超えたところまで行くとお話した作品です。1981年に、スウェーデンのアストリッド・リンドグレン（Astrid Lindgren, 1907-2002）が書いたものです。リンドグレンは『長くつしたのピッピ』¹⁸でも有名ですね。この『山賊のむすめローニャ』はNHKでもアニメ化されたので、御存じの方も多いと思います。

主人公のローニャは山賊の娘です。お父さんはとっても怖い山賊ですが、ローニャにはとても優しく、ローニャのことは目の中に入れても痛くないくらい、かわいくてしかたがありません。ローニャは、子どもの頃から山賊たちに囲まれてお城の中で生活しており、その一所しか知りませんでした。しかしある時、お城の反対側に別の山賊が住みついて、山賊同士でいがみ合いが始まります。この別の山賊の方にも、ローニャと同じような年齢の男の子がいて、二人の間にはだんだんと交流ができます。ローニャはなかなか積極的な女の子で、地下道を掘り、大きな石を除けて、二人の秘密の通路まで作ってしまいます。二人は秘密裏に付き合いを続け、やがてはきょうだいの契りを結ぶようになるのですが、これが親にばれてしまいます。そこで二人は、森に住むからといって家を出るのです。季節は間もなく冬です。最初のうちはよかったのですが、食糧もだんだんと尽きていきます。雪も降ってきて、いよいよ冬がやってきます。それでも二人はこのまま別れないで一緒にいようね、と約束するところで、お父さんとお母さんがやって来ます。二人の気持ちは分かったから家に帰りなさい、と二人の仲を認めてくれて、山賊同士もいがみ合いを止めて強力な山賊連盟を作っていきます。

敵対する二家族と、二人が共通の楽しみを持ったり、大変なことを乗り越えたりする様子が、ロミオとジュリエットの愛情物語を思わせて、なかなか面白い話に仕上がっています。小学校高学年くらいになれば、こういう話も面白く読めると思います。

続いて、これまた全くタイプの違う現代的なお話です。『みそっかすなんていわせない』¹⁹。イギリスのジャクリン・ウィルソン（Jacqueline Wilson）という、非常に人気のある作家が書いたものです。みそっかすというのは、はぐれ者ということですよ。末っ子や、集団の中で駄目な子のみそっかすと言ったりしますが、そんなふうにはいわせないというお話です。

主人公は、4年生のジョーンという女の子です。この子は両親が離婚していて、お母さんとお姉ちゃんと三人暮らしです。なかなか活発で、才気煥発なところもあるのですが、勝手な行動が非常に多いせいもあって、ややみそっかす的なところがあります。ある日、この子の学校で、『ハーメルンの笛ふき』のお芝居をすることになります。ネズミがたくさん出てくるお話ですね。先生はその中の良い役をジョーンに割り当てようとしたのですが、ジョーンは上の空で聞いていません。それで結局、ジョーンは端役の、ドブネズミの役をあてがわれてしまいます。他にもドブネズミ役になったのは、やっぱりクラスの中でみそっかす的な存在の子たちばかりでした。言うことを聞かない子、騒がしい子、おとなしすぎる子、口を利かない子、そしてこのジョーン。他にも何人もいますが、集まってもまとまりがなく落ち着きません。そこでジョーンは、こんなにみそっかすばかりが集まってるんだったら、みそっかす連盟として頑張ろうじゃないと言って、学校のお芝居とは別の、自分たちのお芝居を作り始めます。そ

17 アストリッド・リンドグレン 作、大塚勇三 訳『山賊のむすめローニャ』（岩波少年文庫）岩波書店、2001。（Astrid Lindgren, *Ronja rövardotter*, Rabén & Sjögren, 1981.）

18 アストリッド・リンドグレン 作、尾崎義 訳、山崎英介 絵『長くつしたのピッピ』（国際アンデルセン大賞名作全集；3）講談社、1969。（Astrid Lindgren, illustrated by Ingrid Nyman, *Pippi Långstrump*, Rabén & Sjögren, 1945.）

19 ジャクリン・ウィルソン 作、ニック・シャラット 絵、小竹由美子 訳『みそっかすなんていわせない』（チア・ブックス；2）偕成社、1995。（Jacqueline Wilson, *The Left-outs*, Blackie Children's Books, 1989.）

れが結構面白いので、皆それに加わっていきます。もちろん、いろいろな子たちがいるので、一筋縄ではいきません。そこで、自分たちでルールを決め、それを守って、うまくいくようになります。そうしていよいよハーサルの時、ジョーンたちは自分たちのお芝居を披露します。まるで悪魔のようにネズミたちが飛び回るので、あまりに凄まじくて先生たちはびっくりしてしまいます。それでも、先生たちはみそっかす連盟の良さを認めてくれて、それを生かして『ハーメルンの笛吹き』を盛り上げることになり、お芝居は大成功で終わります。

このお話では、お芝居に向けた皆の意気込みや、一丸となっていく様子が、とても面白く描かれます。しかも、その中で、例えば口を利かなかった子が、ピンチの時にとっさに良いアドバイスをしうまくいくという場面もあって、仲間のパワーでとても面白いお芝居ができていく様子が分かります。これは、仲間ただ集まっているだけではなく、何かに向けて頑張るお話です。また、ジョーンたちの学校での様子は、読者の子どもたちにとっても自分たちの日常とつながって見えてくるものと思います。

さて、先に進みましょう。『夏の庭』²⁰、これは日本の作品です。作者は湯本香樹実で、1992年に出ました。これも映画になりましたので御存じの方も多いと思います。

三人の幼馴染の少年と、その三人が見つめる一人の老人が登場します。少年たちの中の一人のおばあちゃんが亡くなったのをきっかけに、彼らは死ぬということに関心を持つのです。死ぬとどんなふうになるんだろうって。そんなとき、近所にある一軒の家におじいさんが住んでいて、その様子が変わったということに気が付きます。家は掃除されていなくて汚い。おじいさん自身もひげも剃っておらず、がりがり、だらしない格好をしている。あのおじいさん、残りの命も短いんじゃないか…そんな話が出てきます。そうして三人は、毎日毎日おじいさんを観察しに行きます。すると、おじいさんの生活が本当にちゃんとしていないということが分かってきます。食事あまり栄養のあるものを食べていないようです。そこで、三人の中の一人がお魚屋さんの子なのですが、家からお刺身を持ってきて、おじいさんにこっそり差し入れたりもします。

そうしていると、ついにおじいさんにばれてしまいます。叱られもするのですが、なんとおじいさんは、三人を使って掃除をさせるわ、ごみを捨てに行かせるわ、あれやこれやとこき使います。三人はそれでも、クラブ活動を休んでまでも、おじいさんのところに行くのです。おじいさんはだんだん小ざれいになり、食事もちょうと取るようになり、三人にスイカまでごちそうしてくれます。そして、自分の若かった頃のことなど、いろいろな話をしてくれます。面白い交流が生まれてきたある日、おじいさんはぽっくり亡くなります。

三人とおじいさんの関係は、単なる子どもと老人のつながりを越えた、一種の友情とも見ることが出来ます。また、人の生と死をキーワードに、三人は普通では持てないような篤いつながりを持った、と読むこともできるかもしれません。このような奥の深い話も、小学校高学年くらいになれば読めるでしょう。

最後は、イギリスの作家が書いた比較的新しい作品です。『ドレスを着た男子』²¹、作者はデイヴィッド・ウォリアムズ (David Walliams) という変わった名前です。本名はウィリアムズ (Williams) なのですが、もじってウォリアムズにしたそうです。喜劇役者でもあり、喜劇作品を書く面白い作家でもあります。『ドレスを着た男子』というタイトルも面白いのですが、一般的な概念と違うことをする子どもを人はどういうふうに見るか、そのように見られた子ど

20 湯本香樹実 作『夏の庭: The friends』(Best choice) 福武書店, 1992.

21 デイヴィッド・ウォリアムズ 作, クエンティン・ブレイク 画, 鹿田昌美 訳『ドレスを着た男子』福音館書店, 2012. (David Walliams, illustrated by Quentin Blake, *The Boy in the Dress*, HarperCollins, 2008.)

もはどうか、友達はその子をどう見るかということが描かれた作品です。

主人公の男の子は、お父さんとお兄さんと暮らしています。お母さんは、お父さんと大げんかした挙げ句に家を出ていってしまいました。お父さんがお母さんのものを全部焼き払ったので、家にはお母さんのものは何ともありません。あるとき男の子は、コンビニで偶然、VOGUEというファッション誌を見かけます。ばらばらと見たところ、なんと、お母さんが着ていたすてきなワンピースとそっくりのものが目に飛び込んできました。懐かしさとともに、彼は、自分はファッションに興味があるんだと気づきます。そしてその雑誌を買ってベッドの下に隠しますが、すぐにお父さんに見つかり、叱られてしまいます。その後、あることで男の子は学校で居残りさせられるのですが、一緒に居残りをさせられた女の子が、なんとファッションスケッチを描いていたのです。男の子が話しかけるとその子は、「私ファッションに興味があるの」と言って、家でもたくさん服を作っているから見に来ないかと誘ってくれます。女の子の家にいき、女の子が作ったドレスを着てみたところ、とてもよく似合います。そこで女の子は、化粧をして学校に行っても絶対に誰にも男の子本人だとは分からないと言って、二人は実際に実行してしまうのです。最初はうまく行くのですが、結局先生に見つかってしまい、男の子はなんと退学になってしまいます。

実はこの男の子、学校一のサッカーの名選手なのです。サッカーの試合が近づいているのに、この子がいなければ勝てないということで、友達は何心配して家に呼びに来ます。けれども男の子のお父さんは、だめだと言って行かせてくれません。

試合の日、男の子は外出を許されてスタジアムに行きますが、試合には出られず、見ていることしかできません。チームはめために負けそうです。そこに例の女の子がやってきて、なんと女の子が作ったドレスを着てサッカーをしたらと提案するのです。男の子とチームメイトは、ドレス姿で試合に出ます。みんなひらひらとしたドレスでサッカーをし、試合は大勝利に終わります。最後には先生たちも、自分たちが男の子のことを色眼鏡で見ていたと認めてくれます。

お笑いのような話ですが、この話を通じて、男の子はこういうもの、女の子はこういうものという社会通念をおち破ることや、変わったことをする子や変わった興味をもつ子を友達がどういうふうに見るかといったことも見えてきます。男の子の仲間たちは、あいつ変な格好してるけど大丈夫だよと歓迎してくれます。そういったとても面白い展開がある話です。

友達をテーマにした話の中にも、離婚を扱った話が結構入っていたのですが、友達というのは熱いものがあったり、支えてくれたり、互いに違っていてもちょっとした配慮でうまくいくものだというのが見えてくるといいなと思います。

③成長

三つ目のテーマは「成長」です。非常に大きなテーマですが、自分探しや、何かを克服し成長するお話はたくさんあります。その中には、自分探しを通じて自分を理解するだけでなく、他者を理解することにも通じるものもあるかと思います。ところで、こうして挙げてみると、不思議なことに「魔女」と付く作品が多くなってしまいました。成長というのは、魔法がないと、そうスムーズにいかないのかもしれませんが。

最初に紹介するのはアメリカの作品『魔女ジェニファとわたし』²²です。1967年、ちょっと古い作品です。これを書いたのは、『クローディアの秘密』でも御紹介したE.L.カニグズバー

22 E.L.カニグズバー 作、松永ふみ子 訳『魔女ジェニファとわたし 新版』（岩波少年文庫）岩波書店、2001。（E.L.Konigsburg, Jennifer, Hecate, Macbeth, William McKinley, and Me, Elizabeth, Atheneum Publishers, 1967.）

グです。実はこの2作、同じ年に出版されました。カニグズバーグは、これら2作で一気に作家デビューし、さらに2作ともがアメリカの児童文学で最高の賞と言われるニューベリー賞の候補になり、『クローディアの秘密』が見事ニューベリー賞を受賞したという変わり種です。

この『魔女ジェニファとわたし』も非常に面白い作品です。ジェニファの方はとても利口な子なのですが、ちょっと皆から浮いていて、自分を魔女だと言っています。「わたし」ことエリザベスは、この地域に引っ越してきたばかりでまだ友達がいません。どちらも割と孤独な二人です。二人は出会って、ジェニファがエリザベスに、「魔女修行に加わる？」と声をかけます。そして少々強引な誘いでしたが、エリザベスは友達も欲しいので、やってみることにします。修行にはいろいろな課題が出されます。例えば、生卵を1週間毎日毎日食えること。西洋人にとってこれはきついです。それから、パーティに呼ばれてもみんなとのゲームには加わらないこと。そんな課題がいろいろ出て、エリザベスはそれを何とかこなしていきます。二人は順調に魔女修行を続けるのですが、あるとき、飛び葉を作って空を飛べるようにしようじゃないかという話になります。薬草などを集めて、切って溜めておいた自分の爪と一緒に鍋でぐつぐつ煮ます。そして最後に、二人で飼っていたヒキガエルを入れなければいけません。けれどエリザベスは、名前まで付けて二人で飼っていたヒキガエルを、鍋に入れたくはないのです。今までずっとジェニファの言いなりになっていたエリザベスは、そこで初めて反抗し、ヒキガエルを解放してやります。ヒキガエルはそのままぴよんぴよんぴよんと逃げてしまい、そして二人の間にも溝ができてしまいます。

この後、二人は辛く寂しい思いをしますが、しばらくするとジェニファがエリザベスの家にやって来て呼び鈴を鳴らし、エリザベスはドアを開けて、仲直りします。

とても個性的なジェニファと、個性は弱いけれど内にはしっかりしたものを持っているエリザベス。この二人が出会い、お互いが自分自身や相手を見つめ受け入れることで、友達になっていきます。自分一人で成長するのではなく、誰かを受け入れることで、一緒に成長しなければならないということを語った物語です。

次は日本の作品で、『魔女の宅急便』²³です。1985年に出た、角野栄子の作品です。主人公のキキは13歳ですので、ヤングアダルト向けに入れてもいいかもしれませんが、少し年齢の低い子でも読めると思います。

キキは魔女の血を引く女の子です。魔女は13歳になると、家を離れて自分一人で生活を始める修行の旅に出なければいけません。キキはなかなか修行に出ず、お母さんも心配していたのですが、ある日やっと黒猫のジジを伴って、ほうきに乗って修行に出ます。そうして見つけた小さな町で、魔女の宅急便屋さんを開くのです。ちいさなプレゼントを誰かに届けてあげたり、時計台にほうきで飛んで行って、大晦日に鐘を鳴らす時計の時刻を合わせてあげたり、宅急便屋さんといいつつも、いわば何でも屋さんをします。

その中で、手紙を運ぶとても面白いエピソードがあります。その手紙は、一人の女の子から一人の男の子に宛てて書かれたものです。女の子に頼まれたキキは、配達中にその手紙の中身が気になって気になって仕方がありません。それで、いけないとは知りつつも、こっそり読んでしまいます。するとそこには、かわいらしい初恋の詩が書いてありました。けれど読んで途中で、手紙が風で飛んで行ってしまいます。キキが何とかその内容を思い出して相手の男の子に届けると、男の子はちゃんと女の子の気持ちを分かってくれて、二人はお友達をちょっと超えた仲になるのです。

23 角野栄子 作、林明子 画『魔女の宅急便』（福音館文庫）福音館書店、2002。（初版：角野栄子 作、林明子 画『魔女の宅急便』福音館書店、1985。）

このように、キキは1年くらいの間にいろいろな経験をし、成長します。その中には恋心も入っていて、後にボーイフレンドになるトンボさんとの出会いも描かれています。人の役に立つことで多様な経験をするキキの、大きな成長の話です。

続いて、次も日本の作品です。『ハンサム・ガール』²⁴、1993年に佐藤多佳子が書きました。表紙を見て分かる通り、野球大好き少女、二葉の話です。女の子ながらにサウスポーの非常に上手なピッチャーで、男子の野球チームに入りたくて認めてもらいます。もちろんチームにいる男子は面白くない。でも試合をしてみると、男の子のピッチャーは降板させられて、この子が代わりに登板して活躍します。しかし、そこで二葉の悪い癖が出てしまいます。良いピッチングをすると、思い切りガッツポーズしてしまうのです。そんなことしたら降ろされたピッチャーがかわいそうじゃないかと皆は言うのですが、思わず出てしまいます。そんな二葉も、最初の頃は良かったのですが、試合を重ねるごとにスランプ状態になり、落ち込んで、もう辞めようかなと思ってしまいます。そんな時に助けてくれるのが、降板させられたピッチャーの塩見君です。塩見君は二葉にいろいろと指導をしてくれて、二葉もそれを素直に受け入れて練習し、伸びていきます。最後にはチームが一丸となり、勝つことができるという話です。

二葉は、自分だけが能力があって順風満帆というのではなく、挫折を味わい、その中で塩見君がどんな思いでいたかなど、互いの立場の違いを知ります。一方の塩見君も、降板させられてもチーム全体を見て、お互いに良いものをシェアして良いチームに育てていくことが大切だと考え、二葉に必殺技を教えます。二葉と塩見君、どちらにも成長があるのです。

『ドレスを着た男子』もそうでしたが、男女の役割や世間の通念を覆すという点も、この作品の面白さの一つです。また、一人だけが成長するのではなく、他人のことも意識して、それが互いの成長につながるという見方もできます。

最後の作品は『西の魔女が死んだ』²⁵、梨木香歩の作品です。これも少し年齢が上の読者に向いているかなと思います。

『西の魔女が死んだ』は、いじめで登校拒否になってしまった女子中学生、まいのお話です。まいはしばらくの間、イギリス人の祖母と共に住むことになります。家族はこのおばあさんに「西の魔女」とあだ名をつけていました。おばあさんはまいにあることを伝授します。この家にいる間は、何でも自分で決めて自分でやり遂げなさい、そして自然と親しんでいろいろなことをしなさいと伝えるのです。それが一つの魔女修行なのですね。おばあさんの生き方はなかなか筋が通っていて、それを孫のまいが学んでいきます。まいはおばあさんのことがとても好きで、二人はとても仲良く暮らしていたのですが、ちょっとしたことで気持ちのすれ違いが生まれてしまいます。まいはそのまま実家に戻り、転校し、うまく自分の生き方を見つけるのですが、それはおばあさんの「自分をもって生きていく」という言葉が支えになっています。いじめられると、本当の自分なんて分からなくなってしまいます。おばあさんとの生活を支えに、本当の自分を取り戻すプロセスが、まいの中であったと思うのです。

また、おばあさんとのやり取りの中で、死についての話題が出てきます。おばあさんは、まいと別れてしまった2年程後に亡くなってしまうのですが、まいはその経験をもとに成長していきます。この作品の味わい方はいろいろあり、「成長」と一括りにする必要はないとも思います。

魔女めいた作品も含めいろいろな作品が出てきました。子どもたちは人との付き合いを通し

24 佐藤多佳子 作、伊藤重夫 画『ハンサム・ガール』（フォア文庫；C143）理論社、1998。（初版：佐藤多佳子 作、伊藤重夫 絵『ハンサム・ガール』（童話パラダイス；10）理論社、1993。）

25 梨木香歩 著『西の魔女が死んだ』小学館、1996。（初版：梨木香歩 著『西の魔女が死んだ』楡出版、1994.）

て、いろいろなきっかけから成長していくということが見えてくるかと思います。

④冒険

四つ目のテーマは「冒険」です。冒険というのは児童文学の底辺を流れる、子どもたちが大好きなテーマかと思います。わくわくはらはらする冒険もありますし、困難を乗り越える勇気が問われる冒険もあります。また、冒険物語には昔から、宝探しというのが付きものです。19世紀に書かれた『宝島』²⁶などはまさにそうです。現代の冒険の中でも、いわゆる金銀財宝という宝物を見つけるのではなくても、なにか人生の宝になるものが見えてくるかもしれません。

最初に紹介するのは日本の作品です。1970年に出た、斎藤惇夫の『グリックの冒険』²⁷です。これはシマリスの冒険の物語です。シマリスのグリックはペットとして飼われていたのですが、あるとき、自分の故郷はるか遠くの北の森にあると知ります。グリックはその森に行ってみようという思いに駆られ、冒険の旅に出ます。旅の途中からはもう1匹、メスのシマリスの「のんのん」が仲間に加わります。のんのんは芯がしっかりしたリスなのですが、足が悪く、時々とても辛そうな様子を見せます。それでも健気に、グリックと共に旅を続けます。旅の途中、ドブネズミたちの戦いに加わるようになったり、猛禽類や怖いネコに遭遇したりと、生きるか死ぬかの非常に厳しい冒険をします。加えて、激しい天候にも見舞われます。もう駄目かというときに、グリックはようやく北の森にたどり着き、たくさんのシマリスたちが歓迎してくれるというお話です。本当に、冒険の醍醐味が満載されたお話です。グリックの勇気や、グリックとのんのんが力を合わせて乗り越えていくさまも、宝と呼べるかもしれません。

次は『モモ』²⁸、有名な作品ですね。作者はドイツのミヒャエル・エンデ (Michael Ende, 1929-1995) です。ミヒャエル・エンデは面白いファンタジー作品をたくさん書いていますが、『モモ』もその中の一つです。ある町に、不思議な女の子がやってきて住み着きます。その子は独りぼっちなのですが、その子としゃべるとみんな心が和んで、なんだか悩みが消え心が落ち着いていきます。そういう不思議な、聞き上手の女の子です。この町はそれまでとてもうまくいっていたのですが、ある時、時間泥棒が現れます。そして、町の人たちに、「あなたたちの時間の内、ちょっとした暇を節約して時間銀行に預けておくと、必要な時に引き出して楽しむことができますよ」と声をかけます。皆はその気になって預けるのですが、預けた人は自分の時間がどんどん無くなり、とにかくあくせくするようになり、自分を見失っていきます。そうして町中がかりかりした様子になってしまいます。そんなとき、モモのもとへ不思議なカメがやってきます。そのカメは、しゃべらない代わりに、背中に文字が出てくるのです。モモはその文字に従って、カメに連れられ、時間を司るマイスターのところにとどり着きます。マイスターはモモに、君が時間泥棒を倒して、時間を取り戻すことができる唯一の人間だよと言い、モモは不思議な冒険をすることになります。そうして、モモの活躍によって、ようやくみんなの元に時間が戻っていき、時間泥棒は皆やつつけられるというお話です。活劇的な冒険はありませんが、ちょっと不思議な冒険で、また、寓話的とも言えるかもしれません。現代の人間を風刺しているとも考えられますね。

続いては『秘密の島のニム』²⁹です。オーストラリアのウェンディー・オルー (Wendy Orr) の作品です。これは冒険というより、秘密の島でサバイバル生活をしている親子の話です。冒

26 Robert Louis Stevenson, *Treasure Island*, Cassell & Co, 1883.

27 斎藤惇夫 作、藪内正幸 画『グリックの冒険 新版』(岩波少年文庫) 岩波書店, 2000. (初版: 斎藤惇夫 作、藪内正幸 画『グリックの冒険』(新少年少女教養文庫; 27) 牧書店, 1970.)

28 ミヒャエル・エンデ 作、大島かおり 訳『モモ』(岩波少年文庫; 127) 岩波書店, 2005. (Michael Ende, *Momo*, Thienemann, 1973.)

29 ウェンディー・オルー 著、田中亜希子 訳『秘密の島のニム』あすなろ書房, 2008. (Wendy Orr, *Nim's Island*, Allen & Unwin, 1999.)

険物語では、島に流れ着いてサバイバル生活をするというのが伝統的な展開ですが、これはそれを現代的にアレンジした話です。ちなみに、現代の話なので、パソコンも使えるしメールも送れます。

主人公のニムという女の子は、海洋生物学者のお父さんと、小さな島に人知れず住んでいます。お父さんはその島で研究をしています。なぜそんなところに二人で隠れて住んでいるか。それにはニムのお母さんが関係しています。お母さんも研究者でした。海洋生物の研究のためにクジラのお腹の中に入って調査をしていた時に、観光船がやってきて、そのクジラを追い回したのです。クジラはびっくりして海の中に潜ってしまい、お母さんもそれっきり出てこない…。それでニムとお父さんは、観光船がやってこないところに住もうということで、人には内緒の場所、秘密の島に住んでいるのです。

ある日お父さんが研究で島を離れることになり、ニムはこの島で、一人でサバイバル生活を送らなければいけなくなります。そんな中、あるメールが来ます。送り主は、とある冒険小説作家です。ニムたちのことを漏れ聞いたので、自分の作品のために島のことを教えてほしいと言われ、ニムはその作家さんとやり取りを始めます。その間にも、火山が噴火したり、ニム自身がけがをしたり、島に来た観光船から一生懸命動物たちを守ったりと、ニムは一人で奮闘します。ニムが大変なことになっていると伝えると、作家さんも、それじゃ私も助けに行かなければいけないと言って、人に知られずに何とかこの島にたどり着こうとするという、スリリングなお話です。この話も映画になっています。冒険の要素が現代風のお話の中に入っている、楽しんで読めるお話です。

最後、これもなかなか面白いお話、『ケンスケの王国』³⁰です。1999年、マイケル・モーパールゴ (Michael Morpurgo) というイギリスの作家が書いた、比較的新しい作品です。ケンスケとカタカナで書かれていますが、日本人かなと思いますよね。そうなのです。

このお話の出だしは、典型的な海洋冒険小説です。主人公の少年は、家族とヨットで冒険の旅に出ているのですが、ヨットから投げ出されてしまいます。少年は見知らぬ島に漂着するのですが、気付いた時には浜辺に引き上げられていました。次の日に目が覚めると、近くに食べ物と水が置いてあります。つまり、島には少年以外の誰かがいるということです。それをありがたくもらって、助けを呼ぶためののろしを上げようとしたところ、一人の不思議な東洋人が現れます。その東洋人の男は言葉が通じないのですが、とにかくしきりに「ダメダ」と合図をするのです。少年はなんでだろうと反発を覚えるのですが、従います。それ以降、二人は付かず離れず別々の場所に住み、それぞれサバイバル生活をしていきます。相手のことはお互いに分かりません。けれどもその男は時々やってきて、あれをしてはダメ、これをしてはダメという仕草をします。その中の一つに、海に勝手に入ってはいけないというのがありました。少年はそれを無視して海に入り、途端にクラゲにやられ、数日間生死の境をさまよいます。

ようやく元気になった少年は、一心に世話をしてくれたその東洋人と、片言でやり取りをします。そして、その男がケンスケという元日本兵であること、一人でこの島に隠れ住んでいることを知ります。ケンスケは、自分はこの島に残る、日本に帰るつもりはないと言って、その理由を話してくれます。この島の中にはオランウータンなどのいろいろな野生動物が住んでいて、密猟者を追い払い動物たちを守るために、自分はここでずっと生きていくのだと、ケンスケは一生懸命伝えます。同時にケンスケは少年に、君は帰りたいだろうと言って、最後には少年がのろしを上げるのを手伝ってくれます。

30 マイケル・モーパールゴ 著、佐藤見果夢 訳『ケンスケの王国』（評論社の児童図書館・文学の部屋）評論社、2002。（Michael Morpurgo, illustrated by Michael Foreman, *Kensuke's Kingdom*, Heinemann Young Books, 1999.）

このように、初めはこれぞ冒険物語というかたちで始まり環境問題につなげていくという、現代的なメッセージをもつ作品です。モーパークはヒューマニズムあふれる作品を書く人ですが、この話もそれがよく表れています。あとがきでは、この本を書いたきっかけの一つとして、ケンスケのような残留日本兵についても言及しています。とても良くできた作品だと思います。

⑤動物と人間

最後のテーマは「動物と人間」です。動物たちの営みを見てみると、人間もいろいろと学ぶところがあります。また、動物は人の心を開くともいわれています。例えば、動物を病院に連れていくと、病気の人たちは心が解放されて良い効果があるとされています。ではさっそく動物と人間の物語を見てみましょう。

まずは有名中の有名、『オオカミ王ロボ』³¹です。リストに挙げたもの以外にも、いろいろな訳が出ていますね。書かれたのは1898年、19世紀後半で、作者はアーネスト・シートン (Ernest Seton, 1860-1946) です。幼少期にイギリスからカナダへと渡り、その後アメリカで博物学者として活躍した人です。このロボの話は、彼の経験を基に書かれたものです。

ロボは、人間から見れば最悪のオオカミです。非常に賢く、群れを率いて牧場の家畜を食べてしまいます。それを何とか捕まえようと、一人の動物学者が呼ばれます。その学者はロボの生態を詳しく観察するうちに、ロボの賢さが驚異的なものであるということを知ります。しかし同時に、ロボに連れ合いがいることも分かります。動物学者はその連れ合いを捕獲し、殺します。それによって精神が狂ったロボは、ついに捕まってしまう。人間と動物の対立を扱った話ではありますが、それと同時に、動物同士の愛が伝わってくる話ですね。動物の話の中では必ず読んでほしいなというものの一つです。

次は『ドリトル先生航海記』³²です。主人公のドリトル先生は動物の言葉を話すことができます。それでいろいろな事件が解決していったり、気持ちが分かってもらえなくて困っている動物たちのことを助けたりします。これも夢のような話ですけど、動物と人間のつながりというものが出てきます。

続いて『シャーロットのおくりもの』³³。映画化されたので、そちらを御覧になった方がいらっしゃるかもしれません。1952年、アメリカのE. B. ホワイト (E. B. White, 1909-1985) の作品です。ホワイトはユーモア作家で、子どもの作品もいくつか書いており、いずれもちょっとひねった視点で書いています。

これは、未熟児の子豚の話です。普通、農場で未熟児の子豚が生まれても、育つ可能性がないので処分してしまいます。けれども、表紙に描かれているこのファーンという女の子が、「私が未熟児で生まれたらやっぱり殺しちゃうの？」と言って父親に掛け合い、この子豚を育ててもらいます。子豚はウィルバーと名付けられ、すくすくと育ちます。けれどこの子豚、とても意地地なしで、友達がいないと言っていつもめそめそしています。そんなときに友達になってくれたのが、クモのシャーロットでした。シャーロットはいろいろなかたちでウィルバーを助けてくれます。ウィルバーは立派な豚になったものの、そのせいで今度はおいしいハムにされてしまいそうです。そこでシャーロットはウィルバーのために、“SOME PIG” (「たいした

31 アーネスト・T.シートン 作・絵、今泉吉晴 訳『ロボ：カランポーのオオカミ王』（シートン動物記；3）福音館書店、2003。（Ernest Thompson Seton “Lobo,” *Wild animals I have known, and 200 drawings*, C. Scribner's Sons, 1898.）

32 ヒュー・ロフティング 作、井伏鱒二 訳『ドリトル先生航海記 新装版』（岩波世界児童文学集）岩波書店、2003。（Hugh Lofting, *The voyages of Doctor Dolittle*, J. B. Lippincott & Co., 1922.）

33 E.B.ホワイト 作、ガース・ウィリアムズ 絵、さくまゆみこ 訳『シャーロットのおくりもの』あすなろ書房、2001。（E.B.White, pictures by Garth Williams, *Charlotte's Web*, Harper & Brothers, 1952.）

ブタ) という言葉を織り込んだクモの巣を張りました。それを見た農場の人たちは、奇跡が起こったと思い、この豚は特別な豚かもしれない、殺しちゃいけないと考え直すのです。それでウィルバーは、殺されることなく成長し、品評会に出るまでになります。

しかし、シャーロットの命は少しずつ終わりに近づいていきます。最期を悟ったシャーロットは、ウィルバーに卵を託し、そして命を終えます。そこでウィルバーがどうしたかは、ぜひ読んでみてください。この話は、命をつなぐことの意味、そして動物は動物なりの、人間は人間なりの生き方がそれぞれあるということを示しています。

最後に御紹介するのは、『きいてほしいの、あたしのこと ウィン・ディキシーのいた夏』³⁴です。ウィン・ディキシーというのは犬の名前で、主人公は人間の女の子です。この女の子が小さい頃に、お母さんは家を出て行ってしまいました。お父さんは牧師さんですが、お母さんが出て行ったことで心を閉ざしてしまい、女の子はとても寂しい思いをしています。ある時女の子は、スーパーに一匹の野良犬が入り込み、大騒動になっている場面に遭遇します。女の子はその犬に、とっさにそのスーパーの名前を取って「ウィン・ディキシー」と呼びかけ、「わたしの犬」と言って手元に置きます。するとその犬も、まるで女の子に飼われているみたいな顔をして付いてきます。仕方がないので女の子はその犬を家に連れて帰り、お父さんを説得して家に置いてもらえることになりました。不思議なことに、この犬を連れて歩くと、皆が心を開いているいろいろなことを話してくれます。犬って時々、にーっと笑っているような顔をするでしょう。そうやって笑顔で話を聞いてくれるので、人との関わりが少なくなってしまうおばあさんや、人付き合いの悪いペットショップのオーナーなどが、それまで自分だけの心に秘めてきた話をし始めるのです。こうして、お父さんを含め、町の中で孤立し、寂しい思いをしていた人たちが心を開き、つながりを持っていくという、とても温かい話です。タイトルの『きいてほしいの、あたしのこと』というのは、町の人たち皆の気持ちなのでしょう。

こうしてみると、動物はやはり人間を超えた何かを持っているように思われ、人間と動物の話は奥が深いと感じます。このような話も、子どもたちに紹介していければと思います。

最後はかなり駆け足になりましたが、小学校中高学年向けの本について、この年代の子ども読者の特徴も交えて話をさせていただきました。今回は「家族」「友達」「成長」「冒険」「動物と人間」という五つの項目を取り上げて20冊ほどの本を紹介しましたが、どのテーマの作品にも、この年齢の子どもが直面する問題、例えば家族や友達の問題、自分探しなど、自己と他者の関係を考えさせる問題が入っているようです。

講義の中では、アメリカ児童文学を例に挙げて、20世紀前半の明るく楽しい作品から、20世紀後半の子どもの内面に切り込む、あるいは家庭崩壊などの問題に直面する子どもを描く作品の増加など、児童文学の変化についても触れました。現代の児童書は子どもが置かれた厳しい状況を容赦なく描きながらも、時にユーモアを交えて表現しているものもあります。そして、登場する子どもたちは、苦境を乗り越える希望を見せてくれています。また興味深いことですが、時に動物たちは人間の能力を超えた不思議な力で、人を癒し、普段気付かないことに気付かせてくれるように思います。

子どもたちはいろいろな本に出会うことで、心が豊かになってほしいと願いますが、今回御紹介した本ばかりでなく、皆さんのお気に入りの本を、「この本よんだ？」と子どもたちに勧めてみてはいかがでしょうか。

34 ケイト・ディカミロ作、片岡しのぶ訳『きいてほしいの、あたしのこと：ウィン・ディキシーのいた夏』（ポプラ・ウイング・ブックス；13）ポプラ社，2002。（Kate DiCamillo, *Because of Winn-Dixie*, Candlewick Press, 2000.）

「この本よんだ？ 小学校中高学年に向けて」紹介資料リスト

出版事項欄の（ ）内の数字は、初版（翻訳資料においては原書初版）の出版年です。

(東京本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

(デジタル化) → 「国立国会図書館デジタルコレクション」(館内・図書館送信対象館内限定公開)

注：デジタル化図書については、原則として原本はご利用いただけません。なお、一部の図書については、別途所蔵している複本を御利用いただける場合があります。

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	子どもの「10歳の壁」 とは何か？：乗り越える ための発達心理学	渡辺弥生 著	光文社, 2011	FA35-J162
2	オズの魔法使い	フランク・ボーム 作, 幾島幸子 訳	岩波書店, 2003 (1900)	Y7-N03-H94
3	ひとまねこざる	エッチ・エイ・レイ 文・絵, 岩波書店 訳編	岩波書店, 1954 (1947)	児 726.7-cR45h (デジタル化)
4	エルマーのぼうけん	ルース・スタイルス・ガネット さく, わたなべしげお やく, ルース・クリスマン・ガネット 絵	福音館書店, 1963 (1948)	児 933-cG19e (デジタル化)
5	がんばれヘンリーくん 改訂新版	ベバリー・クリアリー 作, 松岡享子 訳, ルイス・ダーリング 絵	学習研究社, 2007 (1950)	Y9-N07-H263
6	かいじゅうたちのいると ころ	モーリス・センダック さく, じんぐうてるお やく	富山房, 1975 (1963)	Y17-4623
7	クローディアの秘密 新 版	E.L. カニグズバーグ 作, 松永ふみ子 訳	岩波書店, 2000 (1967)	Y7-N00-68
8	ガラスの家族	キャサリン＝パターソン 作, 岡本浜江 訳	偕成社, 1984 (1978)	Y8-1969
9	チョコレート・ウォー	ロバート・コーミア 著, 北沢和彦 訳	扶桑社, 1994 (1974)	KS153-E705 (東京本館)
10	ふたりのロッチェ	ケストナー 作, 高橋健二 訳, ワルター・トリヤー え	岩波書店, 1975 (1949)	Y7-4679
11	ヘンショーさんへの手紙	B. クリアリー 作, 谷口由美子 訳, むかいながまさ 画	あかね書房, 1984 (1983)	Y8-2214
12	お引越し	ひこ・田中 著	福音館書店, 2013 (1990)	Y8-N13-L889
13	ロボママ	エミリー・スミス 作, もりうちすみこ 訳, 村山鉢子 絵	文研出版, 2005 (2003)	Y9-N05-H242
14	それいけズッコケ三人組	那須正幹 著, 前川かずお 絵	ポプラ社, 1983 (1978)	Y8-1338
15	山賊のむすめローニャ	アストリッド・リンドグレーン 作, 大塚勇三 訳	岩波書店, 2001 (1981)	Y7-N01-107
16	みそっかすなんていわせ ない	ジャクリーン・ウィルソン 作, ニック・シャラット 絵, 小竹由美子 訳	偕成社, 1995 (1989)	Y9-1816
17	夏の庭：The friends	湯本香樹実 作	福武書店, 1992	Y8-9223
18	ドレスを着た男子	デイヴィッド・ウォリアムズ 作, クエンティン・ブレイク 画, 鹿田昌美 訳	福音館書店, 2012 (2008)	Y9-N12-J178
19	魔女ジェニファとわたし 新版	E.L. カニグズバーグ 作, 松永ふみ子 訳	岩波書店, 2001 (1967)	Y7-N01-67
20	魔女の宅急便	角野栄子 作, 林明子 画	福音館書店, 2002 (1985)	Y7-N02-51

21	ハンサム・ガール	佐藤多佳子 作, 伊藤重夫 画	理論社, 1998 (1993)	Y7-M99-16
22	西の魔女が死んだ	梨木香歩 著	小学館, 1996 (1994)	Y9-2427
23	グリックの冒険 新版	斎藤惇夫 作, 藪内正幸 画	岩波書店, 2000 (1970)	Y7-N00-105
24	モモ	ミヒヤエル・エンデ 作, 大島かおり 訳	岩波書店, 2005 (1973)	Y7-N05-H111
25	秘密の島のニム	ウェンディー・オルー 著, 田中亜希子 訳	あすなろ書房, 2008 (1999)	Y9-N08-J320
26	ケンスケの王国	マイケル・モーバーゴ 著, 佐藤見果夢 訳	評論社, 2002 (1999)	Y9-N02-239
27	ロボ：カランポーのオオ カミ王	アーネスト・T.シートン 作・絵, 今泉吉晴 訳	福音館書店, 2003 (1898)	Y11-N03-H297
28	ドリトル先生航海記 新 装版	ヒュー・ロフティング 作, 井伏鱒二 訳	岩波書店, 2003 (1922)	Y9-N04-H133
29	シャーロットのおくりも の	E.B. ホワイト 作, ガス・ウイリアムズ 絵, さくまゆみこ 訳	あすなろ書房, 2001 (1952)	Y9-N01-33
30	きいてほしいの、あたし のこと：ウィン・ディキ シーのいた夏	ケイト・ディカミロ 作, 片岡しのぶ 訳	ポプラ社, 2002 (2000)	Y9-N03-H30

レジュメ

ヤングアダルト文学概観

金原 瑞人

まず、「ヤングアダルト (young adult)」とは何か、英和辞典の説明は以下の通りです。

『ランダムハウス英和大辞典』 「1. 十代後半の青少年、ヤングアダルト：出版社、図書館員が読者対象について用いる。略Y.A. 2. 成人期初期の人、大人になったばかりの人」

『リーダーズ英和辞典』 「十代の若者、ヤングアダルト (出版業界用語)、大人になり立ての人 (ティーン)」

『ジーニアス英和大辞典』 「10代後半の青少年：ハイティーン、若い成人」

『英辞郎』 「ヤングアダルト、若い成人、若年成人、十代後半の若者◆【略】YA」

辞書によって、かなりニュアンスが違うのですが、日本でも英米でも、それは似たようなところがあります。欧米のヤングアダルトむけの本でよくみかける表示に「12up」(12歳以上) というのがあり、これが最も包括的でわかりやすい説明になっているかもしれません。

さて、今回は、この「ヤングアダルト本」について概括的な話をしようと思います。

ぼくが赤木かん子と隔週で、朝日新聞の「ヤングアダルト招待席」という書評コーナーを担当したのが1987年。これは3年続きました。しかし当時まだ「ヤングアダルト」という言葉は日本で市民権を得ていませんでした。これが定着するのに10年以上はかかったような気がします。

そんな話をまじえながら、本、図書館、児童室、ヤングアダルトコーナーなどについて話すつもりです。

その中心になるのは、いつ、なぜ、図書館に児童室ができたのか。そして、いつ、なぜ、どこでヤングアダルトコーナー(室)ができたのかという話です。

児童書が出はじめてしばらくして児童室ができ、ヤングアダルトむけの本が出はじめてしばらくしてヤングアダルトコーナーができるわけです。簡単にいってしまえば、図書館の歴史を社会的にみると、「大人」「大人+子ども」「大人+若者+子ども」という社会の変化がみえてきます。これはそのまま、近代化による子どもの誕生、現代における若者の誕生ということです。

世界で初めて若者文化が生まれた50年代のアメリカについて話をし、サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』のインパクトに触れ、その後、若い頃に(おそらく)これを読んで影響され、青春小説を書きだしたスーザン・E. ヒントンやポール・ジנדレルたちの作品、そして70年代後半のヤングアダルト小説(問題小説)の説明をする予定です。それから、もし時間があれば、日本のヤングアダルト小説についての話もできればいいと考えています。

ヤングアダルト文学概観

金原 瑞人



こんにちは、金原です。ヤングアダルト文学、我々は省略してYAとも呼んでいますが、今日はそのYAの話をしてします。

1. はじめに

そもそも、僕がなぜヤングアダルト文学を訳したり紹介したりするようになったかという、きっかけからお話ししましょう。それと一緒に、1980年代後半から現在に至るまでの、日本のヤングアダルト文学の流れを少し御紹介します。

1987年、朝日新聞に「ヤングアダルト招待席」というコーナーができました。毎週、若者向けの本を紹介するというもので、赤木かん子と僕が、それぞれ隔週で書評を執筆し掲載していました。これはちょっと自慢なのですが、佐藤多佳子のデビュー作『サマータイム』¹や萩原規子のデビュー作『空色勾玉』²、また橋本治の『桃尻語訳枕草子』³などを取り上げています。

当時僕は、翻訳物か否かにかかわらず、若者向けの作品を紹介していました。そんな1986年の終わり頃、朝日新聞社に赤木かん子と二人で呼ばれました。行ってみると、出原さんという記者さんから、「中高生向けの作品を紹介するコーナーを作るので協力してほしい」と言われました。僕が「そもそも、なぜそんなものを作ることにしたんですか」と聞いたところ、「いやあ金原君、こういうわけなんだ。どの新聞も、子どもの本を紹介するコーナーはある。家庭欄で、家庭部の担当だ。もう一つ、一般書を紹介する書評のコーナーもある。ところが、中高生向けの本を紹介するコーナーがないんだ」ということでした。こうして「ヤングアダルト招待席」というコーナーができました。おそらくこれが、雑誌・新聞で「ヤングアダルト」という言葉を表に出した最初の書評コーナーです。僕たちの二人体制は1987年から1990年まで、3年間続きました。

当時、日本ではまだまだヤングアダルトという言葉の知名度は低く、出版界でも、児童書出版界の人は知っていたけれども、一般書の担当者、編集者は知りませんでした。当時、「面白いヤングアダルト作品があるから出そう」といって知り合いのところに持っていっても、それがヤングアダルト文学だという段階で駄目でした。

1980年代、翻訳物の中で売れないといわれていたものがいくつかありました。そのうち一つはSF、もう一つはファンタジーです。そんなファンタジーやSFに輪をかけて売れなかったのが、ヤングアダルト文学でした。そのような背景もあって、先ほど述べた「ヤングアダルト招待席」で若者向けの本を紹介していたのですが、1990年代になってもヤングアダルトとい

1 佐藤多佳子 [著]『サマータイム：四季のピアニストたち・上』MOE出版, 1990.

2 萩原規子作『空色勾玉』（ベスト・チョイス）福武書店, 1988.

3 橋本治 [著]『桃尻語訳枕草子 上』河出書房新社, 1987, 橋本治 [著]『桃尻語訳枕草子 中』河出書房新社, 1988.

うジャンルは定着しませんでした。

日本におけるヤングアダルト文学は、2000年前後から次第に根づくようになります。客観的に見て正直にお話しすると、その火付け役となったのは、僕の訳すような海外のヤングアダルト作品ではなく、あさのあつこ、森絵都、佐藤多佳子らの作品でした。また、ファンタジーでいうと萩原規子、そしてその前を走っていた小野不由美などです。若い人の文学という意味でいえば、さらにその先を走っていたのが江國香織やよしもとばななでした。そのような、若い人が書き、若い人が読んで面白い、若い人向けの作品が出始めたのが日本では1990年から2000年だったのです。

面白いのは、ちょうど我々が「ヤングアダルト招待席」を終えた頃、火付け役となった三人がそろい踏みしたということです。森絵都が『リズム』⁴で講談社児童文学新人賞を受賞したのが1990年、佐藤多佳子が『サマータイム』で月刊MOE童話大賞を取ってデビューしたのが1989年、あさのあつこが『ほたる館物語』⁵でデビューしたのが1991年です。あさのあつこのデビュー作は、ヤングアダルトよりもっと年齢の低い子ども向けの作品ではありますが。

この三人の女性作家は、デビュー当時から注目されたわけではありません。ところが2000年に入って、この三人の作品がどんどん売れるようになると、出版社の方が「ヤングアダルト」とか「YA」という言葉を表に出すようになりました。それまでの児童文学とは違うぞ、というアピールです。その頃になって、やっと僕のところにも、編集者が英語圏のヤングアダルト作品で面白いものはないかと聞いてくるようになったのです。そして「YAの金原」というラベルが貼られるようになったのですが、そもそもなぜ僕がヤングアダルト文学を訳すようになったかという、1980年代、1990年代の日本の出版事情と深い関係があります。

僕は大学4年生の時、就職試験に全部落ちました。いきなり何の話だと思われるかもしれませんが、実はそこが始まりです。就職試験に疲れ果てた僕は、屋台のカレー屋をやろうと思いつきました。1980年代、日本のカレーというのは、今思うととてもナイーブで素朴なカレーしかありませんでした。やっと東京に本格的なインドカレーを出すお店ができた頃です。だから、ちょっと本格的なカレーを屋台で出せば絶対売れると思って、3か月カレーばかり作っていたのです。

そんなある日、大学に行って、卒論指導をしてくださっていた犬飼和雄先生に会いました。犬飼先生に「金原君、就職どうしたの」と尋ねられて、「全部落ちたんで、カレー屋になります。食べに来てください」と答えると、「カレー屋もいいけど、大学院に来ないか」と言われて。恥ずかしいことに、当時の僕は大学院が何なのかを知りませんでした。それで先生に「大学院って何ですか」と聞いたら、「君は大学院を知らないのか」と驚かれました。「そこにある4階建ての建物が大学院棟といって、大学を出てもっと勉強したい人間が行くところだ」と言われ、僕は即座に「これ以上、勉強したくないからいいです」と断ったところ、先生が「まあ待て、君は本が好きだろう」と。その頃、確かに本は好きでした。先生は続けて、「大学院というところは、週に1日か2日来て、あとは本を読んでいれば、奨学金がもらえるんだ」。僕は絶対うそだと思って、そんなうまい話が転がってるわけがないと反論したのですが、「金原君、よく聞きたまえ。世の中にはうまい話なんかいくらでも転がっているんだ」と諭され、こうして大学院に行くことになりました。

犬飼先生は子どもの本の翻訳をされていて、主催されている子どもの本の翻訳の勉強会に来

4 森絵都 著『リズム』講談社、1991.

5 あさのあつこ 作、高橋透 絵『ほたる館物語』（新日本少年少女の文学；II-14）新日本出版社、1991.

ないかと誘っていただきました。そこに行くうちに、「翻訳って、面白いな」と初めてその時思ったのです。だから、もしその時に就職試験に全部落ちていなかったら、今日ここに来ていなかったでしょうし、カレー屋の全国チェーン店の会長をやっていたかもしれません。

さて、その頃、その犬飼先生は図書館を作ろうとしていました。そのために、*Horn Book* や *Junior Bookshelf* といった海外の子どもの本の書評誌や、*New York Times* の書評に掲載されている情報を見て、面白そうな原書を片っ端から買っていたのです。僕がそんな原書を読んでいるうちに、面白いなと思ったのが、イギリスやアメリカのヤングアダルト作家だったわけです。

というのも、僕は子どもの本の面白さが分からないのです。小学生の頃に読んだ子どもの本といえば『西遊記』、『水滸伝』、『ジャングルブック』、『アーサー王』くらいでした。根っからの漫画少年でテレビも大好きでしたが、本は読んでいなかったのです。その後中学生になって、いきなり本の世界に入りました。SFやミステリーに始まり、家にあった本で面白そうなものを読んで本好きになったわけです。そうして、大学院でヤングアダルト文学に出合った。ヤングアダルト文学は青春小説だから、児童文学と違ってよく分かるし面白かった。ところが、そんな面白いものが訳されないまま山となって転がっていたのです。玉石混交ではあるのですが、とにかく本だけはたくさんあったので、僕はそれを読んでいました。

そういう時代を経て、朝日新聞で「ヤングアダルト招待席」を連載するようになり、やがて晶文社から『YA 読書案内』⁶ という本を出しました。当時、ヤングアダルト出版会⁷ の会長を晶文社の社長が務めていたのです。その方の肝煎りで刊行されたのが、この『YA 読書案内』です。監修は、赤木かん子と僕、佐藤涼子さん、半田雄二さんの4人です。それ以外にもいろいろな人に依頼して、いろいろなジャンルの作品を紹介してもらいました。今見ると選書そのものが古いですね。ヤングアダルト文学というのは、取り上げた時期にすでに古くなっているという側面があります。一方、この本を読んでいただくと、1993年当時の事情が非常によく分かると思います。時代が時代でしたから、ここに紹介されている本のほとんどは、ヤングアダルト向けの作品として出版されていません。それでも、若者に読んでほしいものを集めようということで編纂したのが、この本です。その後も、翻訳の傍らいろいろな紹介本を出すようになり、いよいよ「YAの金原」というラベルが貼られるようになりました。

2005年には、すばる舎から『12歳からの読書案内』⁸を出しました。ここでは、日本の作家による新しい作品を100冊取り上げています。編纂にあたり、この本の寿命は5年か10年と考えて、いわゆる古典と呼ばれる本は入れず、とにかく新しい本を取り上げました。僕は法政大学で教えているのですが、当時の学生の中で本好きな子が何人かいたので、その学生たちにも書いてもらっています。この本で乙一のデビュー作『夏と花火と私の死体』⁹を取り上げてくれた学生が、今『シャガクに訊け!』¹⁰という本で、デビューしました。この『12歳からの読書案内』の評判が良かったので、次に海外文学を特集した『12歳からの読書案内：海外作品』¹¹を出しました。これらは新しい本を中心に紹介していたため、時間が経つにつれて、中には絶版になってしまうものも出てきました。ですので、この2冊で紹介した本のうち絶版になっていないものに、新たに3、40冊加えて、2017年に出したのが『12歳からの読書案内：多感な時期に読みたい100冊』¹²です。

6 赤木かん子〔ほか〕編『YA読書案内』晶文社、1993。

7 ヤングアダルト向けの本に関する活動を行っている組織。<<http://young-adult.net/>>

8 金原瑞人監修『金原瑞人「監修」による12歳からの読書案内』すばる舎、2005。

9 乙一「夏と花火と私の死体」(乙一、幡地英明著『夏と花火と私の死体』(Jump j books)集英社、1996所収)

10 大石大著『シャガクに訊け!』光文社、2019。

11 金原瑞人監修『金原瑞人「監修」による12歳からの読書案内：海外作品』すばる舎、2006。

12 金原瑞人監修『金原瑞人「監修」による12歳からの読書案内：多感な時期に読みたい100冊』すばる舎、2017。

その後、このガイドブックに参加してもらったひこ・田中さんと二人で、『10代のためのYAブックガイド150!』¹³と『10代のためのYAブックガイド150! 2』¹⁴を新たに編みました。出版社はポプラ社です。2年に1回くらい出すつもりで仕事を進めています。これもいろいろな方に書評を書いていただいています。これらのブックガイドを読んでもいただければ、僕たちが若い人に読んでもらいたいと考えているヤングアダルト作品がどんなものか、大体分かっていただけだと思います。

さらに一冊、ひこ・田中さんと僕で絶対に出したかったのが、ヤングアダルトのための絵本のブックガイドでした。ということで2018年、『13歳からの絵本ガイド』¹⁵を出しました。普通、図書館や書店では、絵本は児童書コーナーにしか置かれませんが、ですから、若者や大人が読んで面白い絵本がたくさんあるのに、若者や大人に紹介したくても、一般書や美術書のコーナーにはなかなか置かれない。そのような絵本に光を当てて、ヤングアダルトに勧めたい絵本ガイドを編んでみました。

そして、それでも飽き足らずに、ぜひ中高生、大学生及び一般の読者に読んでほしい本を集めたフリーマガジン『Bookmark』¹⁶も出しています。紹介する本は、翻訳家の三辺律子さんと一緒に選び、それぞれの本について翻訳なさった方に紹介文を書いていただいています。また、巻頭にはエッセイがあり、1号では江國香織さん、音楽特集の号には村上春樹さん、新訳特集の号では町田康さんと、多くは日本の作家さんをお願いしています。今回皆さんにお配りしている15号は短編集の特集で、巻頭エッセイは宮内悠介さんです。この『Bookmark』は2015年からスタートしました。1号から12号までの12冊分を単行本1冊にまとめたのが『BOOKMARK 翻訳者による海外文学ブックガイド』¹⁷です。『Bookmark』のバックナンバーは全て僕のホームページからPDFでダウンロードできます¹⁸が、単行本の方は刊行に際して紹介文を書き直して下さった方もいらっしゃいますし、また新たに面白い鼎談も収録しています。

このような感じで僕は、ヤングアダルト物の翻訳をしたり、ブックガイドを作ったりして、今日に至るわけです。

2. ヤングアダルト文学とは何か

さて、今日は基礎講座ということもあり、皆さんは「じゃあヤングアダルトって何」ということに関心があるのだと思います。それは、本や図書館の歴史を考えると分かりやすいです。

①図書館の歩み—児童図書館ができるまで

今日ここにいらっしゃるの司書の方なので、図書館の歴史はある程度御存じかだと思います。『本と図書館の歴史』¹⁹でも、詳しく紹介されています。

今まで発見されている中で最も古い図書館は、メソポタミア文明のものといわれています。メソポタミアというのはチグリス川とユーフラテス川に挟まれた肥沃な平野地帯ですから、あちこちに粘土があります。その粘土を薄く板にして、先をとがらせた草の茎などで楔形文字を

13 金原瑞人、ひこ・田中 監修『今すぐ読みたい!10代のためのYAブックガイド150!』ポプラ社、2015。

14 金原瑞人、ひこ・田中 監修『今すぐ読みたい!10代のためのYAブックガイド150! 2』ポプラ社、2017。

15 金原瑞人、ひこ・田中 監修『13歳からの絵本ガイドYAのための100冊』西村書店東京出版編集部、2018。

16 『Bookmark: free booklet』金原瑞人、2015-。

17 金原瑞人、三辺律子 編『BOOKMARK: 翻訳者による海外文学ブックガイド』CCCメディアハウス、2019。

18 金原瑞人オフィシャルホームページ BOOKMARK<<https://kanehara.jp/bookmark>>

19 モーリーン・サワ 文、ビル・スレイヴィン 絵、宮木陽子、小谷正子 訳『本と図書館の歴史: ラクダの移動図書館から電子書籍まで』西村書店東京出版編集部、2010。

刻みます。ですから、図書館に所蔵されていたのは粘土板です。その中には、楔形文字でギルガメシュの武勲譚^{ぶくんとん}を書き込んだものがありました。

ところで皆さん、世界で最初の印刷は何文明だと思いませんか。グーテンベルクの活版印刷は御存じだと思います。そして、それに先立って中国や朝鮮半島では、活字印刷が発明・実用化されていました。ヨーロッパでは、活版印刷が発明される以前は、羊皮紙に手書きで文字を書いたものを本にしていました。中国でも、活版印刷発明後も、多くの印刷物は木版であり、それ以外の本はやはり手書きでした。ところが、メソポタミアについて、こんなことが言われています。文字を刻んだ粘土板は、そのままでは軟らかく壊れやすいので、かまどで焼いたり天日で干したりして堅くします。そのように堅くした粘土板①の上に、軟らかい粘土板②を押し付けます。軟らかい粘土板②は、剥がすと①のネガになりますね。その粘土板②を乾かし、さらに別の軟らかい粘土板を押し付けてはがすと、①と同じものが作れます。こうして、①の複製が何枚もできるわけです。ということは、最初に印刷術が生まれたのはメソポタミア文明だといってもいいのかもしれませんが。

さらに時代が下って、パピルスが発明され普及します。例えば古代ギリシャのホメロスが書いたと言われる『イリアス』や『オデュッセイア』は、エジプトから輸入したパピルスに書かれたと考えられています。

やがてパピルスに対抗して出てきたのが羊皮紙だといわれています。羊皮紙は、羊や子牛の皮をなめし、薬品に付けて干して、更になめして薄くしたものです。例えば皆さん、聖書を一冊作るのに、羊が何頭必要か御存じですか。ちょっと考えてみてください。50頭でしょうか。100頭でしょうか。正解は、250頭くらいだそうです。約250頭の羊をさばき、皮をなめして加工し、それに全部手書きで聖書を書くのですから、大変な労力と時間がかかったわけです。ですから、それらはいうまでもなく、一般の人は読めないし手にもできないものでした。そもそも一般の人は字を読めない時代です。読めたのは王侯貴族と宗教関係者だけです。そのような時代背景の中、羊皮紙でできた書物を保管する図書館ができました。

そして、15世紀にはグーテンベルクが活版印刷術を発明し、これが普及します。17世紀には、ヨーロッパにおいて社会の枠組みが封建制度から資本主義制度に移行し、新興ブルジョワジー、いわゆる中産階級の人々が力を持つようになります。中産階級というのは、工業や商業、金融業、貿易業などを生業とする人々の層です。それと同時に並行で、印刷術や製紙術がどんどん進歩し、紙が安く手に入るようになり、印刷も安価でできるようになります。結果として、中産階級の人々が新聞や雑誌を読めるようになり、識字率が上がっていきます。

こういった社会的背景の中から生まれたのが小説です、というと、「いやいや、それまでも小説はあったでしょう」と思われるかもしれませんが。しかしイギリス文学史では、1719年の『ロビンソン・クルーソー』²⁰が最初の小説、つまりノベル (novel) であるというのが定説です。

じゃあ、小説って何なんでしょう。そもそも、英語の novel という単語には、「小説」という意味は全くありませんでした。元々 novel は「新しいもの」、「新参者」という意味の単語です。ところが、18世紀に誕生した新しい読み物のジャンルに novel という単語を当てたことから、読み物のジャンルの名前となり、後に日本語でもこの単語を「小説」と訳すようになったのです。

20 Daniel Defoe, *The life and strange surprizing adventures of Robinson Crusoe, of York, mariner: who lived eight and twenty years all alone in an un-inhabited island on the coast of America, near the mouth of the great river of Oroonoque; having been cast on shore by shipwreck, wherein all the men perished but himself. With an account how he was at last as strangely deliver'd by pyrates.* Written by himself, W. Taylor, 1719.

それまでの読み物と小説との違いは、分かりやすくいえば主人公の違いです。中世までの物語の登場人物は、伝説の英雄やお姫様、あるいは王侯貴族でした。分かりやすい例を挙げれば「アーサー王伝説」がまさにそうです。王や騎士の物語を詩の形で書きつづったものが、ロマンス (romance) と呼ばれる読み物です。しかし、王侯貴族が社会的・経済的実権を握っていた中世という時代が終わり、近代に入って中産階級の人々が実権を持つようになります。すると当然、経済的・社会的・政治的な力を持った中産階級の人々が、自分たちが主人公の、自分たちが書いた、自分たちのための読み物を読みたいと思うようになります。つまり、主人公も王侯貴族から中産階級に代わるのです。そのような読み物が、安価になった紙と印刷術を用いて、一般に普及します。これが novel、「新参者」、つまり小説の始まりです。

このようにして、一般の中産階級の家庭に本が入ってきました。しかし安いとはいっても現在ほど容易に手が届くものではなかったため、本や雑誌の読めるカフェや貸本屋が出てきました。これがやがて近代的な図書館になります。

当時、図書館にはこんな看板が出ていました。曰く、「犬と子どもはお断り」。子どもは入れない、つまり子どもの読む本はなかったのです。ところが 18 世紀から 19 世紀にかけて、産業革命が進んで初等教育が普及していくと、社会において、学校で勉強する子どもたちが増えてきます。その時に初めて、子ども向けの本が見直されるようになり、そうして子ども向けの本を集めたコーナーが図書館の片隅にできるようになります。アメリカ草創期の児童サービスの例として有名なのが、例えばロードアイランドのポータケット公共図書館の司書だったミネルヴァ・サンダース (Minerva Amanda Sanders, 1837-1912) です。彼女は 1876 年、子どものための図書室を作ったといわれています。つまり、この頃になってやっと、図書館に子どもの本が置かれるようになり、子どもはお断りという看板がなくなるのです。

なぜ、それまで一般の大人しか入れなかった図書館に、子どもが入れるようになったのか。それは、子ども向けの本が出始めて、それが市民権を得たからです。その背景には、子どもが「誕生」した、つまり子どもという存在が社会的に認められるようになったことがあります。

1960 年、フィリップ・アリエス (Philippe Ariès, 1914-1984) という社会学者が『<子供>の誕生』 (*L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*)²¹ を発表しました。これは社会学系の堅い本なのですが、1962 年にアメリカで翻訳出版されベストセラーになります。この本の中でアリエスは、子どもが「誕生」するまでの過程をこのように述べています。古代、中世では、いわゆる子どもというのは不完全な大人であって、社会の構成要員としては認められなかった、つまり、子どもというものが存在していなかった。しかし近世になり、初等教育が始まって、子どもに対する社会的な目が変わり、そこで子どもが「誕生」する。そうして、それに合わせて子どものための本がイギリスでは早くも 18 世紀から出版されるようになり、さらに 19 世紀半ばには本格的な児童文学が登場します。例えば 1850 年代初めに出了『水の子』 (*The Water-Babies, A Fairy Tale for a Land Baby*)²² と『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*)²³ は、イギリスにおける児童文学の嚆矢とされています。こうして、子ども向けの、子どもが読んで楽しい、明日も頑張ろうという前向きな気持ちになれる本が生まれてくるのです。

21 Philippe Ariès, *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*, Plon, 1960.

22 Charles Kingsley, *The Water-Babies, A Fairy Tale for a Land Baby*, Macmillan, 1863.

23 Lewis Carol, *Alice's Adventures in Wonderland*, Macmillan, 1865.

②若者の誕生

(1) 1950年代アメリカと若者文化の誕生 1—自由になったラジオ

それでは、今日のテーマであるヤングアダルト文学はどうでしょうか。今お話ししたように、図書館に児童室ができる前に子どもの本が出版され、さらにその前には「子ども」という存在が社会的に認められるという段階がありました。勘の良い方はお分かりかと思います。ヤングアダルト文学の誕生の前提として、ヤングアダルトと呼ばれる人々、いわゆる若者がいつ登場したのかを考える必要があったのです。

若者が誕生したのは、1950年代のアメリカだといわれています。当時のアメリカで何があったかということ、高度経済成長です。アメリカはどんどん物質的・金銭的・経済的に恵まれた国になります。アメリカン・ドリームが実現したのも1950年代といわれます。ここでいうアメリカン・ドリームというのは、そんなに大層なものではありません。いわゆる中産階級の白人が、郊外に自分の家を持ち、車を持ち、さらに手作りでいいから小さいプールを持つ、そういう夢です。そこに欠くことができなかつたのが、電化製品です。電気掃除機、電気洗濯機、電気冷蔵庫、そしてテレビです。

この辺りの時代のことを、昔の日本に置き換えてイメージしてみましよう。日本でテレビが普及するのは1960年代になってからで、特に1964年の東京オリンピックが契機になります。アメリカより10年ほど遅れてのことですね。

当時のアメリカでは、文化的に大きな変革がありました。その舞台は、一家団欒^{だんらん}の場、いわゆるお茶の間です。それまでのアメリカのお茶の間には、大きな真空管ラジオがありました。それは日本でも同じです。ラジオから、ニュースが、ドラマが、歌謡番組が流れてきて、それを聴きながら一家でのんびり過ごすというのが、当時のお茶の間の風景でした。それが1950年代に変わります。ラジオの代わりに、奥行きのある大きなテレビがリビングにやって来て、それを皆で見るようになったのです。テレビから、ニュースが、ドラマが、歌謡番組が流れてくるようになります。先ほど、中産階級のアメリカン・ドリームが実現され、そこにテレビも欠かせなかつたとお話ししました。つまり、テレビ番組の視聴者は中産階級であり、彼らは白人なのです。ですから当時のテレビには、当時の白人の中産階級の人々が見て不快感を覚えるようなものは、絶対に映りませんでした。例えば音楽番組では、フランク・シナトラ (Frank Sinatra) やパティ・ページ (Patti Page) といった歌手の、聴いていて快いメロディックな曲、あるいはコミカルな曲が流れます。ドラマでいうと『ローハイド』(原題: Rawhide) や『奥さまは魔女』(原題: Bewitched)、『じゃじゃ馬億万長者』(原題: The Beverly Hillbillies) といった、家族みんなが和氣藹々^{あいあい}と、一緒に楽しめるものしか流れなかつたのです。

つまり、そこから締め出されたものがいろいろあるのです。例えば、過激なものや暴力的なもの、一般の視聴者が見たくないもの、聴きたくないものなど。当時の白人の中産階級にとって、その一つが黒人音楽です。黒人音楽はテレビから徹底的に排除されます。当時、黒人たちが聴いていたのはジャズやブルースです。中でも1940年代から1950年代にかけて人気があったのは、リズム・アンド・ブルースと呼ばれる、後にロックンロールの原型となった音楽。エレキギターとドラムスをバックに、怒鳴るような叫ぶような歌声で、過激でいやらしい歌詞を歌う。そんなリズム・アンド・ブルースが、黒人の音楽として、都市部ではレコードで聴かれていました。そのレコードを出していたのも大手レコード会社ではありません。黒人向けの、今でいうインディーズのレコード会社が黒人音楽のレコードを作り、出来たレコードもレコード屋には置けず、小さなトラックなどで売り歩いていました。だから、そんな曲は絶対にテレビでは流せなかつたわけです。

一方、お茶の間から姿を消したラジオは、その後どうなったのでしょうか。まず、小さくなりました。技術の進歩により、大きな真空管ラジオから、小さなトランジスタラジオになったのです。これにより、リビング以外の部屋にもラジオを置けるようになりました。また、カーラジオも普及し、車でもラジオを聴けるようになりました。それらを新しいおもちゃのように楽しんだのが、当時の白人の若者たちです。自分の部屋でこっそり深夜放送を聴いたり、車に乗って友達やガールフレンドと一緒に音楽を聴いたりできるようになったのです。

こうして次第に、ラジオを通じて、白人の若者の耳に黒人のリズム・アンド・ブルースが流れてくるようになります。ラジオが中産階級の白人の家のリビングにあった時代には、黒人音楽はラジオでは絶対に流せませんでした。ところがテレビにお茶の間の王座を明け渡したことで、ラジオは身軽になり、自由になったのです。その自由になったラジオを通して、地方局の深夜放送などで、リズム・アンド・ブルースなどの黒人音楽を流すようになります。そうすると、それを聴いた白人の若者たちが、「かっこいいじゃん」といって好んで聴くようになる。それが1950年代のアメリカです。

(2) 1950年代アメリカと若者文化の誕生 2—ロックンロールの誕生

これに目を付けたのが、これまで黒人音楽を扱ってこなかったアメリカの大手レコード会社です。しかし、黒人の歌うリズム・アンド・ブルースをレコードにすることには、抵抗がある。だったら白人に歌わせればいいということで、黒人音楽のリズム・アンド・ブルースに白人音楽のカントリーを混ぜ合わせた、ロックンロールという新しい音楽を作ったのです。

こうして、アメリカのレコード会社は、ロックンロールのレコードを出し始めます。ロックンロールが初めて全米ヒットチャートのナンバーワンになるのは、ビル・ヘイリー・アンド・ヒズ・コメッツ (Bill Haley & His Comets) の「ロック・アラウンド・ザ・クロック」(Rock Around the Clock) という曲です。『暴力教室』(原題: Blackboard Jungle) という映画の主題歌としても有名です。その後を受けて1950年代後半、キング・オブ・ロックンロールことエルヴィス・プレスリー (Elvis Presley, 1935-1977) が、若者のアイドルとして登場します。

その頃のロックンロールは、白人の若者が本当に夢中になって聴いた音楽でした。そして当然ながら、当時の大人は「なんだあれは」と眉をしかめます。曰く、「黒人のような、叫ぶような歌い方をしているし、歌詞もいやらしい。さらに言えばプレスリーの腰の振り方もいやらしい。あんなのは歌ではない」ということで、ロックンロールの排斥運動が始まります。PTAの人々がロックンロールのレコードを山にして火をつけるというイベントが行われたのも、この頃でした。当時、いわゆる良識的な人のほとんどがロックンロールに反対し、何とかしようとししました。しかし、当時ロックンロールを聴いていた若者も、やがて大人になります。それはつまり、ロックンロールに肯定的な層が、社会の構成員になるということです。このようにしてロックンロールは、1950年代末から1960年代にかけて、アメリカを席卷していきました。

しかし1960年代に入って少し経つと、アメリカではロックンロールが鳴りを潜め、代わってフォークソングの時代が始まります。それまでの激しくいやらしい調子の、あるいは暴力的で若者らしい調子のロックンロールから、大学生が好んで聴くような、知的でクールな、ある種政治的なものも盛り込んだフォークソングへと、人気が移っていきます。ボブ・ディラン (Bob Dylan) やサイモンとガーファンクル (Simon & Garfunkel)、ピーター・ポール・アンド・メアリー (Peter, Paul & Mary) などが代表的です。一方、ロックンロールとリズム・アンド・ブルースはイギリスに飛び火します。そうして、リズム・アンド・ブルースやロックンロールのコピーバンドとして生まれたのが、ビートルズ (The Beatles) やローリング・ストーンズ (The

『ライ麦畑』は、昔からヤングアダルト文学の定番中の定番になっています。多くの言語で翻訳もされていますし、いうまでもなくアメリカやイギリスでも読み継がれています。面白いのは、『ライ麦畑』が刊行された翌年の1952年に、ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の『老人と海』(*The Old Man and the Sea*)²⁷ が出ているということです。つまりこれは、ヘミングウェイの円熟期の『老人と海』とサリンジャーの最初の長編である『ライ麦畑』がほとんど同じ時期に出たということで、これは、アメリカの新旧交代を象徴する面白い出来事だと僕は思っています。そういう目で、『老人と海』と『ライ麦畑』を読み比べてみてください。当時の気運がよく分かりますし、非常に対照的なヘミングウェイ的世界とサリンジャー的世界がぶつかり合っているというのが興味深いと思います。いうまでもなく、アメリカの一般文芸は、その後サリンジャーの方に流れていきます。

さて、この『ライ麦畑』は、これまでの青春小説と、何かが違います。これもまた読み比べてみてほしいのですが、例えばコレット (Sidonie-Gabrielle Colette, 1873-1954) の『青い麦』(*Le Blé en herbe*)²⁸、カロッサ (Hans Carossa, 1878-1956) の『美しき惑いの年』(*Das Jahr der schönen Täuschungen*)²⁹、ツルゲーネフ (Ivan Sergeevich Turgenev, 1818-1883) の『初恋』(*Первая Любовь*)³⁰、それからヘッセ (Hermann Karl Hesse, 1877-1962) の『デミアン』(*Demian : die Geschichte einer Jugend / Emil Sinclair*)³¹ や『車輪の下』(*Unterm Rad*)³² など。若者を主人公にした作品は19世紀以来数多くあるのですが、これらはあくまで一般文芸の中で書かれています。作家は、自分の若い時代を振り返って書いたり、大人目線で若者を書いたりしているわけです。例えばヘッセの『車輪の下』は、主人公を眺める大人の視点で書いているのであり、若者の文章ではありません。ツルゲーネフの『初恋』も、昔を振り返って、大人の文体で描かれています。つまり、若者の文体、若者の言葉で書かれた青春小説というのは、なかなかありませんでした。その新しい試みの一つが、サリンジャーの『ライ麦畑』だったのです。

もちろん発表当時、サリンジャーは既に30歳を過ぎていますが、若い人の目線で書こうとしています。『ライ麦畑』はこのように、若者の文体、若者の言葉で書かれた若者文学の始まりを予感させる小説です。

参考までに御紹介しますと、僕は去年、サリンジャーが戦中から戦後にかけて執筆した短編を集めて記しました。『このサンドイッチ、マヨネーズ忘れてる』³³ です。これも若者の視点で書かれた若者の話です。サリンジャーは徹底して若者を書いているのです。その短編の中に、『ライ麦畑』の主人公、ホールデンやその兄の話が出てきます。『ライ麦畑』の中では、ホールデンは成績不良で退学になった高校生です。学校の寮を出たけれど、家になかなか足が向かずにニューヨークの街をうろろうし、気分が落ち込んで、家に帰ってフィービーという妹と話をし……という、「お前は中二病か」と言いたくなるような少年です。そのような長編を書きあげる前に、サリンジャーはいくつかホールデンを主人公にした短編を書いているのです。とても興味深いのは、『ライ麦畑』以前に書かれた短編の中で、ホールデンはすでに死んでいるということです。正確には、第二次世界大戦中、ヨーロッパ戦線で、戦闘中に行方不明になったまま帰ってきていません。そのホールデンが主人公の短編もあるし、ホールデンが行方不明に

27 Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea*, Charles Scribner's Sons, 1952.

28 Sidonie-Gabrielle Colette, *Le Blé en herbe*, E. Flammarion, 1923.

29 Hans Carossa, *Das Jahr der schönen Täuschungen*, Insel-Verl., 1941.

30 Иван Сергеевич Тургенев, *Первая Любовь*, Н.А. Основский, 1860.

31 Hermann Karl Hesse, *Demian : die Geschichte einer Jugend / Emil Sinclair*, Fischer, 1919.

32 Hermann Karl Hesse, *Unterm Rad*, Fischer, 1906.

33 J.D. サリンジャー 著、金原瑞人 訳『このサンドイッチ、マヨネーズ忘れてる ハブワース 16、1924年』(新潮モダン・クラシックス) 新潮社, 2018.

なった、つまりはおそらく戦死したことを知らされたお兄さんを主人公にした短編もある。お兄さんは軍のトラックの中において、そこで弟であるホールデンのことを思い出しているという短編です。もう一つ、そのお兄さんが戦死したということをお兄さんの友達がお兄さんのガールフレンドに告げに行く短編もあります。『ライ麦畑』では、ホールデンもそのお兄さんも生きていますが、それ以前に書かれた短編の中で、二人は既に死んでいるのです。それらの短編を読んだ後で、「ああ、ホールデンは死ぬべき人間としてここにいるんだ」と思って『ライ麦畑』を読み直すと、また違った読み方ができると思います。

さて、このように、アメリカの若者文化を先取りしたような作品をサリンジャーは短編や長編で書いているのですが、そのサリンジャーの『ライ麦畑』を読んで、そしておそらくは感動して、そのような作品を書こうと思った若者がいたのでしょう。例えばポール・ジンデル (Paul Zindel, 1936-2003) の『高校二年の四月に』(The Pigman)³⁴がそうです。

また、これとは少し違う流れから出てきた、ヤングアダルト小説の走りと言われている作品が、S.E. ヒントン (S. E. Hinton) の『アウトサイダーズ』(The Outsiders)³⁵です。昔はヤングアダルト文学といえば必読と言われていた作品です。これは1967年に発表されたのですが、同じ年に、映画『ウエストサイド物語』(原題: West Side Story)が封切られています。『ウエストサイド物語』、見ていない方は見てください。警官とかどうでもいい人々以外で、大人が一人も出てきません。物語は不良グループの抗争が中心になっていますが、その不良たちの親さえ出てこない。若者を主人公にした若者視線の劇で、ロミオとジュリエットの現代版のような物語です。『アウトサイダーズ』も不良同士の抗争を中心に描いたものでした。

1967年当時、ヤングアダルト文学というジャンルはアメリカで確立されていませんでした。若者向けの本は出始めていましたが、音楽業界やファッション業界に比べて出版業界はとて出足が遅いんですね。『アウトサイダーズ』も、当初はハードカバーで一般向けに出されていたのですが、若者に読まれているということが分かり、若者向けに出し直してベストセラーになった作品です。

その後、1960年代から1970年代にかけて、アメリカではヤングアダルト向けの作品が次々に出されるようになります。例えばリチャード・ベック (Richard Wayne Peck, 1934-2018) の *Are You in the House Alone?*³⁶、「一人で家にいるのか」という意味ですが、翻訳版では『レイプの街』³⁷というタイトルになっています。それから、ロバート・コーミア (Robert Edmund Cormier, 1925-2000) の *The Chocolate War*³⁸。最初は『チョコレート戦争』³⁹というタイトルで、今は『チョコレート・ウォー』⁴⁰というタイトルで翻訳が出ています。こういった作品が出てくるのが1960年代から1970年代です。こうしてようやく、出版界も若者向けの本を出すということを意識し始め、若者向けの本に「ヤングアダルト」というラベルを貼って出すようになります。

しかし、そこで一つ覚えておいていただきたいのは、1970年代のヤングアダルトの特徴です。当時、若者向けの本を書いた作家の意識は、当時のアメリカの社会状況をしっかり捉えていました。それはつまり、こういうことです。先ほど述べたように、1950年代、中産階級にとってのアメリカン・ドリームが実現しました。しかし1960年代、アメリカは突然、価値観の見

34 Paul Zindel, *The Pigman*, Harper & Row, 1968.

35 S. E. Hinton, *The Outsiders*, Viking Press, 1967.

36 Richard Peck, *Are You in the House Alone?*, Viking Press, 1976.

37 リチャード・ベック 著、丘えりか 訳『レイプの街』(集英社文庫・コバルトY.A.シリーズ) 集英社, 1983.

38 Robert Cormier, *The Chocolate War*, Pantheon Books, 1974.

39 ロバート・コーミア 著、坂崎麻子 訳『チョコレート戦争』(集英社文庫・Cobalt-series) 集英社, 1987.

40 ロバート・コーミア 著、北沢和彦 訳『チョコレート・ウォー』(扶桑社ミステリー) 扶桑社, 1994.

直しを迫られます。そのきっかけとなったのが、公民権運動やウーマン・リブ運動です。これにより、それまでの「強い男の国アメリカ」という価値観がひっくり返りました。そして1964年、今度はベトナム戦争が始まり、ベトナム戦争反対運動をきっかけに大学紛争に火が付き、そして反戦運動は全世界的に広がり、世界的にも「正義の国アメリカ」というイメージが崩れていきます。

もう一つ別の流れとして、1960年代、社会的に形を成しつつあった若者層が、大人でも子どもでもない若者として独立しようという動きを見せ、芸術活動や音楽活動を繰り広げていきます。価値観がひっくり返り、秩序が変わっていったのです。

このような社会の変化のあおりを受けやすいのは子どもや若者です。子どもの非行、自殺、セックス、妊娠、そして中絶、そういったものがアメリカの中高生にとって日常的問題になってきます。そんな中で出版界に、それまでの子どもの本のような、「読んで『ああ良かった、元気になった』と思える本」ばかりを出すことに対する反省が生じます。そして、作家の間でも、1970年代には、中高生が抱える問題をそのまま写し取って突きつけるような、リアルな作品を書こうという気運が高まり、実際にそのような作品が描かれました。そういった小説は *problem novel*（問題小説）と呼ばれ、当時はヤングアダルトといえはそのような問題小説が主でした。

そして1980年代以降、ヤングアダルトの世界にSFが入り、さらにエンターテインメントが入って行って、現代のヤングアダルトに至っています。

最後の方は、駆け足になってしまいましたが、大きくまとめると、こんな感じです。どうぞ、いろんなヤングアダルト向けの本を読んでみてください。

「ヤングアダルト文学概観」紹介資料リスト

(東京本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

(デジタル化) → 「国立国会図書館デジタルコレクション」(館内・図書館送信対象館内限定公開)

注: デジタル化図書については、原則として原本はご利用いただけません。なお、一部の図書については、別途所蔵している複本を御利用いただける場合があります。

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	YA読書案内	赤木かん子 [ほか] 編	晶文社, 1993	US61-E98
2	金原瑞人「監修」による 12歳からの読書案内	金原瑞人 監修	すばる舎, 2005	Y5-N06-H29
3	金原瑞人「監修」による 12歳からの読書案内: 海外作品	金原瑞人 監修	すばる舎, 2006	Y5-N07-H30
4	今すぐ読みたい!10代 のためのYAブックガイド 150!	金原瑞人, ひこ・田中 監修	ポプラ社, 2015	Y5-N15-L433
5	今すぐ読みたい!10代 のためのYAブックガイド 150! 2	金原瑞人, ひこ・田中 監修	ポプラ社, 2017	Y5-N17-L747
6	金原瑞人(監修)による 12歳からの読書案内: 多感な時期に読みたい 100冊	金原瑞人 監修	すばる舎, 2017	Y5-N17-L396
7	13歳からの絵本ガイド YAのための100冊	金原瑞人, ひこ・田中 監修	西村書店東京出版編集部, 2018	Y5-N18-L156
8	BOOKMARK: 翻訳者による 海外文学ブックガイド	金原瑞人, 三辺律子 編	CCCメディアハウス, 2019	KE111-M8
9	さよならを待つふたりの ために	ジョン・グリーン 作, 金原瑞人, 竹内茜 訳	岩波書店, 2013	Y9-N13-L184
10	愛した人はヴァンパイア	ステファニー・メイヤー 著, 小原亜美 訳	ソニー・マガジズ, 2005	KS164-H201 (東京本館)
11	コバルト文庫40年カタ ログ: コバルト文庫創刊 40年公式記録	烏兎沼佳代 著	集英社, 2017	KG381-L147
12	レイプの街	リチャード・ベック 著, 丘えりか 訳	集英社, 1983	Y82-8701 (東京本館)
13	チョコレート・ウォー	ロバート・コーミア 著, 北沢和彦 訳	扶桑社, 1994	KS153-E705 (東京本館)
14	アウトサイダーズ	S.E. ヒントン 著, 唐沢則幸 訳	あすなる書房, 2000	KS158-G423
15	非行少年	S.E. ヒントン [著], 中田耕治 訳	集英社, 1983	Y82-8352 (東京本館)
16	高校二年の四月に	ポール・ジンデル 著, 平井イサク 訳	講談社, 1974	Y82-709 (東京本館)
17	キャッチャー・イン・ザ・ ライ	J.D. サリンジャー [著], 村上春樹 訳	白水社, 2003	KS171-H38 (東京本館)
18	ライ麦畑でつかまえて	サリンジャー [著], 野崎孝 訳	白水社, 1985	KS171-493 (東京本館)
19	危険な年齢	J.D. サリンジャー 著, 橋本福夫 訳	ダヴィッド社, 1952	933-cS16k-H (デジタル化)
20	このサンドイッチ、マヨ ネーズ忘れてる ハブ ワース 16、1924年	J.D. サリンジャー 著, 金原瑞人 訳	新潮社, 2018	KS171-L308
21	学生看護婦スウ	ボイルストン 原作, 矢崎節夫 著, 江口まひろ 訳	集英社, 1975	Y7-4744

ヤングアダルト文学概観

22	十七歳の夏	モーリン・デイリー 著, 志摩隆 訳	集英社, 1968	Y81-3743 (東京本館)
23	歌え、翔べない鳥たちよ : マヤ・アンジェロウ自伝	マヤ・アンジェロウ 著, 矢島翠 訳	青土社, 2018	GK531-L25
24	ベル・ジャー	シルヴィア・プラス 著, 青柳祐美子 訳	河出書房新社, 2004	KS167-H69 (東京本館)
25	マデックの罨	ロブ・ホワイト 作, 宮下嶺夫 訳	評論社, 2010	Y9-N10-J145
26	ビール・ストリートの恋人たち	ジェイムズ・ボールドウィン 著, 川副智子 訳	早川書房, 2019	KS179-M60
27	アメリカのありふれた朝	ジュディス・ゲスト 著, 大沢薫 訳	集英社, 1977	KS157-61 (東京本館)
28	地下鉄少年スレイク : 121日の小さな冒険	フェリス・ホルマン 著, 遠藤育枝 訳	原生林, 1990	KS158-E198 (東京本館)
29	急いで歩け、ゆっくり走れ	バーバラ・ワースバ 著, 吉野美恵子 訳	晶文社, 1980	KS175-172 (東京本館)
30	ウルティマ、ぼくに大地の教えを	ルドルフォ・アナヤ 著, 金原瑞人 訳	草思社, 1996	KS151-G39 (東京本館)
31	シズコズ・ドーター	キョウコ・モリ 著, 池田真紀子 訳	青山出版社, 1996	KS164-G103 (東京本館)
32	ウィーツィ・バット	フランチェスカ・リア・ブロック 著, 金原瑞人, 小川美紀 訳	東京創元社, 1999	KS152-G422 (東京本館)
33	From romance to realism : 50 years of growth and change in young adult literature	Michael Cart	HarperCollins Publishers, 1996	KS184-A70 (東京本館)

レジュメ

多彩なテーマで幅広い読者をつなぐ絵本の魅力

細江 幸世

赤ちゃんから大人まで幅広い読者を対象にし、様々な形態やテーマを受け入れる豊かな器として発展してきた絵本。ロングセラーだけではなく、科学、伝記など様々なジャンルに広がってきた絵本を紹介しつつ、年間 1300 冊あまり刊行される中、どのような視点で絵本を評価・選書すべきか、考えていきたいと思います。

1：絵本ってなんだろう？ 子どもって？

Picture book → 絵（と 文）の本

Children's book → 子どもの本、児童図書 ……「子ども」ってなんだ？

Pictorial book → 絵解き 図鑑

2：カッコいい本、絵がいい本 とは？

デザイン de+sign クリエイト create

・MAPS（徳間書店）について長田弘さんが書いていること

→『小さな本の大きな世界』（クレヨンハウス）より

3：たての流れ よこの視点

1冊の絵本を語る時：

- ・それまでに描かれた作品／同時代に描かれた他の作品を見て評価すること
- ・目の前の子どもにとって必要な本かどうか
- ・作家の変遷を表す思考の見取り図も読み取る
 - 本というのは1冊で存在するのではなく、今までに出ている本、これから出てくる本を内包した存在である

4：近年の絵本状況

- ・ビジュアル図鑑の人気
- ・ノンフィクション、現代的なテーマの絵本
- ・グラフィックノベルなど形態のボーダーレス化
 - 大人の読者が増えている？
- ・作家の自己表現としての絵本→“子ども”という対象者がいないことの意味（大人の子ども化）“子ども”が見えない？

→物語（フィクション）の力、物語で描けることが弱くなった？

物語のエンタメ化 過剰な説明

→感じる絵本 絵に身を委ねることの危うさ

5：絵本の多様性、近年注目されている視点

- ・赤ちゃん絵本の多様化
- ・文字なし絵本の意義
- ・科学絵本のグレードの幅が広がる
- ・伝記絵本 ～偉人伝ではない人々 女性のライフ・モデルとしての伝記
- ・子どもに社会を出会わせる絵本
- ・バリアフリー ～身体的なものど心理的なもの
- ・多文化共生 ～英米圏以外の絵本も
- ・グラフィックノベル

6：最近の本選びで気にかかること

健気な子どもにご用心

多彩なテーマで幅広い読者をつなぐ絵本の魅力
細江 幸世



皆さんおはようございます。細江幸世と申します。今日は、「多彩なテーマで幅広い読者をつなぐ絵本の魅力」というテーマでお話しします。

昨日皆さんは、小学校中高学年からヤングアダルトまでの、割と大きい子どものための本について講義を受けられたかと思います。今日は絵本と幼年文学ですので、小さい子どものための本についての講義になると思っていらっしゃる方も多いでしょう。けれども、もしかしたら絵本は必ずしもそうではないかもしれない、そんな内容の講義になるかと思います。また、新しい絵本の紹介や、アメリカなどの海外の情勢についてもお話しますが、それを知識として持ち帰るのではなく、この講義を受けて御自分の中に生まれた疑問を持ち帰り、現場でそれを検証していただきたいと思うのです。私がお話ししたことが本当なのか、御自身が職場一図書館や学校に戻ったときにそれが通用するか、そういったことを頭の片隅に置きながら、この時間を過ごしていただければと思います。

1. 絵本ってなんだろう？ 子どもって？

最初のトピックとして、「絵本ってなんだろう？ 子どもって？」と書きました。世界最初の絵本は、コメニウス (Johann Amos Comenius, 1592-1670) の『世界図絵』¹だといわれています。皆さんが普段御覧になっているような絵本とは全く違うように思われるのではないのでしょうか。絵本を pictorial book、つまり絵解きの本や図鑑、教科書的なものとして捉えた場合、この『世界図絵』が世界で最初の絵本と考えられるのです。この本の特徴は、絵と言葉が1対1で対応しているということです。つまり、文章には対応する絵があり、それを見れば、言葉が何を意味しているのかが分かるようになっています。この形式が、子どもに何かを伝える場合とても有効であるということで、この pictorial book の形式が採用されたのです。

他にも、絵本を指す言葉として picture book というものもあります。picture book とは、絵本を「絵(と文)の本」として捉えたときの言い方です。文字のない絵本というものがあるため、「文」は括弧に入れています。文字のない絵本は、wordless book や silent book とも呼ばれています。このようなものも含めて、picture book というカテゴリーで捉える考え方があります。

他にも、絵本を指す言葉として、children's book というものもあります。いわゆる子どもの本、児童図書の一つとして絵本を捉えた用語です。このときに問題になってくるのが、「子ども」という言葉です。子どもというものをどのように捉えるのかは、時代によって変わってきます。例えば、私は『ピーターラビットのおはなし』(The Tale of Peter Rabbit)²を近代絵

1 Johann Amos Comenius, *Orbis sensualium pictus*, 1658.

2 Beatrix Potter, *The Tale of Peter Rabbit*, F. Warne, 1902.

本の始まりと考えていますが、この『ピーターラビットのおはなし』が出版された1902年と現代では、「子ども」というものの捉え方が異なります。時代によって、編集者や作家は、「子どもとは何だろう」と考えながら、児童図書や絵本を作ってきました。

現代において絵本は、赤ちゃん絵本から大人が読んで楽しむものまで、幅広く作られるようになってきました。この「子どもって何だろう」という問いかけは、本に関わることだけではなく、教育や福祉、社会的な支援等を幅広く含んだかたちで考えていかなければならないテーマだと思っています。また、私にとっては、「子どもって何だ」と問い続けることが、本を作ることや本を読むということにつながっています。

2. カッコいい本、絵がいい本とは？

さて、今の世の中を見ていると、視覚情報に重きをおいた本、つまり漫画で解説したり、絵解きをしたりする本が増えています。絵本の絵も、昔に比べると、カッコいいものやセンスのいいものが増えていると感じていらっしゃる方が多いのではないのでしょうか。

ところで皆さんは、絵本を何で選びますか。絵が大事、絵で選ぶよという人、手を挙げてください。(会場、挙手) 7、8割くらいでしょうか。では、お話が大事だ、お話で選ぶという人。(会場、挙手) 数人ですね。今挙手していただいてもそうであったように、昨今の絵本の評価は、絵が大事だという立場からなされるものが多いようです。ですが、本当にそれが妥当なのかは、十分に検証しなければいけないと思っています。

カッコいい絵本やセンスのいい絵本が出てきた背景として、作り手の意識の変化があります。つまり、絵本は子どものものだから、子どもが見て分かるものにしようと思わなくなったことが、大きな理由かと思えます。

日本の場合、1990年代に出てきた絵本作家というのは、ちょうど1950年代、岩波書店の「岩波の子どもの本」シリーズや福音館書店の「こどものとも」が出始めた時に生まれた人たちです。つまり、日本の絵本の興隆期をリアルタイムで見てきた人が大人になり、1990年前後に絵本作家になったと考えられます。特に武田美穂やいとうひろしは、子どもの頃に見た「岩波の子どもの本」や漫画などからの影響を、絵本作りを始めたきっかけとして語っています。

一方、1991年にバブルがはじけて以降、広告イラストレーターが絵本の世界に入ってくるようになりました。彼らの力強いイラストレーションや現代的なイラストレーションで絵本を作れば、「今」という空気が表現できるのではないかと、編集者も作家も考えました。大雑把ではありますが、そのようにして作られたのが2000年以降の絵本と考えていいでしょう。

この変化について考える上で、デザインとクリエイトの違いについて述べておきたいと思います。デザインとは、どういうことでしょうか。今、デザインが勝った、デザイン的な絵本がとて増えています、それは何を意味するのでしょうか。

design (デザイン) という単語は、“de”と“sign”という二つの部分に分けられます。“de”は、「分ける」という意味を持った接頭語、“sign”は「示す」という意味ですね。つまり、「分けて示す」ということが「デザイン」の根本にあると考えられます。そこから、現代においてデザインが勝った絵本が求められる理由が見えてくるかと思えます。今は、本当にたくさんの事象が速いスピードで流れていく時代です。それをきちんと理解するには、整理して指し示してもらわなければ、なかなか全ての情報を処理することはできません。ですから、デザインが勝った本というのは、「情報を目的に合わせてきちんと整理し、分かりやすく指し示してくれる力を持った本」と言い換えることができます。後で紹介するビジュアル図鑑などは、まさにデザインの本といえるでしょう。

一方、クリエイトとは、創造するということです。デザインが、1を5に、2を6にするものだとすれば、クリエイトは0を1にしなければなりません。この0を1にすることが、作家や画家がしている仕事です。しかしながら、現代において、まるっきり自分の力だけで何かを作り出すということは不可能です。作家も画家も、これまでに世に出た本や美術など、いろいろなものの蓄積を見て、享受した上で創作している人たちがほとんどです。そういった過去の遺産、つまり他者の考え方や物の見方を吸収し、その中から自分の力で選び抜いたものに、更に自分の色や自分の考えというものを一筆載せられるかどうか。それによって、その本のクリエイティビティが見えてくるのです。ですから、クリエイトされている本というのは、その作家が、過去に出された本や作品などにどうしても納得できず、自分はこういう考え方をするんだ、こういう物の見方があるんだと表現したいという強い意志を感じるものでなければなりません。

私見ですが、最近の若い絵本作家の方は、あまり昔の本を読んでいないように思われます。そのため、過去にあったものと同じようなモチーフを使いながら、自分の本として出しているものが多いです。しかし、よくよく見ると、このテーマでこの描き方ならば過去にこんな本があるとか、そちらの方がいいじゃないかということも、往々にしてあります。もちろん、絵本の場合はイラストレーションが重要な要素であり、イラストレーションは時代を映す鏡でもありますので、そのイラストレーションの部分だけで評価できる、つまりイラストレーションによってその時代の空気や、物の見方を提示できるという強みがあります。しかしそれは、ともすると、時代が移れば陳腐になったり、遅れたものに見えてしまったりするという弱みにもなるのです。読む側はそういったことをきちんと考えつつ、過去と現在と未来を等分に見渡しながら、その本の評価をする必要があるのではないのでしょうか。

ここで、『マップス』³という本について見ていきましょう。この本は、出版以来とてもよく売れていて、2019年には内容を増補した愛蔵版⁴も刊行されました。私はこの英語版が出た頃、面白いなと思って買ったのですが、これが日本で翻訳されるとは思っていませんでした。日本の描き方が少しあれっと思うようなものだったので、そのまま翻訳するのはどうかなと思ったのです。けれども、徳間書店が翻訳して刊行したらあれよあれよという間にベストセラーになったので、私の目は編集者としてちょっと濁っていたなと反省しました。

ところで、長田弘さんがこの『マップス』について、『小さな本の大きな世界』⁵という本の中で次のように述べています。

『マップス 新・世界図絵』の、ていねいに描かれた四千点を超す多彩なイラストを眺めておぼえるのも、いまの電子時代にはない、世界を鳥瞰するスケッチをのぞきこむようなおもしろさと楽しさです。にもかかわらず、いくどか眺めなおすうちに、次第に考えざるをえなくなったのは、この絵地図の世界絵本に描かれていないことなどについて。

(中略)

世界の人びとの記憶に、決定的に、象徴的な意味を刻んできた都市の名、街の名。たとえば、アメリカのデモクラシーの原点となった、リンカーンのゲティスバーグ演説。そのゲティスバーグを指さすには、絵地図こそびったりなのに描かれない。また、日本の広島

3 アレクサンドラ・ミジェリンスカ、ダニエル・ミジェリンスキ 作・絵、徳間書店児童書編集部 訳『マップス：新・世界図絵』徳間書店、2014。

4 アレクサンドラ・ミジェリンスカ、ダニエル・ミジェリンスキ 作・絵、徳間書店児童書編集部 訳『マップス：新・世界図絵 愛蔵版』徳間書店、2019。

5 長田弘 著、酒井駒子 絵『小さな本の大きな世界』クレヨンハウス、2016。

や長崎。それがヒロシマ、ナガサキという記憶をもつ街だと思いださせるしくみもないのも、どこか変。

この世界図絵をつくった二人の母国はポーランド。だから、意図あってでしょう。負の世界遺産にまさきに挙げられ、歴史に深く刻まれているオシフィエンツム（アウシュヴィッツ）の名が、ポーランドのどこにも記されていないのも。ウクライナの地図に、チェルノブイリの名が見当たらないのも。とはいえ、やっぱり変は変。

いま、子どもたちに手渡されるべき世界地図はどんな地図か、さて、よくよく考えさせられます。⁶

負の遺産をどう伝えるかというのは、戦争や現代社会の問題を絵本でどう捉えるかということにもつながるかと思えます。一方で、そういった社会的な視点を抜きにしても、そもそも絵本というのは限られたページ数と文字数でしか表現できない媒体であり、描かれていることと同じくらい、描かれていないことも大事な表現となります。ですから、読み手は、描いてあることに目を奪われ、それにのっとって思考するのではなく、そこに描かれていないことがなぜ描かれなかったのかについても考えなければ、その作品は多面的に見えてはきません。絵本でない読み物においてもそのような側面はありますが、絵本というのは特にビジュアル表現が重要な要素になっていますので、描く／描かないというものがはっきりと読者に分かるようになっていきます。描かれていないことを想像するのも一つの絵本の読み方です。そのような目を持ちながら絵本に触れると、今までとは違った見方ができるのではないかと思います。

関連して、「絵に流されない」ということについても考えたいと思います。人間が得る情報の約8割は視覚によるものだともいわれています。私たちは文字を読んだり、映像を見たりして、いろいろな情報を吸収しています。そのため、絵本の絵の雰囲気や、タッチ、色遣いなどの視覚情報が、かえって事の本質を見失わせる場合もあると私は思っています。先ほど、絵本を絵で選ぶか物語で選ぶかと尋ねた時に、多くの方が絵で選ぶと挙手されましたね。絵で表現されることによって、物語の浅さや単純さが、一見ただけでは分からなくなってしまうことがあります。シンプルで強いことと、単純で浅いということは違います。そこをちゃんと見分けて読み取ることが、絵本を読むときに大事な目だと思うのです。でも、その「目」を持つことは、そうたやすいことではありません。

先ほど、デザインというのは「分けて示す」ことだと述べましたが、絵本に示される情報も誰かが分けて示したものです。そこには誰かの意図が入っています。デザイナーや作家、画家、編集者など、誰かの意図によって伝えられる情報を、私たちは見えています。ですので、その意図の先、つまりその誰かの意図は読み手に何を求めているのかということまで、私たちは見通して読まなければなりません。そのように読もうとしたときに、絵を見るだけではその意図はなかなか伝わってきません。本を選び手渡す人は、イラストレーションの持つ雰囲気や訴求力に絡めとられないための自衛の手段として、描かれていないものを見る視点や、物語や言葉の強さを見る視点を持っている必要があるのではないかと思います。

6 同上, pp.266-267.

3. たての流れ よこの視点

続いて、一冊の絵本を語るときの、「たての流れ」と「よこの視点」についてお話しします。これは、図書館で本を紹介したりブックトークをしたりする方は、皆さん考えていらっしゃるのだと思います。特に本を編集するときには、この二つの軸は必ず持つていなければいけません。

一冊の絵本を語るときには、その本がその作家のどういう流れの上で出てきた本なのかを考える必要があります。つまり、デビュー作から最新刊までの変遷をきちんと見通して、作家の中でこの本はどのような位置付けを持つものなのかを、まず読み取らなくてはなりません。もう一つは時代ですね。1902年の『ピーターラビットのおはなし』に始まる近代絵本の歴史において、今この絵本がどういう意味を持つのか、どのような位置付けを持つのか。それは、近代絵本の始まりから現代に至るまでに刊行されてきた作品たちのモチーフとかぶっていないか。描き方やものの視点がぶれていないかを見る。それが、「たての流れ」で見るという目です。

「よこの視点」というのは、今なぜこの本を手渡すのか、なぜ今この本を出さなければいけないのかという同時代性です。古い本であっても、今だから読み込めるといふものもあります。新しい本で現代の作家が作った本でも、この本は古いなといふものもあります。そのような同時代性という目で見たときに、今、手にしているこの一冊の絵本が、どのような位置にあるのかということを考えなければいけません。これが「よこの視点」です。

この「たての流れ」と「よこの視点」、その交わったところに一冊一冊の本があると考え、その絵本を深く多面的に読み取れるようになるのではないのでしょうか。

4. 近年の絵本状況

それでは、特にここ5、6年の絵本の状況についてお話ししたいと思います。

①ビジュアル図鑑の人気

まず、ビジュアル図鑑の人気が挙げられます。ビジュアル図鑑というのは、ちょっと聞き慣れない言葉かもしれませんが。大きな判型で、中身は絵がたくさん入っていて、なおかつ文章でしっかりと説明がなされている、図鑑ではない大型の絵本のことです。例えば、『シャクルトンの大漂流』⁷も、図鑑ではありませんが、絵とともに文章もしっかり書かれています。『サルってさいこう!』⁸もそうです。このような、絵が美しくて何かしら知識が得られる大型絵本が、世界的に流行しました。その最初のもので、先ほど紹介した『マップス』です。『マップス』の出版社は、その成功に鉦脈を見つけたと思ったらしく、担当した編集者が同じような様式のビジュアル図鑑を数多く編集しました。

ちなみに、ビジュアル図鑑のような大型の絵本を日本で出版する場合、大体において海外で印刷することになります。世界各国から注文を受け、例えば日本で3,000部、フランスで2,000部、アメリカで5,000部などと部数をまとめ、それをリトアニアやベトナムなどで印刷するという仕組みです。ですから、大型で美しい印刷でも、日本で刷るより廉価に供給できるというメリットがあります。でも、他国と合わせて刷部数がまとまらないとすぐには重版ができないというデメリットもあります。

7 ウィリアム・グリル 作、千葉茂樹 訳『シャクルトンの大漂流』岩波書店、2016。

8 オーウェン・デイビー 作、越智典子 訳、中川尚史 日本語版監修『サルってさいこう!』偕成社、2017。

②ノンフィクション、現代的なテーマの絵本

次に目立つのが、ノンフィクションや現代的なテーマを扱った絵本。例えば、ここ数年、難民をテーマにした絵本が欧米では数多く出ています。日本にいと、なかなか難民に目が向いていないことが多いのですが、欧米では難民の受入れが社会問題になっていたり、難民の子どもがクラスにいたり、子どもたちにとっても大変身近なテーマとなっています。そのような難民について子どもに理解させたいという願いからか、本当にたくさん本が出ています。

③グラフィックノベルなどの形態のボーダーレス化

さて、今度はグラフィックノベルの具体例として、『アライバル』⁹と『ジェーンとキツネとわたし』¹⁰をお見せしましょう。『アライバル』の作者ショーン・タン (Shaun Tan) は、日本でも2019年から、展覧会が国内各地を巡回しています。グラフィックノベルは、コマ割り、ページ数が多いという特徴があります。グラフィックノベルが近年特に目立って出てきている理由として、グラフィックノベルや漫画、絵本等という本の形態に作家があまり縛られず、刊行がボーダーレスになっているということが大きいように思います。大人の世界のものであったグラフィックノベルが、ビジュアル本として日本に入ってきているのです。その中でも特に絵本として注目されているものとして、この二冊を挙げました。

④作家の自己表現としての絵本—“子ども”という対象者がいないことの意味

ここまで、近年の絵本状況に特徴的なトピックをいくつかあげました。これに加えて、作り手側の変化として、作家が自己表現として絵本というツールを見いだしたということがいえます。子どもをことさらに意識せず、絵本という器に自分の主張を盛り込むようになったのです。これは、先ほど述べた「子どもとは何か」ということにもつながることだと思います。つまり、大人が子ども化していたり、子どもが早く大人にさせられたりすることで、「子ども」という在り方が見えにくくなっているという現代の社会状況の影響かもしれません。

または、フィクション、つまり物語の力が低下しているともいえるのかもしれませんが。ノンフィクション、つまり事実によってたくさんの方が心動かされる一方で、物語によって心が動かされることに、読者の方が麻痺しているのかもしれないと私は感じています。物語というものが、その中で内的体験をして何かを見つけるものではなく、消費し楽しむものになっているということです。そのようなエンタテインメントとしての物語は花盛りですが、もっと本来的な物語に対して、読者の方が能動的に入って何かを読み取っていく力が今は弱くなっているのではないのでしょうか。そのために、作り手の側で、過剰に説明したり、ビジュアルで物事をきちんと整理して伝えようとしたりする姿が多く見られるようになっているのかもしれませんが。

また、近年の絵本は、絵で感じることや絵によって物語ることを目標に作られてきました。先ほど絵に絡めとられないでという話をしましたが、絵の素晴らしさや雰囲気^{まじ}に身を委ねるといことは、それを見る人の受容力や感性が問われるということでもあります。読者がその絵から何を受け取れるかというのは、読者がどれだけ深くその絵を読み込めるかということによって決まります。作家がどれだけ意図を込めても、読者がそれに気付かなければ、それは描かれていないのと同じことになってしまうのです。つまり、絵が素敵だとかきれいだとかいう

9 ショーン・タン 著『アライバル』河出書房新社、2011。

10 イザベル・アルスノー 絵、ファニー・ブリット 文、河野万里子 訳『ジェーンとキツネとわたし』西村書店東京出版編集部、2015。

だけではなく、そこから何を読み取るのかという受容力を高めていかなければ、近年たくさん出版されている「感じる絵本」も、感じる絵本として成立しないというわけです。読む側と作る側の双方が、そういった点についてもっと考えた方がいいのではないかと私は思っています。

5. 絵本の多様性、近年注目されている視点

ここからは、実際に今どのような絵本が刊行されているのかについてお話ししたいと思います。

①赤ちゃん絵本の多様化

まずは赤ちゃん絵本です。今はブックスタートを実施する自治体も多くありますし、赤ちゃんに絵本を読むことが当たり前として広まってきました。たくさんの作家が赤ちゃん絵本を描いています。出版社は、昔は赤ちゃん絵本には消極的でしたが、最近は赤ちゃん絵本の方が書店で売場がしっかり確保されていて、また需要もあるため、今では多くの赤ちゃん絵本を刊行しています。

その中で近年注目されるのは、赤ちゃんのための仕掛け絵本です。特にこの『お?かお!』¹¹は、新聞やテレビでも紹介されていますので、御覧になった方もいるかと思います。この絵本、仕掛けを動かすと、描かれている顔の表情が変わります。最初に読むときは、大人と子どもが一緒になって、大人が仕掛けを動かして読んでみせて、楽しむのだと思います。そこから次第に赤ちゃん自身が、こうするんだなと理解し、めくったり動かしてみたりといった動きを覚え、自分で動かすようになります。このように、単に読んでもらうだけではなく、赤ちゃんの行動を促し赤ちゃん自身の体験にまで持っていくという点が、これまでの赤ちゃん絵本との大きな違いです。今まで赤ちゃんはページをめくるだけで達成感を感じていました。それと比べて、自分で大人のやり方を見ながら覚え、自分が行動することで絵が動くというのは、また違った達成感があると思われれます。実際、この絵本で赤ちゃんが一人遊びをしてくれて助かる、という保護者の声もあるようです。ところで、このような絵本は、おもちゃとどう違うのでしょうか。この赤ちゃん向けの仕掛け絵本の場合は、「言葉（声かけ）」付きのおもちゃという感じです。このように、本とおもちゃの境界線上にあるような本が出てきて、なおかつそれが保護者などに人気があるというのは、面白いことだなと思います。

赤ちゃん絵本というと、そのリズムや言葉、色、形などが特徴になってきますが、このきたやまようこの一番新しい赤ちゃん絵本『ここがすき』¹²は、今までの赤ちゃん絵本とは随分違います。この絵本は、1、2、1、2というリズムで、いぬさんやねこさんの好きな場所を紹介していきます。この2拍子のリズムは、赤ちゃん絵本のパターンとして、とても有効なものです。そうして最後に女の子が出てきて、「わたしの すきなところ どーこだ?」と言います。ここで、今までの赤ちゃん絵本ですと、お父さんとお母さんが出てきて抱っこしておしまいとか、一緒にくっついておしまいとか、そのような親子の一体感で安心感や温かさを表現するものが多かったのですが、きたやまようこの『ここがすき』はちょっと違います。秘密基地のようになった押し入れに入って、「ひみつ ひみつ みんなと いっしょ ここが すき」。そうして女の子は押し入れの中であうとうとして、裏表紙では眠った女の子をお母さんが抱っこして、また表紙のように女の子がお母さんの膝の上に戻るという構成です。

11 ひらぎみつえ作『お?かお!』（あかちゃんがよろこぶうごくえほん）ほるぷ出版、2017。

12 きたやまようこ作『ここがすき』こぐま社、2015。

この「ひみつ ひみつ みんなと いっしょ ここが すき」という言葉は、子どもは秘密を持つ存在であることや、秘密を持つことが楽しいことやうれしいことであること、子どもがそのようにして自分の居場所を持つようになる存在であるということを示しています。このようなことを示している赤ちゃん絵本、0、1、2歳児向けの本というものは、私は見たことがありませんでした。ここに、きたやまようこの、赤ちゃんや子どもに対する考え方が出ていると思うのです。

赤ちゃん絵本は、ともすればパターンに陥りやすいものです。王道の型として、1、2、1、2の2拍子のものや、『れいぞうこ』¹³のような声をかけて返事をする応答型のもの、物の名前などを羅列するものがあります。これらはストーリーというほど形のあるものではない、いわゆるパターンなのです。そのパターンをうまく見つけて子どもたちの日常に落とし込んでいくと、赤ちゃん絵本は割とすんなりと作ることができます。ですから、あまり物語絵本を作ったことのない作家でも、赤ちゃん絵本であればうまく作れてしまうという側面があります。

でも、そういう本が多すぎるとは思いませんか。赤ちゃん絵本が出始めた黎明期^{れいめい}、先駆けとなったせなけいこやまついのりこ、きたやまようこといった作家たちには、目の前の赤ちゃんに対する「赤ちゃんって何だろう」という問いかけがありました。その問いかけから出てきたのが、1970年代の赤ちゃん絵本です。しかし、今出ている赤ちゃん絵本からは、あまりそういった視線を感じません。パターンやデザイン、音といったものから作られているという印象で、私はそこにちょっと物足りなさを感じます。

『ここがすき』では赤ちゃんを、母子、親子、大人と子どもといった関係にある一体感の中にある存在ではなく、そこから一步飛び出して自分の場所を見つける存在、そして疲れたらまたお母さんのお膝に戻るといふ、行ったり来たりを繰り返しながら自分の歩いていける範囲を伸ばしていく存在として見ています。そのような視点で書いていることは、読んででもらっている子どもには分からないかもしれません。でも、読む大人には必ず伝わるはずで、赤ちゃん絵本とは、赤ちゃんに向けて読むものであると同時に、親に対するメッセージでもあるのです。子どもは秘密を持ち、自分の場所を持ち、自分の足で歩いていく存在だと、今の時代において親に対して知らせる意義というものを、私は強く感じています。ですので、きたやまようこはそういうことを考えてこれを作ったのかなと思いつつ、この絵本を読みました。

②文字なし絵本の意義

今、wordless bookやsilent bookと呼ばれる文字なし絵本が、新たに注目されています。国際児童図書評議会（International Board on Books for Young People: IBBY）では、2012年から、サイレントブックに関するプロジェクトを始めました。これはIBBYの職員などが、アフリカや中東からの難民が数多く到着するイタリアのランペドゥーザ島で難民の子どもたちに対してできることはないかと考え、立ち上げたものです。母語が通じない国に渡ってきた子どもたちも、文字がない絵本であれば、そこに描かれている物語や絵を楽しむことができます。母語を共有する人たちがその絵本を見て語り合うということもあるでしょう。また、移った先の国の言葉が話せない・読めない子であったとしても、文字なし絵本を通じてコミュニケーションを取ることで、言葉を獲得し、さらに文字を読むことにつなげていけるかもしれません。そういう意味では、今の日本においてもこの考えは必要なものではないでしょうか。海外から来ている子どもたちの中には、まともな言語教育を受けずに、日本語の読み書きができないままクラスに

13 新井洋行作・絵『れいぞうこ』（あけて・あけてえほん）偕成社、2009。

座っている子もいると聞きます。しかし、幼い子どもは聴解力が優れていますから、文字が読めなくても、聞いて話すことができるようになる子も多くいるはずです。そういう子たちと一緒に楽しめる本として、このような文字なし絵本を読み合うことは、とても意義があるのではないかと思います。

③科学絵本のグレードの幅が広がる

近年、科学絵本やノンフィクション絵本の層がとても厚くなりました。これまで自然科学の本というのは、図鑑が好きな子や細かい事実が好きな子が読むものという認識があり、一冊にどれだけ新しい知識を詰め込むことができるかを目標とするような本づくりがされてきました。しかし今は、2000年以降多くの学校で読み聞かせが広まったこともあり、読み聞かせを意識して作られた写真絵本や科学絵本が出てきています。

この『うまれたよ！セミ』¹⁴は「よみきかせいきものしゃしんえほん」というシリーズの中の一冊です。今までの自然科学系の写真絵本との違いは、テキストの短さ。セミの写真絵本ということで、ページを縦にめくって展開していくのも面白いところです。遠くからもよく見える大きな判型で、文字も大きくて読みやすく、文章も語りかけるような文体で書かれています。

このように、ファクト（事実）を物語の中に落とし込んで子どもたちに提供するということが、近年多くされてきました。この背景には、子どもの理科離れや、自然環境から離れてしまっている子どもたち、虫が嫌いな子どもたちが増えている傾向に対する、作家や写真家、編集者の危機感があります。そういったことが好きな子はどんどん自分で読み、どんな難しい図鑑も手にして知識を自分で獲得していくのですが、そういう子はやはり一握りです。そうではない子にも、自然や生き物に目を向けて、興味を持ってもらいたいと考えたときに、自然科学の知識を物語に落とし込んで伝えることが有効だと考え、このようなスタイルの本が作られてきたわけですね。もちろん、大きな判型で印刷できるくらいに写真の画質が向上したという技術革新も一因です。そういったものの後押しを得て、虫などにあまり興味のない子にも「びっくりした」「これなんだろう」と思わせるような、力を持った写真とお話を作ることになったというのが大きな特徴です。

また、この『ながいながい骨の旅』¹⁵は、進化の過程を物語に落とし込んだ一冊。この本の面白いところは、最初に「わからないことは、まだまだたくさんあるのです」とちゃんと書いてあるところです。科学の本で、これは分かりませんと書いてある本というのは、実はありません。今何が分かっているかが分からないかを明示しているのが、今までの本とは違うところです。

『ちいさなちいさな めにみえないびせいぶつのせかい』¹⁶は、読書感想文コンクールの課題図書にもなりましたので、御覧になった方も多いかと思います。これも絵と文章で語る科学の本で、やはり文章の力が強いです。微生物が私たちの生活にどのように関わっているのかを語る力があり、過去から未来に向けての視点がきちんとある本になっています。

『いろのかげらのしま』¹⁷は、今問題になっている海のゴミ・マイクロプラスチックがテーマになっています。物語は最初、環境問題とは全く関係なさそうなかたちで始まるのですが、最後には、ああそうだったのかと考えさせられる、小さい人から大きな人まで納得できる絵本です。

14 新開孝 写真、小杉みのり 構成・文『うまれたよ！セミ』（よみきかせいきものしゃしんえほん；15）岩崎書店、2013。

15 松田素子 文、川上和生 絵、桜木晃彦、群馬県立自然史博物館 監修『ながいながい骨の旅』講談社、2017。

16 ニコラ・デイビス 文、エミリー・サットン 絵、越智典子 訳、出川洋介 監修『ちいさなちいさな：めにみえないびせいぶつのせかい』ゴブリン書房、2014。

17 イミオン 作と絵、生田美保 訳『いろのかげらのしま』（ポプラせかいの絵本；58）ポプラ社、2017。

④子どもに社会を出会わせる絵本、伝記絵本

子どもに社会を出会わせる絵本、つまり社会科学系の絵本において、特に翻訳ものの伝記絵本が増えてきました。この要因の一つは、アメリカの教育制度の変化にあります。アメリカには、Common Core State Standardsという全州共通の教育基準があります。その中で読み物について、小学校4年生の時点で読む読み物のうちフィクションが7割、ノンフィクションが3割を占めるようにし、それを高校生になるまでにフィクション5割、ノンフィクション5割にするという基準が示されました。つまりノンフィクションを読む割合を増やしていきましょうということです。

ノンフィクションを読むというのは、日本の新しい学習指導要領で問題になったような、高校の国語で契約書を読み解くようなレベルとは訳が違います。ノンフィクションは、人物の功績や自然科学といった事実を基にして書かれるものです。フィクションではないからといって、そこに物語がないわけではありません。つまり、物語を読むということは変わりません。よって立つものがフィクションであるのかノンフィクションであるのかというだけの違いです。ノンフィクションは、単に物語の流れに乗って知識を伝えるだけではなく、ある人のやり遂げたことや考え方、在り方が強く読者の心を動かし、記憶に残るといった強さがあります。ですので、ノンフィクションを読む割合を増やす方向に変わり、それに伴いアメリカの出版界も、これまであまり出ていなかった自然科学や社会科学系の本を、たくさん手掛けるようになりました。

また、おおよそ32ページという短いページ数で何を伝えるかというときに、フィクションだと今までに出てきた本を凌駕する^{りようが}ようなものはなかなか出しにくいものです。これも、ノンフィクションの絵本が盛んになった理由の一つでしょう。ノンフィクションであれば、何を素材に持ってくるかによって、様々なものを書くことができます。伝記であれば、誰を書くのか、いつを書くのか、何を書くのか、一人の人の人生の中で子ども時代を書くのか、功を成した後を書くのか、その切り取り方によって何冊もの絵本ができるというような面白さもあります。語弊はありますが、ゼロから考えるわけではないノンフィクションの絵本の方が作りやすいということも、あるのかもしれません。ただその際、なぜ今この人なのか、なぜこのモチーフなのか、そしてどういう書き方をするのかといったことは、十分吟味して作られるべきだと思います。

スライドで紹介している中で、『せかいでさいしょのポテトチップス』¹⁸や『エマおばあちゃん、山をいく』¹⁹は、いわゆる偉人の物語ではありません。『せかいでさいしょのポテトチップス』はレストランのコックさんの話ですし、『エマおばあちゃん、山をいく』は63歳で初めて山歩きをして、3,500kmを歩き切ったおばあちゃんの話です。そのような一般市民の人生でも、そこから何か感じ取ることでできるものを絵本にしているというのは、面白いと思います。

また、こちらは、歴史に名を残した人が取り上げられている絵本です。『チャールズ・ダーウィン、世界をめぐる』²⁰、『ぼくは発明家 アレクサンダー・グラハム・ベル』²¹、『サリバン先生とヘレン ふたりの奇跡の4か月』²²などは、特に有名な人物を取り上げたものです。『ポケットに色をつめこんで』²³はちょっと珍しいかもしれません。ディズニーの女性アニメーターの

18 アン・ルノー文、フェリシタ・サラ絵、千葉茂樹訳『せかいでさいしょのポテトチップス』BL出版、2018。

19 ジェニファー・サムズ作、まつむらゆりこ訳『エマおばあちゃん、山をいく：アパラチアン・トレイルひとりたび』廣済堂あかつき、2018。

20 ジェニファー・サムズ作、まつむらゆりこ訳『チャールズ・ダーウィン、世界をめぐる』廣済堂あかつき、2017。

21 メアリー・アン・フレイザー作、おびかゆうこ訳『ぼくは発明家：アレクサンダー・グラハム・ベル』廣済堂あかつき、2017。

22 デボラ・ホプキンソン文、ラウル・コローン絵、こだまともこ訳『サリバン先生とヘレン：ふたりの奇跡の4か月』光村教育図書、2016。

23 エイミー・グリエルモ、ジャクリン・トゥールヴィル文、ブリジット・バラガー絵、神戸万知訳『ポケットに色をつめこんで：イツ・ア・スモールワールドのディズニー・アーティストメアリー・ブレアの世界』フレール館、2018。

話です。その時代、女性アニメーターでトータルなデザインまで仕切るような人は少なかったということで、近年注目されています。これまでも、ダーウィンやグラハム・ベル、ヘレン・ケラーなどは伝記がありました。しかし今は、様々な分野で突出したことをした人に目を向け、社会の多様性を体現するものとして伝記絵本を刊行するという手法が、注目されています。例えば『ゴードン・パークス』²⁴や、『炎をきりさく風になって ポストンマラソンをはじめて走った女性ランナー』²⁵など、マイノリティを描くことに焦点を合わせた絵本がそうですね。

加えて、女性のライフモデルとしての伝記やフェミニズムの本も、欧米でここ数年特に出されています。中には、いわゆる普通の物語絵本とは違ってページ数も多く、イラストレーションをとっても効果的に使った本もあります。これらは中学生や高校生でも十分楽しめるものだと思います。また、女性の権利を体現したり、つかみ取ったりした人として、例えばイギリスの女性参政権運動を牽引したエメリン・パンクハーストの伝記²⁶や、モンテッソーリ教育の創始者であるマリア・モンテッソーリなどの伝記²⁷も出ています。このシリーズはアメリカやイギリスでとても注目されているシリーズですので、御覧になった方もいらっしゃるかもしれません。このような、今まで歴史の教科書で名前は出ていたけれど子ども向けの伝記本はあまりなかった人に注目して、一冊ずつ伝記絵本を作っています。また、女性の権利についての本も一種のブームのようになっていて、日本でもいくつか翻訳して紹介されています。

この他にも、子どもに社会を出会わせる絵本はいろいろあります。先ほど難民の話をしてきましたが、この『ジャーニー国境をこえて』²⁸は、祖国を逃れて新しい国に行く道中を描いた本です。

「ふるさとの町は、海がちかい」。物語はこのように始まります。女の子が家族と一緒に遊んだ海、その海の波が黒い大きな手になり、ある日戦争が始まったことが描かれます。この作者の作品の興味深いところは、絵のもつ寓意性です。海の波が黒い大きな手のようにになって、女の子が作った砂のお城を壊してしまう。別のページでも、不安を大きな手の形で表し、お父さんを奪われた親子三人を取り囲むように描いています。難民の話なのですが、絵はグラフィカルで寓意に満ちていて、チャーミングなところもあります。寓意に満ちた絵は、どうしてこの場所にこのように描かれているのかと、読者に考えさせる力を持っています。

そうして女の子たち家族は、荷物をまとめて車に乗って逃避行をします。どんどん荷物が小さくなり、乗るものもトラックから自転車になって、とうとう最後は歩いてこの国境の壁までたどり着きます。国境の壁ではここからは通れないと言われ、それでもそこを乗り越えようとします。このような文章です。

くらい森のなか、音がするたびに、びくっとする。

でも、かあさんがいっしょにいてくれる。かあさんは、ちっともこわがってなんかいないんだ。目をつむっていたら、いつのまにか、ねむっていた。²⁹

「かあさんは、ちっともこわがってなんかいないんだ」というのは子どものせりふです。お母さんは、子どもが起きているときにはしっかりと子どもを見つめています。しかし、子ども

24 キャロル・ポストン・ウェザーフォード 文、ジェイミー・クリストフ 絵、越前敏弥 訳『ゴードン・パークス』光村教育図書、2016。

25 フランシス・ボレットティ、クリスティーナ・イー 作、スザンナ・チャップマン 絵、渋谷弘子 訳『炎をきりさく風になって：ポストンマラソンをはじめて走った女性ランナー』汐文社、2018。

26 Lisbeth Kaiser, illustrated by Ana Sanfelippo, *Emmeline Pankhurst*, Frances Lincoln Children's Books, 2017.

27 Maria Isabel Sánchez Vegara, illustrated by Raquel Martín, *Maria Montessori*, Frances Lincoln Children's Books, 2019.

28 フランチェスカ・サンナ 作、青山真知子 訳『ジャーニー国境をこえて』きじとら出版、2018。

29 同上, pp.23-25.

が眠ってしまったと分かった途端、涙が止まらなくなってしまうという様子が絵で描かれています。この親子の周りには、赤い目を持った怖いものがたくさん隠れていて、手を伸ばして三人を引き裂こうとしています。グラフィカルな絵だからこそ言葉と絵の意味を読みたいと思う、そのようなつくりになっているのがこの絵本の特徴です。最後は、いつか安心して暮らせるところにたどり着き、そこが新しい故郷になるようにと、祈りを込めたオープンエンディングになっています。この本はフランチェスカ・サンナ (Francesca Sanna) のデビュー作ですが、世界的に大きな反響を呼びました。このような暗くて重い問題だからこそグラフィカルで手に取りやすい絵で表現し、グラフィカルな絵だからこそ寓意性を読み取ろうと読者は絵に目を凝らす、そのような仕掛けをもって作られている絵本です。アムネスティ・インターナショナル英国支部が、この絵本を基に、難民について考えるワークシートも作っています。版元に日本語版³⁰もあるので見てみてください。

『いっしょにおいでよ』³¹は、ヘイトスピーチを見てしまった子どもが主人公の本です。この本では、子どもはヘイトスピーチなどの現代の問題にさらされており、見たいと思わなくてもテレビから映像が流れ、声が聞こえてしまうということが描かれます。それに対して、この子は「こんなのって いやだ」と言うのです。この本はアメリカで最初に出たものですが、こういったところがアメリカらしいな、新しいなと思う点です。今の世の中の状況に対して、子どもが嫌だと言ってよいということがはっきり伝えられています。その時に大人はどうするかというと、「そんなニュースは見なくていいよ」「君はまだ小さいんだから関係ないよ」とは言いません。お父さんは女の子に「いっしょにおいで」と言い、地下鉄の駅に行きます。そこでヒジャブをかぶった女性と目が合うと、お父さんは帽子をひょいと上げて挨拶し、女の子もそれに倣います。ヒジャブをかぶった人というのは、イスラム教徒ですよ。この本が出た2017年頃、アメリカではイスラム教徒はテロ事件と同一視され、排斥されたり遠巻きにされたりしていました。一方、帽子をひょいと上げて挨拶することには、敬意を表するという意味があります。地下鉄の駅といういろいろな人が見ている環境でそれをするのは、実はとても精神的にプレッシャーのかかることなのです。絵本では、次のように書かれています。

このひ、おんなのこと おとうさんが ちょっぴり ゆうきを だして のりこえたのは、ひとと ひとの あいだにある ちいさなかべ。そして、じぶんの ころの なかにある ちいさな かべでした。³²

このようにして女の子は、お父さんやお母さんと一緒に行動することによって、いろいろなことを学びます。まず一番に、いつものようにお手伝いをし、いつものようにご飯を食べ、日常をきちんと生きること。そうすると、硬くなった心が柔らかくなっていきます。そうして女の子は、自分にもできることがあるのではと考えて、行動します。一人で外に出て散歩をして、知らない人と挨拶をし、友達になります。

ここに書かれているのは、今の分断された社会をつなげていけるはずだ、そうしないといけないという強いメッセージです。一方で、やはり前半に描かれていることにも目を向けたいと思います。こんな世の中はおかしいと子どもが言えること、そしてそれに対して大人が説教をしたりはぐらかしたりせず態度で示すこと、これらは一つの事例として信用できる物語になっ

30 「ジャーニー 国境をこえて」(きじとら出版 | 本のご紹介) <<http://kijitora.co.jp/archives/1288/>>

31 ホリー・M・マギー文、パスカル・ルメートル 絵、なががわちひろ 訳『いっしょにおいでよ』廣済堂あかつき、2018.

32 同上、p.9.

ています。

また、戦争をテーマにした絵本では、『この計画はひみつです』³³や『花ばあば』³⁴のように、今まで明らかにされていなかったことについて、子どもにも分かるように説明する絵本が出ています。これらや『アンネのこと、すべて』³⁵などは、必ずしも読み聞かせに向く本とはいえませんが、とても大事な事実を扱っていますし、小学校中学年、高学年であればそれをきちんと読み取ることもできます。これらを子どもが手に取れるところに置いておくことが大事であり、そして大人はそれを読み取るためのサポートをしなくてはいけない、そういう本です。

⑤バリアフリー、多様性、多文化共生の絵本

バリアフリーの本も、近年大きな注目を浴びています。『みえるとかみえないとか』³⁶は、多くの人に注目されたので、御覧になっている方も多いと思います。

バリアフリーの本は、“for” “with” “about”の三つのカテゴリーに分けられるといわれます。

まず“for”の本というのは、障害のある子のための本です。例えば目の見えない子向けに点字を使ったり、文字情報がうまく読み取れない子にはピクトグラムを付けたりといった工夫をして、その子たちが読めるようにしたものです。布の絵本も、このカテゴリーに入ります。

“with”の本というのは、障害のある子もいない子も一緒に楽しめる本です。例えば『さわるめいろ』³⁷はこれに当たります。最近出た本では、『くろはおうさま』³⁸があります。この本の文章は、銀色の墨字と透明な樹脂インクの点字で書かれています。絵は、盛り上がった透明な樹脂インクで描かれています。ですから、遠目に見ただけでは分からないのですが、触ってみると、紙はざらざらしていてインクはつるつるしているので、絵が描かれていることが分かります。ただ、これは最初メキシコで出版された本なのですが、点字の高さが0.1mmしかありません。日本では点字印刷の樹脂インクの高さは0.3mmとされているため、日本においてこの本は、withの本とは言い難いのですが、メキシコではwithの本として作られました。

そして“about”の本というのは、障害やバリアについて説明している本です。自閉症スペクトラムについて紹介する『すずちゃんののうみそ』³⁹などがそれに当たります。

また、最近ではLGBTについて書かれた本も出ています。資料リストには、様々な家族の在り方や性自認、性的指向についての本も挙げています。この『レッド』⁴⁰は、全米図書館協会(American Library Association)が作成したRainbow Book Listの2016年版⁴¹にも選ばれています。

多文化共生についても触れたいと思います。日本ではアイヌ文化について取り上げた本が出ており、それからカナダでは『わたしたちだけのときは』⁴²という、過去のイヌイットの同化政策を扱った絵本が刊行されています。また、絵本というと英米のものと思われがちですが、最近では韓国や台湾、アフリカ諸国の絵本の中でも面白いものがたくさん出てきています。そ

33 ジョナ・ウィンター 文、ジャネット・ウィンター 絵、さくまゆみこ 訳『この計画はひみつです』 鈴木出版、2018。

34 クォン・ユンドク 絵・文、桑畑優香 訳『花ばあば』 ころから、2018。

35 メノー・メツェラー、ビット・ファン・レダン 著、アンネ・フランク・ハウス 編、ハック・スキヤリー 画、小林エリカ 訳、石岡史子 日本語版監修『アンネのこと、すべて：アンネの人生のこと、これまで寄せられたたくさんの質問とその答えを、ここにお伝えします』 ポプラ社、2018

36 ヨシタケシンスケ さく、伊藤亜紗 そうだん『みえるとかみえないとか』 アリス館、2018。

37 村山純子 著『さわるめいろ』（てんじつきさわるえほん）小学館、2013。

38 メネナ・コティン 文、ロサナ・ファリナ 絵、うのかずみ 訳『くろはおうさま』 サウザンブックス社、2019。

39 竹山美奈子 文、三木葉苗 絵、宇野洋太 監修『すずちゃんののうみそ：自閉症スペクトラム(ASD)のすずちゃんの、ママからのおてがみ』 岩波書店、2018。

40 マイケル・ホール 作、上田勢子 訳『レッド：あかくてあおいクレヨンのはなし』 子どもの未来社、2017。

41 2016 Rainbow Book List <<https://glbtrt.ala.org/rainbowbooks/archives/1207>>

42 デイヴィッド・アレキサンダー・ロバートソン 文、ジュリー・フレット 絵、横山和江 訳『わたしたちだけのときは』 岩波書店、2018。

ういったものを紹介するのも大切です。例えば、インドのタラブックスは、手刷りのシルクスクリーンで作られたクラフトブックで有名な出版社です。2017年から2018年にかけて板橋区立美術館で展覧会があったので、御覧になった方もいらっしゃるかもしれません。この『つなみ』⁴³は、絵巻物を持って家から家へと語り歩く吟遊詩人のような人々「ポトゥア」の協力を得て制作されたものです。2004年のスマトラ島沖地震の際の、津波の様子を絵本に落とし込んだもので、ページは蛇腹状になっています。

⑥グラフィックノベル

グラフィックノベルについては先ほども触れましたが、これはジャンルのボーダーレス化を起こす一因になっています。中には、『MARCH』⁴⁴のように、絵本ではなく漫画にしか見えないものも、グラフィックノベルとして紹介されています。この『MARCH』だけでなく、グラフィックノベルは、コミックスならではの表現で自己をキャラクター化することで、個人的な物語でありながら、同時に普遍的な物語として広がりを持たせることができるのが大きな特徴となっています。視覚的情報によって時代の風俗や風景などがすぐ分かり、文字情報だけよりも物語的感興を得やすいところからも、文章を読み慣れない若い人たちにもぜひ勧めてもらいたいジャンルです。

6. 最近の本選びで気にかかること

ここまで、様々な絵本を紹介してきました。実際に見ていただいてお分かりいただけたかと思いますが、絵本というものは、形も書き方もテーマも本当に多様です。現代において絵本は、もはや幼児とか小学校低学年といった子どもを対象にしているものとはいえないでしょう。一つの本の形態、器として絵本が存在しているということを、理解していただけたかと思います。ということは、その絵本は誰に向けたものなのかを考えることが大変重要になってきます。図書館で絵本の紹介などをする際、その絵本に出会ってほしい対象をきちんと見極めなければいけません。

最近の絵本で気になることとして、レジユメに「健気な子どもにご用心」と書きました。

例えば『ねえだっこして』⁴⁵という絵本があります。赤ちゃんがやってきたおうちの猫が、今までみたいに構ってもらえなくなり、「だっこして」と言う絵本です。一方、『ちょっとだけ』⁴⁶は、赤ちゃんがやってきて構ってもらえなくなったお姉ちゃんが、ちょっとだけミルクをコップに入れました、ちょっとだけボタンを掛けられましたというように、自分ができるようになったことを見せていくという内容です。

この二冊の絵本の違いは「健気な子ども」の存在です。『ねえだっこして』ならば、赤ちゃんが生まれてお兄さんお姉さんになった子が、猫に自分の気持ちを寄せることができるでしょう。「僕もそうなんだよね」「私もそういうふう思ったな」と、自然に心に入ってくる絵本です。一方、『ちょっとだけ』や『かあちゃんえほんよんで』⁴⁷は、健気な子どもが自発的にいろいろなことをして、うまくいかないけれど頑張っているという様子を描いています。これは、大人から見ればとてもかわいらしく、いとoshiiなと思える本です。しかし、これを読んでもらった子どもはどう感じるのでしょうか。子どもというのはとても自尊心が強い人たちです。

43 ジョイデブ&モエナ・チットロコル 著、スラニー京子 訳『つなみ』三輪舎、2018。

44 ジョン・ルイス、アンドリュウ・アイディン 作、ネイト・パウエル 画、押野素子 訳『MARCH』1~3、岩波書店、2018。

45 竹下文子 文、田中清代 絵『ねえだっこして』金の星社、2004。

46 瀧村有子 さく、鈴木永子 え『ちょっとだけ』（こどものとも絵本）福音館書店、2007。

47 かさいまり 文、北村裕花 絵『かあちゃんえほんよんで』絵本塾出版、2016。

ちょっとだけできたと言いつつ、ミルクはこぼれている、パジャマのボタンを掛け違えている、そのようにちゃんとできてないことを、「できたね」「頑張ったね」と言われることほど、彼らにとって腹立たしいことはありません。このようなかたちで子どものいとおしさを感じさせる本を、子どもに読むというのは、とても残酷だと思います（資料リスト 92～95）。子どもの目で見たとき、子どもにはどう見えるのかということを考えないと、読む対象を間違えてしまうのではないのでしょうか。

図書館では、児童サービスと子育て支援、両方の仕事が求められることがあります。児童サービスで読む本と子育て支援で読む本は違うと思います。子育て支援の対象は保護者です。保護者の大変さや辛さを受け止めて、できる範囲で頑張ろうねと支えるのが、子育て支援。ですから、例えば子育て支援の集まりの導入で、保護者の気持ちをすくい取る意味で、『ちょっとだけ』などを保護者に読み聞かせするのはいいかもしれません。しかし、子どもがサービス対象になる児童サービスには向かないでしょう。また、同じ子育て支援の中で紹介する本でも、保護者のために紹介する本と、お子さんと一緒に読む本として紹介する本は、分けて提示できるといいと思います。

そういう視点をちゃんと持って絵本を選ばなければ、つまり「絵本ならば幼い子に向けた本だろう」「幼い子が読むであろう本が絵本だろう」という考えだけで本を選んでは、大きな間違いをしてしまうことがあるので、そこには気を付けてもらいたいと思います。

絵本は、目の前の子どもに向けて語り、作られていた時代から遠く離れ、より多様に、広くなっていました。それを読者として享受することは大きな喜びです。しかし、実際に幼い子どもに手渡したい絵本、一緒に楽しみたい絵本を選ぼうとすると、こまやかに検討しないと難しい面も増えてきました。年間 1,300 冊ほど刊行される絵本の中から、何を選ぶのか、しっかりした目を持てるよう、日々読み、考えていくことがより大切になっています。

「多彩なテーマで幅広い読者をつなぐ絵本の魅力」紹介資料リスト

(東京本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	マップス：新・世界図絵	アレクサンドラ・ミジェリンスカ, ダニエル・ミジェリンスキ 作・絵, 徳間書店児童書編集部 訳	徳間書店, 2014	Y2-N14-L241
2	アニマリウム：ようこそ、動物の博物館へ	ケイティ・スコット 絵, ジェニー・ブルーム 著, [千葉啓恵] [訳]	汐文社, 2016	Y11-N16-L505
3	シャクルトンの大漂流	ウィリアム・グリル 作, 千葉茂樹 訳	岩波書店, 2016	Y2-N16-L357
4	サルってさいこう!	オーウェン・デイビー 作, 越智典子 訳, 中川尚史 日本語版監修	偕成社, 2017	Y11-N17-L454
5	いっしょにおいでよ	ホリー・M・マギー 文, パスカル・ルメートル 絵, なががわちひろ 訳	廣済堂あかつき, 2018	Y18-N18-L111
6	ジャーニー国境をこえて	フランチェスカ・サンナ 作, 青山真知子 訳	きじとら出版, 2018	Y18-N18-L201
7	なんみんってよばないで。	ケイト・ミルナー さく, こでらあつこ やく	合同出版, 2019	Y1-N19-M443
8	アライバル	ショーン・タン 著	河出書房新社, 2011	KC482-J313
9	ジェーンとキツネとわたし	イザベル・アルスノー 絵, ファニー・ブリット 文, 河野万里子 訳	西村書店東京出版編集部, 2015	Y18-N15-L162
10	お?かお!	ひらぎみつえ 作	ほるぷ出版, 2017	Y17-N17-L302
11	あかちゃん	tupera tupera 作	ブロンズ新社, 2016	Y17-N16-L319
12	れいぞうこ	新井洋行 作・絵	偕成社, 2009	Y17-N09-J482
13	ここがすき	きたやまようこ 作	こぐま社, 2015	Y17-N15-L1123
14	おはなをあげる	ジョナルノ・ローソン 作, シドニー・スミス 絵	ポプラ社, 2016	Y18-N16-L113
15	なんにかわるかな? 新版	パット・ハッチンス [作]	ほるぷ出版, 2019	Y18-N19-M233
16	ミスターワッフル!	デイヴィッド・ウィーズナー 作	BL出版, 2014	Y18-N14-L108
17	せん	スージー・リー 作	岩波書店, 2018	Y18-N18-L297
18	うまれたよ!セミ	新開孝 写真, 小杉みのり 構成・文	岩崎書店, 2013	Y11-N14-L2
19	ながいながい骨の旅	松田素子 文, 川上和生 絵, 桜木晃彦, 群馬県立自然史博物館 監修	講談社, 2017	Y11-N17-L167
20	ちいさなちいさな：めに見えないびせいぶつのせかい	ニコラ・デイビス 文, エミリー・サットン 絵, 越智典子 訳, 出川洋介 監修	ゴブリン書房, 2014	Y11-N14-L578
21	いろのかげらのしま	イミョンエ 作と絵, 生田美保 訳	ポプラ社, 2017	Y18-N17-L293

22	せかいでさいしょのポテトチップス	アン・ルノー 文, フェリシタ・サラ 絵, 千葉茂樹 訳	BL 出版, 2018	Y18-N18-L121
23	エマおばあちゃん、山をいく：アパラチアン・トレイルひとりたび	ジェニファー・サームズ 作, まつむらゆりこ 訳	廣済堂あかつき, 2018	Y3-N18-L169
24	耳の聞こえないメジャーリーガー ウィリアム・ホイ	ナンシー・チャーニン 文, ジェズ・ツヤ 絵, 齊藤洋 訳	光村教育図書, 2016	Y3-N16-L179
25	ぼくは発明家：アレクサンダー・グラハム・ベル	メアリー・アン・フレイザー 作, おびかゆうこ 訳	廣済堂あかつき, 2017	Y3-N18-L33
26	発明家になった女の子 マッティ	エミリー・アーノルド・マッカリー 作, 宮坂宏美 訳	光村教育図書, 2017	Y3-N17-L168
27	チャールズ・ダーウィン、世界をめぐる	ジェニファー・サームズ 作, まつむらゆりこ 訳	廣済堂あかつき, 2017	Y3-N17-L167
28	サリバン先生とヘレン：ふたりの奇跡の4か月	デボラ・ホプキンソン 文, ラウル・コローン 絵, こだまともこ 訳	光村教育図書, 2016	Y3-N16-L146
29	ポケットに色をつめこんで：イツ・ア・スモールワールドのディズニー・アーティスト メアリー・ブレアの世界	エイミー・グリエルモ, ジャクリーン・トゥールヴィル 文, ブリジット・バラガー 絵, 神戸万知 訳	フレーベル館, 2018	Y3-N18-L226
30	しぜんのかたち せかいのかたち：建築家フランク・ロイド・ライトのお話	K.L. ゴーイング 文, ローレン・ストリンガー 絵, 千葉茂樹 訳	BL 出版, 2018	Y3-N18-L146
31	ゴードン・パークス	キャロル・ボストン・ウェザーフォード 文, ジェイミー・クリストフ 絵, 越前敏弥 訳	光村教育図書, 2016	Y3-N16-L155
32	炎をきりさく風になって：ボストンマラソンをはじめて走った女性ランナー	フランシス・ボレッティ, クリスティーナ・イー 作, スザンナ・チャップマン 絵, 渋谷弘子 訳	汐文社, 2018	Y3-N18-L74
33	北欧に学ぶ小さなフェミニストの本	サッサ・ブーレグレン 作, 梶谷玲子 訳	岩崎書店, 2018	Y1-N18-L251
34	世界を変えた100人の女の子の物語：グッドナイトストーリーフォーレベルガールズ	エレナ・ファヴィッリ, フランチェスカ・カヴァッロ 文, 芹澤恵, 高里ひろ 訳	河出書房新社, 2018	Y3-N18-L96
35	世界を変えた50人の女性科学者たち	レイチェル・イグノトフスキー 著, 野中モモ 訳	創元社, 2018	M31-L53
36	世界にひかりをともした13人の女の子の物語	チェルシー・クリントン 作, アレグザンドラ・ボーイガー 絵, 西田佳子 訳	潮出版社, 2018	Y3-N18-L167
37	マララのまほうのえんぴつ	マララ・ユスフザイ 作, キャラスクエット 絵, 木坂涼 訳	ポプラ社, 2017	Y3-N18-L11
38	マララさんこんにちは：世界でいちばん勇敢な少女へ	ローズマリー・マカーニー 文, 西田佳子 訳	西村書店東京出版編集部, 2014	Y5-N14-L423
39	大統領を動かした女性 ルース・ギンズバーグ：男女差別とたたかう最高裁判事	ジョナ・ウィンター 著, ステイシー・イナースト 絵, 渋谷弘子 訳	汐文社, 2018	Y3-N18-L91
40	Emmeline Pankhurst	written by Lisbeth Kaiser ; illustrated by Ana Sanfelippo	London : Frances Lincoln Children's Books, 2017	(所蔵なし)

41	Maria Montessori	written by Maria Isabel Sánchez Vegara ; illustrated by Raquel Martín	London : Frances Lincoln Children's Books, 2019	(所蔵なし)
42	おなじほしをみつめて	ページ・ブリット 作, ショーン・クウォールズ, セリーナ・アルコー 絵, ほむらひろし 訳	フレーベル館, 2018	Y18-N18-L101
43	エロイーサと虫たち	ハイロ・ブイトラゴ 文, ラファエル・ジョクテング 絵, 宇野和美 訳	さ・え・ら書房, 2011	Y18-N11-J327
44	難民になったねこクンクーシュ	マイン・ヴェンチューラ 文, ベディ・グオ 絵, ヤズミン・サイキア 監修, 中井はるの 訳	かがわ出版, 2018	Y1-N18-L366
45	まいごのねこ : ほんとうにあった、難民のかぞくのおはなし	ダグ・カンツ, エイミー・シュローズ ぶん, スー・コーネリソン え, 野沢佳織 やく	岩崎書店, 2018	Y1-N18-L246
46	石たちの声がきこえる	マーグリート・ルアーズ 作, ニザール・アリー・バドル 絵, 前田君江 訳	新日本出版社, 2018	Y1-N18-L372
47	みなまたの木	三枝三七子 絵と文, 原田正純 監修	創英社, 2011	Y1-N11-J356
48	こどものとうひょうおとなのせんきょ	かこさとし さく	童心社, 1983	Y1-589
49	おばあちゃんとバスにのって	マット・デ・ラ・ペーニャ 作, クリスチャン・ロビンソン 絵, 石津ちひろ 訳	鈴木出版, 2016	Y18-N16-L265
50	道はみんなのもの	クルーサ 文, モニカ・ドベルト 絵, 岡野富茂子, 岡野恭介 共訳	さ・え・ら書房, 2013	Y18-N13-L29
51	わたしのせいじゃない : せきにんについて	レイフ・クリスチャンソン 文, にもんじまさあき 訳, ディック・ステンペリ 絵	岩崎書店, 1996	Y18-11113
52	この計画はひみつです	ジョナ・ウィンター 文, ジャネット・ウィンター 絵, さくまゆみこ 訳	鈴木出版, 2018	Y11-N18-L404
53	花ばあば	クオン・ユンドク 絵・文, 桑畑優香 訳	ころから, 2018	EG71-L142
54	かあちゃんのジャガイモばたけ	アニタ・ローベル さく, まつかわまゆみ やく	評論社, 2018	Y18-N18-L256
55	アンネのこと、すべて : アンネの人生のこと、これまで寄せられたたくさんの質問とその答えを、ここにお伝えします	メノー・メッツェラー, ピット・ファン・レダン 著, アンネ・フランク・ハウス 編, ハック・スキヤリー 画, 小林エリカ 訳, 石岡史子 日本語版監修	ポプラ社, 2018	Y3-N19-M10
56	おなじ月をみて	ジミー・リャオ 作, 天野健太郎 訳	ブロンズ新社, 2018	Y18-N18-L267
57	みえるとかみえないとか	ヨシタケシンスケ さく, 伊藤亜紗 そうだん	アリス館, 2018	Y1-N18-L307
58	目の見えない人は世界をどう見ているのか	伊藤亜紗 著	光文社, 2015	EG61-L241
59	いっばんのせんとマヌエル	マリア・ホセ・フェラーダ 文, パトリシオ・メナ 絵, 星野由美 訳	偕成社, 2017	Y18-N17-L222
60	マルコとババ : ダウン症のあるむすことぼくのスケッチブック	グスティ 作・絵, 宇野和美 訳	偕成社, 2018	Y1-N18-L60

61	くろはおうさま	メネナ・コティン 文, ロサナ・ファリナ 絵, 宇野和美 訳	サウザンブックス社, 2019	(所蔵なし)
62	すずちゃんのうみそ： 自閉症スペクトラム (ASD) のすずちゃんの、 ママからのおてがみ	竹山美奈子 文, 三木葉苗 絵, 宇野洋太 監修	岩崎書店, 2018	Y1-N18-L27
63	レインボーフラッグ誕生 物語：セクシュアルマイ ノリティの政治家ハー ヴェイ・ミルク	ロブ・サンダース 作, スティーブン・サレルノ 絵, 日高庸晴 訳	汐文社, 2018	Y3-N18-L101
64	レッド：あかくてあおい クレヨンのはなし	マイケル・ホール 作, 上田勢子 訳	子どもの未来社, 2017	Y18-N17-L26
65	王さまと王さま	リンダ・ハーン, スターン・ナイランド 絵と文, アンドレア・ゲルマー, 眞野豊 訳	ポット出版, 2015	Y18-N15-L207
66	タンタンタンゴはパパふ たり	ジャスティン・リチャードソン, ピーター・パーネル 文, ヘンリー・コール 絵, 尾辻かな子, 前田和男 訳	ポット出版, 2008	Y18-N08-J199
67	ふたりママの家で	パトリシア・ボラッコ 絵・文, 中川亜紀子 訳	サウザンブックス社, 2018	Y18-N19-M256
68	いろいろかぞく	トッド・パール さく, ほむらひろし やく	フレーベル館, 2005	Y18-N06-H9
69	いろいろろんなかぞく のほん	メアリ・ホフマン ぶん, ロス・アスキス え, すぎもとえみ やく	少年写真新聞社, 2018	Y1-N18-L44
70	わたしたちだけのときは	デイヴィッド・アレキサンダー・ロ バートソン 文, ジュリー・フレット 絵, 横山和江 訳	岩波書店, 2018	Y18-N18-L246
71	クマと少年	あべ弘士 作	ブロンズ新社, 2018	Y17-N18-L521
72	ひまなこなべ：アイヌの むかしばなし	萱野茂 文, どいかや 絵	あすなる書房, 2016	Y17-N16-L845
73	イオマンテ：めぐるいの ちの贈り物	寮美千子 文, 小林敏也 画	ロクリン社, 2018	Y8-N18-L116
74	リズムがみえる	ミシェル ウッド 絵, トヨミ アイガス 文, 金原瑞人 訳, ピーター バラカン 監修	サウザンブックス社, 2018	Y6-N19-M299
75	長崎ものがたりお船が出 る日	小林豊 文・絵	岩波書店, 2015	Y17-N15-L945
76	まぼろしのデレン：間宮 林蔵の北方探検	関屋敏隆 さく, 大塚和義 監修	福音館書店, 2005	Y2-N05-H21
77	北加伊道：松浦武四郎の エゾ地探検	関屋敏隆 文・型染版画	ポプラ社, 2014	Y3-N14-L87
78	あめだま	ヘクヒナ 作, 長谷川義史 訳	ブロンズ新社, 2018	Y18-N18-L318
79	こころの家	キム・ヒギョン 文, イヴォナ・フミエレフスカ 絵, かみやにじ 訳	岩波書店, 2012	Y18-N13-L141
80	カタカタカタ：おばあ ちゃんのたからもの	リンシャオペイ さく, 宝迫典子 やく	ほるぷ出版, 2018	Y18-N18-L192

多彩なテーマで幅広い読者をつなぐ絵本の魅力

81	しんぞうとひげ：アフリカの民話	しまおかゆみこ 再話, モハメッド・チャリンダ 絵	ポプラ社, 2015	Y18-N15-L80
82	ごちそうの木：タンザニアのむかしばなし	ジョン・キラカ 作, さくまゆみこ 訳	西村書店東京出版編集部, 2017	Y18-N17-L190
83	タラブックス：インドのちいさな出版社、まっすぐに本をつくる	野瀬奈津子, 松岡宏大, 矢萩多聞 著	玄光社, 2017	UE57-L54
84	夜の木	バジュー・シャーム, ドウルガー・バーイー, ラーム・シン・ウルヴェーティ 画, 青木恵都 訳	タムラ堂, 2012	YP18-L1
85	水の生きもの	ランバロス・ジャー 著, 市川恵里 訳	河出書房新社, 2013	YP14-L10 (東京本館)
86	つなみ	ジョイデブ&モエナ・チットロコル 著, スラニー京子 訳	三輪舎, 2018	YP18-L6
87	MARCH 1	ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画, 押野素子 訳	岩波書店, 2018	Y84-L64644
88	MARCH 2	ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画, 押野素子 訳	岩波書店, 2018	Y84-L64645
89	MARCH 3	ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画, 押野素子 訳	岩波書店, 2018	Y84-L66309
90	沸点：ソウル・オン・ザ・ストリート 増補版	チェ・ギョソク 作, 加藤直樹 訳, クォン・ヨンソク 監訳・解説	ころから, 2018	Y84-L68888 (東京本館)
91	ねえだっこして	竹下文子 文, 田中清代 絵	金の星社, 2004	Y17-N04-H621
92	ちょっとだけ	瀧村有子 さく, 鈴木永子 え	福音館書店, 2007	Y17-N07-H1422
93	かあちゃんえほんよんで	かさいまり 文, 北村裕花 絵	絵本塾出版, 2016	Y17-N16-L127
94	ママが10にん!?	天野慶 文, はまのゆか 絵	ほるぷ出版, 2018	Y17-N18-L135
95	ごめんなさい	サトシン さく, 羽尻利門 え	ポプラ社, 2017	Y17-N17-L577

レジュメ

幼年童話事始め

佐々木 由美子

1. 幼年童話とは

- ① 耳で聞く文学としての幼年童話
- ② 初めて一人で読む文学としての幼年童話
- ③ 絵本と幼年童話

2. 幼年童話の現状

- ① 創作のむずかしさ
- ② 批評・研究の少なさ

3. 幼い子の心性と幼年童話

- ① 子どもの読みと大人の読み
- ② 自己中心性とアニミズム
- ③ 魔術的思考

4. 幼年童話の変遷

- ① 幼年童話の成り立ち
- ② 聞くことと読むことの分裂
- ③ 現代幼年文学の幕開け～幼児観の転換
- ④ 商品の時代・幼年童話低迷言説

5. 幼い子どもの心に寄り添う

- ① 遊びの世界～作品世界で遊ぶ
- ② 世界の豊かさ・あたたかさ
- ③ 幼い子の心理を描く

6. おわりに

幼年童話事始め

佐々木由美子



東京未来大学の佐々木と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

今日は、幼い読者の発達段階や心の在り様^{あよう}を踏まえた上で、日本の幼年童話を中心に幼年童話の特徴や魅力、その変遷をたどりたいと思います。また、幼い子どもにとっての文学とは何かについても、併せて考えたいと思います。

1. 幼年童話とは

幼年童話は、幼児から小学校低学年までの子どもたちを中心読者とし、親しい大人に読んでもらって受容する「聞く文学」としての要素と、幼い子どもが初めて一人で読む「読む文学」としての要素を併せ持っています。この二つの要素が、時に分裂しながら共存しているといってもよいかと思ひます。

まず、『児童文学事典』の「幼年童話」の定義を見てみましょう。

幼児・幼年期（就学前～小学一・二年ごろ）の子どもを読者対象とした文学を幼年童話と呼ぶ。就学前幼児のための読み聞かせ童話を「幼児童話」として区別する場合もある。雑誌「赤い鳥」が昭和初期に幼年読み物と名づけて、片かなに平易な漢字混じりの童話を発表したのが幼年童話の先駆といわれている¹。

そもそもこの定義自体が曖昧です。この定義だと、同じ作品でも、場合によって「幼年童話」と呼んだり、「幼児童話」と呼んだりするということが起こり得ます。また、幼年童話が昭和初期に誕生したと書かれています。これは何をもって幼年童話とするのかという問題と関わってきますが、幼い子どものための作品自体は、明治期には既に書かれています。この辺りの、幼年童話の誕生や変遷については、後ほど述べていきたいと思います。

①耳で聞く文学としての幼年童話

まずは、「聞く文学」としての幼年童話を考えてみましょう。言葉は、文字の文化と、声の文化に分けて考えることができます。通常、児童文学や一般の文学を読むことは、文字の文化に属します。しかし、この定義からも分かるように、幼年童話は声の文化と密接につながっているのです。幼年童話の中心読者である幼い子どもたちは、まだ文字を持たない、あるいは文字を習得中の段階にあります。赤ちゃんが、周囲の大人が語りかける言葉や歌いかける言葉を聞いて世界を認識し、全幅の信頼を寄せて言葉と心を育んでいくように、幼年童話の読者たち

1 日本児童文学学会 編『児童文学事典』東京書籍、1988、p.791.

も、その延長線上の「耳の時代」、つまり「声の文化」の中にあるのです。人の体を通して出てくる「声としての言葉」は、体温を持った生きた言葉だと思います。言葉を発する人の息遣いだとか、表情だとか、思いや愛情のこもった温かい言葉です。この声としての生きた言葉が、人を人として成長させていくのです。

翻訳家で児童文学研究者の瀬田貞二（1916-1979）は、「母親が子どもがまだ物心のつかないうちから歌う童唄のたぐい、子守歌のようなものが、いちばん大切に、児童文学の第一歩、その基本じゃないか²」と述べています。児童文学の中でも、最も幼い子どものためのものである幼年童話を考える上で、とても大切な視点だと思います。

「耳で聞く文学」という点から見ると、幼稚園・保育園の年長さんで、毎日少しずつ読んでもらって楽しんでいる幼年童話作品というものはたくさんあります。例えば『いやいやえん³』、『もりのへなそうる⁴』、『ロボット・カミイ⁵』、『エルマーのぼうけん⁶』などです。耳の時代に生きている子どもたちは、視覚に頼らない分、大人よりも言葉に敏感なので、毎日少しずつ読んでもらっても、よく覚えているのです。次はどうなるんだろうと、物語の続きを読んでもらうのを楽しみにしながら、毎日毎日少しずつ物語を積み重ねていきます。そして読み終わる頃には、作品世界がすっかり自分たちのものになっているのです。とても素敵な読書だなと思います。

物語がすっかり自分たちのものになると、今度はごっこ遊びが始まります。一旦吸収したものを表現しようとするのです。例えば、次に御紹介するのは、東京都内のある幼稚園の実践です。

『もりのへなそうる』を読んでもらっていた5歳児たちが、夏に2泊3日でキャンプに行くことになりました。すると子どもたちが「へなそうるのたまごを探したい！」と言い出します。それで、どうすれば「へなそうるのたまご」を見つけられるのか、子どもたちは話し合います。『もりのへなそうる』の本を取り出してきて、どこかにヒントはないか考え、てつたくんとみつやくんに手紙を出すということを思いつきます。「へなそうるとちょっとあそびたいので、いばしょをおしえてください」と書くのです。いよいよキャンプ初日、子どもたちは、へなそうるのために食べ物を用意し、「あいせいようちえんのこどもたちがとまっています」という看板の下に置いておきました。次の日になると、そこにちゃんと、てつたくんたちから地図が届いていました。この地図を頼りに子どもたちが森の中を探検し、なんと「へなそうるのたまご」を発見するのです。子どもたちは「あった！ 本当にあった！」「生まれたらどうする！？」と大興奮です。

この背景には、先生たちが子どもの思いを大切に、一緒に物語を楽しもうという陰の働きもあります。しかし同時に、子どもたちの心の中で、どれだけへなそうるが親しい友達として存在しているかということがよく分かります。実はこの後も子どもたちの「へなそうる熱」は冷めず、ずっとへなそうると共に過ごして、そして卒園していきました。卒園式にも「へなそうると一緒に！」と言い出したそうです。

2 瀬田貞二著『幼い子の文学』（中公新書）中央公論社、1980、pp.58-59.

3 中川李枝子著、大村百合子絵『いやいやえん』福音館書店、1962.

4 わたなべしげおさく、やまわきゆりこえ『もりのへなそうる』福音館書店、1971.

5 古田足日著、ほりうちせいいち絵『ロボット・カミイ』福音館書店、1970.

6 ルース・スタイルス・ガネットさく、わたなべしげおさく、ルース・クリスマン・ガネット絵『エルマーのぼうけん』福音館書店、1963.

②初めて一人で読む文学としての幼年童話

幼年童話にはもう一つ、初めて一人で読む文学としての要素があります。子どもの読書活動に関わっている山口雅子さんによると、幼い子どもたちにとって、幼年童話は装丁や本のつくりや厚さから、絵本とは違う「ほんとの本」なのだそうです⁷。特に朝の読書の時間などでは、絵本ではなく「ほんとの本」であることが子どもたちにとっても意味があるということなんです。一人で一冊を読み切ったんだという満足感や達成感は、やはりこの時期の子どもにとって、大きな意味があるだろうと思います。

では実際に、どんな作品が「朝の読書」で読まれているのでしょうか。朝の読書推進協議会が調査した、2018年の小学校低学年の「朝読」で読まれた本を見てみると、「おしりたんてい」シリーズ、「かいけつゾロリ」や、「ルルとララ」シリーズなどが見られます⁸。どちらかという言葉で物語を紡ぐというよりも、視覚的要素の強い作品が多く挙がっているのが分かります。やはり文字を習い始めたばかりの子どもたちにとって、物語を読むということは大変なことなのだと思います。私たちも、英語を学習したからといって、すぐに英語の作品を楽しく読めるようにはなりませんよね。楽しく読めるようになるまでには、それなりの時間が必要なのです。物語を読むことと、文字を読むことは、やはり違います。一文字一文字を読めたとしても、物語を理解するには十分ではありません。言葉から自分なりのイメージを広げられるようになって初めて、物語が楽しめるのです。つまり、お話を聞いていてわくわくどきどきした楽しい体験が、自分でも読んでみたいという思いにつながっていくのだと思います。

例えば、2014年の浦安市立図書館における幼年童話のベストリーダーを見てみると、上位3位を『エルマーのぼうけん』シリーズが占めています⁹。なぜこんなにエルマーが人気なのかというと、実は浦安市内の幼稚園では、冬頃から、年長組の担任の先生が『エルマーのぼうけん』を読み始めることが多いのだそうです。それでその時期から、エルマーの貸出しが急激に伸びていくのです。つまり、読んでもらって楽しいから、自分でもこのお話を読んでみよう、とつながっていくのでしょう。

今、子どもが字を読めるようになると、自分で読みなさいとおっしゃるお母さんは多いです。けれども、やはり親しい大人から読んでもらって受容するという要素は、幼年童話にとって、とても大きいと思います。

③絵本と幼年童話

ここで、絵本と幼年童話について述べておきたいと思います。これは絵本なのか、幼年童話なのかと、判断に迷うような作品も多いかと思います。また、「絵童話」といわれる作品もあり、より混乱を招いている部分もあるでしょう。

しかし私自身は、この二つを区別することに大きな意味はないと思っています。絵本と幼年童話の違いは、端的に言ってしまえば、表現形式の違いです。実は絵本と幼年童話は、元は同じ話である場合も多いのです。例えば『ぐりとぐら』¹⁰は、最初は福音館の保護者向け雑誌『母の友』¹¹に、3歳の子に聞かせる話として、童話「たまご」¹²というタイトルで登場しています。また、1960年代から1970年代にかけて出版された幼年童話は、短編連作というかたちを取っ

7 「ほんとの本」『母の友』734号、2014.7、p.14.

8 トーハン 『「2018年度『朝の読書』で読まれた本」を発表』 <https://www.tohan.jp/news/20190515_1404.html>

9 伊藤明美 「短くも、すばらしい時代」『母の友』734号、2014.7、p.16.

10 なかがわりえこ、おおむらゆりこ [著] 『ぐりとぐら』 (<こどものとも>傑作集; 21) 福音館書店、1967.

11 『母の友』 福音館書店、1953-

12 中川李枝子 「たまご」『母の友』119号、1963.6、pp.66-68.

ていた作品が多かったため、後にその一話ずつが絵本として出版されたものも多くあります。例えば『ぼくは王さま』¹³、『ちいさいモモちゃん』¹⁴、『くまの子ウーフ』¹⁵などがそうです。

絵本というのは絵と言葉という二つの異なるメディアを用いた表現形式です。ページをめくることによって、時間と空間が移動して、物語が進んでいきます。ですので、どの場面を絵にするのかや、どこでページを分けるのか、ページをめくりたくなるような仕掛けの存在など、絵本としての特徴があります。また、絵が語ることによって、言葉では表現されていない物語が立ち上がってくることもあります。一方、幼年童話は、もちろん挿絵として絵の果たす役割は大きいですが、やはり言葉が主となります。言葉が自立し、言葉によって物語を紡いでいきます。

例として、『ちいさいモモちゃん』を見てみましょう。『ちいさいモモちゃん』に収録されているお話の一つ、「あめこんこん」は、いろいろな画家によって絵本化されています。そのうち二冊を見比べてみましょう。一冊目は、中谷千代子さんの絵による『ちいさいモモちゃんあめこんこん』¹⁶、もう一冊は武田美穂さんの絵による『あめこんこん』¹⁷です。どこで文章が切れているか、どんなところが絵になっているかを見ると、一場面目から、全く異なることが分かります。武田美穂さん版では、「いいものがかってもらいました。なんでしょう」と最初の一文だけで場面を構成しています。しかも、「なんでしょう」という問いかけの言葉で終わっています。絵を見ると、モモちゃんが後ろに何かを隠していますね。子どもだったら「なんでしょう」と言われて「かさだ!」と答えると思います。これがまさにページターナー、つまり次のページをめくりたくなる仕掛けであり、絵が語るということだと思えます。ページをめくると、「あのね」で始まり、うれしそうな顔をしたモモちゃんがいます。中谷版と武田版を見比べると、随分印象が変わると思われたのではないのでしょうか。ページ割りや、どこの部分を絵にするのか、どう物語が進んでいくのかという点で、絵本と幼年童話には表現形式の違いがあると思えます。

絵本と幼年童話は区別して論じられることが多いのですが、そのような区別にはこだわらず、幼い子どもが受容できる文学作品として捉えてもよいのではないかなと思います。『幼い子の文学』の中で瀬田貞二は、絵本や幼年童話だけでなく、子どもの詩やわらべうた、なぞなぞなどを含め「幼い子の文学」と総称し論じています。私はそれにとっても共感するのです。実際に幼い子どもにとっては、それが絵本なのか幼年童話なのかということは、全く関係がないことです。そうした目先の分類やジャンルに細かくこだわるよりも、幼い子どもの文学とは何なのか、その本質とは何なのかということを考えていくことが、大切なのではないかと思います。

2. 幼年童話の現状

それでは、その幼年童話の現状についてお話ししたいと思います。このところ、絵本やヤングアダルト作品はにぎわいを見せている一方で、児童文学のコアの読者に対する作品が少し心もとないところがあると思えます。特に幼年童話については、以前、宮川健郎先生が「絶滅危惧種」というおっしゃり方をしていました¹⁸。私はびっくりして、「私が研究している幼年童話が絶滅しちゃう…」と思ったのですが、そのような言い方をされるくらい、話題になる作

13 寺村輝夫 著、和田誠 絵『ぼくは王さま』（日本の創作童話）理論社、1961。

14 松谷みよ子 著『ちいさいモモちゃん』講談社、1964。

15 神沢利子 作、井上洋介 絵『くまの子ウーフ』（ポプラ社の創作童話；11）ポプラ社、1969。

16 松谷みよ子 文、中谷千代子 絵『ちいさいモモちゃんあめこんこん』講談社、1971。

17 松谷みよ子 文、武田美穂 絵『あめこんこん』（ちいさいモモちゃんえほん；1）講談社、1995。

18 国立国会図書館国際子ども図書館 平成21年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「いつ、何と出会うかー赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」p.23<https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3192144_po_H21-full.pdf?contentNo=1>

品が少ないということだと思います。

①創作のむずかしさ

そもそも幼年童話は、児童文学の中でも最も創作が難しく、傑作が少ない分野だといわれます。一見、短くて簡単に書けそうに思われますが、文学という以上、愛情や友情、自分とは何かといった物事の真実や真理が描かれます。そうした抽象的な物事を幼い子どもが理解できるような言葉や筋で語ることは、とても難しいことなのです。

例えば、太陽がどうして沈むのかと3歳の子に聞かれたら、どう説明しますか。(受講者を指名して)いかがでしょうか。

(受講者)「3歳の子ですか…。みんなが寝なきゃいけないのと同じように、お日さまもお休みの時間が必要なんだよって言います。」

なるほど。もう一人聞いてみましょう。(他の受講生を指名して) どうでしょうか。

(受講者)「夜を迎えるため、では分からないですよね…。難しい。」

難しいですよ。もっと大きい子ならば「地球が自転しててね」と言えるでしょう。けれども、3歳の子だと「ジテンってなに?じてんしゃのこと?」になってしまうでしょう。やはり、幼い子に語るための言葉や文体というものがあるのです。今言ってくださったように、「太陽がおうちに帰ってね、お休みするんだよ」と言えば「そっか、わたしもねんねするし、太陽もみんなとおなじようにねんねするんだよね」と、すんと腑に落ちると思います。

児童文学自体、「児童」という冠を持っているので、一般文学とは異なる制約や独自性を持っています。けれども、幼年童話は、テーマ、語彙、文体、構成など、児童文学の中でも最も制約が大きいのです。語彙についていえば、中学生くらいの子に語るのと5歳の子に語るのでは、全く違います。子どもの中の子どもに語る幼年童話は、児童文学の問題や特徴が最も表れるのだと思います。私は、幼年童話は人間にとって一番基本的で大切なことを、一番分かりやすく語る文学だと思っています。

児童文学作家であり、保育紙芝居等の発展に尽力した川崎大治は、「幼年童話は、児童文学のなかの華ともいえる。大きい子供への作品なら、小説家でもかけないことはないが、幼年のために書くということになると、まったく特別の能力が必要である。それこそほんとうの児童文学作家でなければ、出来ない、ちょっとおそろしいほどの仕事でもある」¹⁹と述べています。実際に、本当に難しいことなのだろうと思うのです。

②批評・研究の少なさ

幼年童話は、創作が難しいだけでなく、批評や研究自体も少ない現状にあります。これは、評価がしにくく、どう評価したらいいか分からない、つまり評価が難しいということが第一にあると思います。大人の文学理論を幼年童話に当てはめても、作品の真価は計れません。今や幼年童話の古典的作品となっている中川李枝子の『いやいやえん』でさえ、発表当初はあまり評価されませんでした。「これは文学なのか?」とか、「無思想童話」だとも批評されました。それをさらに発展させて、幼年童話は文学として成り立つのかという批評もされています。それだけ幼年童話は評価が難しいということなのでしょう。幼年童話には幼年童話独自の批評理論が必要だと思うのです。

また、絵本であれば、大人のための絵本ブックリストなども含め、数多くのブックリストが

19 川崎大治「幼年童話の創作方法」『日本児童文学』4巻9号,1958.11,p.42.

出版されています。また、絵本に関するエッセイ、研究書、論文などもたくさん出ています。しかし、幼年童話に関しては数が少ないのです。そのような状況の中、大阪国際児童文学振興財団による編集で『幼年文学おすすめブックガイド』²⁰が出版されました。私も少し関わらせていただきましたが、「文字を読みはじめたばかりのころに」「少し文字に慣れてきたころに」と段階別にマークが付けてあり、使いやすいです。

例えば絵本のブックリストであれば、いくつかのリストを比較して、取り上げられている作品や評価の違いを比較することができます。そうして、自分と違う見方や評価を知ること、作品に対する新たな視点を得ることもできますし、議論や評価も深まっていくものです。幼年童話において問題なのは、そうしたものの数が少ない、あまり論じられないということだと思います。

3. 幼い子の心性と幼年童話

かつて私たちも子どもでした。私たちの中には、「内なる子ども」あるいは「子ども性」といったものが、今も確実にあるのです。にもかかわらず、大人でいる時間が長くなると、幼い頃の感性や感覚が遠いものになってしまいます。そこが幼年童話の難しさだと思うのです。

例えば、私は小さい頃宝箱を持っていて、そこに包装紙やリボンの切れ端など、その当時の私が「とびきりの宝物！」と思ったものをたくさんしまっていました。それを中学生くらいになってから、「これ、何だったかしら」と思って開けたら、ごみみたくに見えたのです。小さい頃、あんなに宝物みたいに思っていたはずなのに。そのとき私は、「ああ、私は大人になっちゃったんだな」と思いました。

また、大学院生の頃、私は幼年童話を研究していたのですが、ある時先輩が『いやいやえん』を持ってきて、「ねえ佐々木さん、この『いやいやえん』って、一体どこが面白いの？」と尋ねられました。「私大人になってから『いやいやえん』を読んだから、面白さが全然分からないの」と言うのです。

確かに、幼年童話には、出合うべき時期があるのだと思います。また、時間がなく、忙しい中で読んでも、楽しさが感じられないときがあります。幼年童話には大人の時間とは違った時間の流れがあるように思います。だからこそ、幼年童話を考える上で、幼い子どもの心の在り様や世界の見方、感じ方、物語の捉え方を知っておく必要があります。私は、幼い子どもがどのように物語を読んでいるのかという読者論に関心を持ってきました。その中でも、子どもの読みと大人の読みが大きく違う作品についてお話ししたいと思います。

①子どもの読みと大人の読み

例えば、『そらいろのたね』²¹と『おおかみと七ひきのこやぎ』²²です。

まず、『そらいろのたね』です。ゆうじくんときつねが、ゆうじくんが持っていた飛行機ときつねが持っていたそらいろのたねを交換する物語です。親子一緒のおはなし会で、これを読み聞かせしました。そうしたら読後に、お母さんが子どもにこう言っていたのです。「ね、だから、独り占めはだめなのよ」って。私はそういうふうには読んだことがなかったので、はっとしました。そこで、幼児教育や保育を学ぶ学生を対象に、『そらいろのたね』の読みを調査

20 大阪国際児童文学振興財団 編『ひとりでよめたよ!幼年文学おすすめブックガイド 200』評論社, 2019.

21 なかがわりえこ文, おおむらゆりこ 絵『そらいろのたね 改訂版』(<こどものとも>傑作選; 25) 福音館書店, 1979.

22 グリム 著, フェリクス・ホフマン 絵, せたていじ 訳『おおかみと七ひきのこやぎ: グリム童話』(世界傑作絵本シリーズ) 福音館書店, 1967.

してみました。すると、8、9割の学生が、これを教訓的な物語として読んでいたことが分かりました。「欲張ってはいけない」「独り占めはだめだ」「みんなで仲良くしなくてははいけない」ということを伝えるいい本だ」といった回答が集まったのです。一方で、小さい頃はどんなふう読んでいたかと聞いたところ、「家が生えると思って種をまいた」というのです。

この結果がとても面白かったので、幼児にも調査しました。このお話の後半、そらいろのたねから生えてきたおうちを見て、きつねは、これは僕の種から生えた僕の家だからといって皆を追い出します。これに対して子どもたちは、頭の中では良くないことだと分かっているのですが、とてもきつねに同情的なのです。「あのね、きつねは、大きいものが好きだったんだよ」「豪華なものが好きだったの」「まさか種からあんなに大きなおうちができると思わなかったんだよ。だから、『あっ、返して！』みたいなかんじで」と、きつねに心を寄せているのです。「ああ、この子たち、みんなきつねなんだ」と思いました。

また、飛行機に心を寄せて読む子どもたちもいました。ある4歳の男の子たちは、初めに宝物の飛行機と種を交換したところで、「種だよ?!」と批判の声を上げました。宝物の飛行機を、種なんかと交換しちゃいけないよというふうには。そして、どうやらその子たちは、最後までずっと飛行機が気になっていたようなのです。最後の場面で「びっくりぎょうてんして めをまわした きつねが のびていました」というところで、「飛行機は?!」と、再び声が上がったのです。結局飛行機は最初に出たきり、最後まで出てこないのですが、その子たちは物語の中において、飛行機がどうなるのかをずっと見守っていたんだなあと思えました。

もう一つ『おおかみと七ひきのこやぎ』、これも有名な絵本です。以前、保育者から「実はこれを幼稚園で読んだら、保護者から『こんな残酷なもの読まないでください!』とクレームが来たんです」と言われたことがあります。どこが残酷だと思われたのかを聞いたら、「おおかみ しんだ おおかみ しんだ」と子やぎたちが言うところだと。お腹を切り開かれ、石を詰められ、井戸に落とされて死ぬなんて、かわいそうすぎるということだそうです。皆さんはこのお話をどう読まれますか。やはり残酷だと思われるでしょうか。

ある実習生が、子どもと保護者と私たち教員の前で、『おおかみと七ひきのこやぎ』をパネルシアターで演じたときのことで、この実習生も、やはり残酷だと思っただけでなく、最後の場面で「ねえ、みんな」と子どもたちに呼びかけました。そして、事もあろうに、「おおかみさん、ごめんねって言ってるよ。許してあげようか」と言ったのです。おそらくその実習生は、子どもたちから「いいよー」と言ってもらい、「めでたしめでたし、みんな仲良くなりました」と終わらせたかったのでしょう。しかし実際には、問いかけた途端、子どもたちは「だめー!!」と全否定。実習生は困ります。まさかそんな返事が返ってくるとは。しかも、保護者も先生も見ている中で。それで再度「でもね、おおかみさん、すごく反省しているみたい。許してあげようか」と問いかけます。けれど、「だめー!またやる!!」と子どもたち。それを聞いて、子どもの方が真実を見ているような気がしました。実習生は更に困って、「え、でも、でも…」と言葉に詰まってしまいました。すると子どもたち、「お姉さん先生、困ってるみたい」と思っただけでなく、子どもというものは優しく、特に女の子は察しがいいですから。一人の女の子が、「えー。いいよー、許してあげても」と、すっかり上から目線で言いました。すると隣の子も、「えー。じゃあ私も許してあげるー」。そうすると別の男の子も、「いいよ許してあげるよ」。それで「ああよかった、みんな仲良くなりました」と終わらせたのです。

大人になると、経験や知識が豊富になる分、おおかみにも感情移入してしまいがちです。しかし子どもがどう読んでいるかと考えると、多分末の子やぎに同化しているのだと思うのです。おおかみにお兄さんたちを食べられてしまった、一番小さな子やぎにです。子どもは小さくて

弱くて無力で、でもその子どもが知恵と勇気を出し、そしてみんなと協力し合うことで、自分よりもっと大きなものを乗り越えていく。そう考えたら、「許してあげようか」なんて、あまり安易には言えないかなと思うのです。

守屋慶子氏が『子どもとファンタジー』²³という本の中で、シェル・シルヴァスタインの「おおきな木」を用いて日本、イギリス、スウェーデン、韓国の4か国の子どもから大人までを対象に調査しています。この作品の感想文を書いてもらってそれを分析しているのです。そこでは幼児から小学校低学年の子どもと、小学校3、4年の子ども、高学年以降の子どもでは、同じ物語でも読み方が異なることを明らかにしています。守屋さんは、大人が物語の世界を「眺める」のに対して、幼い子どもは物語の世界に「住む」のだと述べています。確かに、小学校低学年までの幼い子どもたちは、現実と非現実を自在に行ったり来たりすることができます。現実と非現実が混然となっている世界でお話を楽しむことができるのであればいいのでしょうか。けれども、小学校3、4年生くらいになると、非現実の世界に疑いを持ち始めます。例えば、幼児と小学生が一緒の場で『ぐりとぐら』を読み聞かせていると、3、4年生くらいの子どもの「ねずみがしゃべるわけじゃないじゃん」と言い出すことがあります。「そんなの信じてるなんて子どもだな」という調子で。それは、経験も知識も豊富になってきた成長の証でもあるのですが、今までのように、物語の世界にどっぷりと浸ってその中に「住む」という読み方から変化してきています。「その話、本当じゃないよね」と、少し距離をおいてみるようになるのです。サンタクロースを信じるかどうかの境界線も、実は小学校3、4年くらいだといわれています。逆説的ですが、この時期から現実と非現実が分離し、ファンタジーの世界が形成されるのだと守屋さんは論じています。幼年童話の中心読者である幼い子どもたちがいかに幸せな読書をしているのか、ともいえるでしょう。

②自己中心性とアニミズム

幼い子どもの読みと併せて、幼い子どもの思考の特徴についても見ていきたいと思います。まず、自己中心性からくるアニミズム的思考というのが挙げられます。アニミズム的思考とは、生物・無生物問わず全てのものに命があると考えことです。例えば、「水はどこで眠るの?」と聞かれたらどう答えますか。これはある子どもの言葉ですが、その子はこう自問自答しています。「水はどこで眠るの? わかった、水道の中で眠るんだね」。あるいは、これはまた別の8歳の女の子の言葉です。「風船ってどこに行っちゃうんだろう、お空が食べちゃうのかなあ。何色がおいしいんだろう」。風船を持った手を放してしまうと、そのまま空に上がって見えなくなりますよね。それをこのように言っています。これらはまさにアニミズム的思考です。自分が眠ったり、遊んだり、ご飯を食べたりするように、お水も眠るんだ、お空もご飯を食べるんだと考えます。確かに幼年童話を見ると、アニミズムの世界が広がっています。動物や草花がお話しするだけではなくて、本当にありとあらゆるものが物語の主人公になって活躍することができる世界です。

もう一つ特徴的なのが、直感的思考です。幼い子どもにとって、見かけの真実がそのまま真実だということです。保存の概念が成立していないともいいます。例えば、現代の幼年童話の幕開け期にも大きな影響を与えた作品である『ちびくろさんぼ』²⁴。この中で、トラが木の周りをぐるぐるぐるぐる回っているうちに、溶けてバターになりますね。そのバターをサンボが

23 守屋慶子著『子どもとファンタジー：絵本による子どもの「自己」の発見』新曜社、1994。

24 へれん・ばんなーまん文、ふらんく・どびあす、岡部冬彦絵『ちびくろさんぼ』（岩波のこどもの本 幼・1・2年向；1）岩波書店、1953。

持ち帰って、パンケーキを焼いてもらって食べるという結末です。子ども時代の私にとっては、この場面が最も魅力的でした。黄色いトラがぐるぐる回っているうちに黄色いバターになる。まさに見かけの真実がそのまま真実です。ただ、大人になってからだと、なかなかこの面白さが理解できないようです。実は大正期の芸術的児童雑誌『赤い鳥』²⁵を創刊した鈴木三重吉(1882-1936)は、その『赤い鳥』の中で「虎」²⁶というタイトルでこの物語を紹介しています。しかし残念ながら、トラが溶けてバターになる部分がきれいにカットされているのです。谷本誠剛(1939-2005)は、「予想外とも思えるアイデアは、子どもの心のありようそのものに根拠をもつことで生まれるものが多いようである」²⁷と述べています。まさにこのトラが溶けてバターになるという、大人からしたら「そんなばかな」と思うかもしれない展開は、幼年童話を考える上で、子どもの心の在り様を示す重要な点であろうと思います。

③魔術的思考

もう一つ、幼い子どもの思考として見られるのが、魔術的思考です。合理的ではない、願望を成就させる魔術的思考を、幼い子はよくします。アメリカの幼稚園での保育実践を記した『ウォーリーの物語』²⁸から、ある5歳の子のエピソードを紹介します。この子は、赤ちゃんが生まれる仕組みを親からしっかり教わっています。にもかかわらず、友達と赤ちゃんについて話している中で「スイカの種を食べると、女の子が生まれるんだよ」と言うのです。「うちのおかあさん、スイカ好きじゃないのよね」と言われると、「じゃあメロンの種でもいいんだよ」と応えます。ちゃんと教わったはずの科学的知識が、魔術的思考にたやすく取って代わられています。幼い子どもにとって、どれだけこの魔術的思考がなじみ深いかがよく分かるエピソードです。

アン・ウィルソン(Anne Wilson)という人は、子どもの物語を第1期から第3期に分けて、次のように考えています。第1期が昔話のような魔術的思考、つまり現実も非現実も陸で続いているような魔術的ファンタジーの時期です。やがてもう少しすると第2期、つまり『ナルニア国ものがたり』のように、クローゼットを通して抜けた先が全くの別世界というような、論理的手続きをとったファンタジーへ移行します。そして第3期として、現実的リアリズムの物語へと遷移します。実際にはここまできれいに移行はしませんが、大きな流れとしてはうなずける部分はあるだろうと思います。では、幼年童話はいつ頃、どのように誕生し、今日までどのような変遷をたどってきたのでしょうか。

4. 幼年童話の変遷

最初にお見せした『児童文学事典』²⁹の定義では、幼年童話の誕生を昭和の初期としていました。しかし実際に調べていくと、明治期にはすでに幼児を対象とした作品は書かれているというのは、先にお話ししたとおりです。これについて、「聞く文学としての幼年童話」と「読む文学としての幼年童話」の両面から見ていきたいと思います。

25 『赤い鳥』は鈴木三重吉が主幹となり、赤い鳥社から1918年に創刊され、1936年に廃刊となった。

26 村山吉雄(鈴木三重吉)「虎」『赤い鳥』13巻2号、1924.8、pp.40-43.

27 谷本誠剛著『児童文学とは何か：物語の成立と展開』中教出版、1990、p.47.

28 ヴィヴィアン・ベイリー著、卜部千恵子訳『ウォーリーの物語：幼稚園の会話』(ベイリーの本=幼児教育記録集；1)世織書房、1994.

29 前掲注1

①幼年童話の成り立ち

(1)「聞く文学」としての幼年童話

まずは「聞く文学としての幼年童話」です。1888（明治21）年に、巖本善治が主宰する女性啓蒙雑誌『女学雑誌』³⁰の中に「子供のはなし」欄が設けられます。「子供のはなし」は、お母さんが子どもに語るお話を提供しますという欄です。「趣旨」の中では、日本には西洋に見られるような子どもの読み物や子ども向け雑誌がないことを残念だとし、母親が子どもに語って聞かせるお話の提供をしていきたい、と述べられています³¹。つまりこれは、幼児のために意図的に物語を提供しようとした我が国最初の試みであり、「聞く文学」としての幼年童話の誕生とあってよいかと思います。日本の創作児童文学の幕開けを飾ったと言われる巖谷小波（1870-1933）の『こがね丸』は1891（明治24）年に書かれました。ですので、それよりも3年ほど早い時期のことです。

しかし、幼児教育の現場に目を向けると、もっと早くから「聞く文学」としての幼年童話は存在しています。1876（明治9）年、日本で最初の幼稚園とされる、東京女子師範学校附属幼稚園（現在のお茶の水女子大学附属幼稚園）が設立されました。開設当初のカリキュラムを見ると、保育項目の中に、「説話」という名称で、「おはなし」が存在しています。現在のように、絵本や子どものおはなし集もなかった時代です。先生たちは、外国の幼児教育の手引書を頼りに、グリムやイソップのお話を子どもたちに語っていました。そして明治30年代以降になると、幼児教育の立場からも、子どもに聞かせるお話の提供が始まります。『幼児教育談話材料』『幼児の楽しむお話』『幼児に聞かせるお話』といった、幼児に語るためのおはなし集が、フレーベル会や日本幼稚園協会の編集で、数多く出版されるようになります。

(2)「読む文学」としての幼年童話

それでは、「読む文学としての幼年童話」についても見ていきたいと思います。1895（明治28）年、明治期を代表する児童雑誌『少年世界』³²の1巻13号に、「幼年」欄が設けられ、幼児のための遊びの紹介やお話が掲載されるようになります。「幼年」欄に掲載された第一作が、巖谷小波の「三すくみ」³³という作品です。カエルとヘビとナメクジが、ア리가みつけた砂糖とまんじゅうを横取りしようとするお話です。藤本芳則氏は、この「幼年」欄に最初に掲載された作品を、「内容からみても幼年童話のはしりとみられようか」と述べています³⁴。ここで、幼年童話をどう定義するかという難しい問題が出てきます。この「三すくみ」の前にも、小波は「三角と四角」³⁵という作品を書いています。これも、言葉は古いですがとても面白い作品です。三角は、自分より角の多い四角をうらやみ、はさみをそそのかして、夜中にこっそり四角の角を切り落とさせます。すると翌朝、なんと四角が八角になっていて驚いた、という作品です。もちろん、子どもたちは親きょうだいに読んでもらって受容することも多かったらうと思われませんが、「幼年」欄という欄の誕生自体が、幼い子どもを読者対象として意識した「読む文学」としての幼年童話の始まりだと考えることができます。

ただ、小波の作品は「めでたしめでたし」で終わる説話体で書かれていました。彼は自分の作品を「お伽話」と呼んでいますが、この説話体は「聞く文学」と親和性が高いのです。実際

30 『女学雑誌』女学雑誌社、1885-1904。

31 孩堤の翁「第一。子供のはなし」『女学雑誌』第95号、1888、p.104。なお、「孩堤の翁」は『女学雑誌』主宰者である巖本善治の筆名である。

32 『少年世界』博文館、1895-1933。

33 漣山人（巖谷小波）「三すくみ」『少年世界』1巻13号、1895.7、pp.1245-1250。

34 藤本芳則 著『幼年童話論ノート』金壽堂出版、2003、p.18。

35 漣山人（巖谷小波）「三角と四角」『幼年雑誌』4巻20号、1894.10、pp.1382-1386。

に、小波は自身の作品を全国の幼稚園や小学校を回って語り聞かせ、口演童話の発展にも大きな役割を果たしています。小波は「お伽のおじちゃん」と呼ばれ、子どもたちに親しまれました。

大正期に入ると、大正デモクラシーや民主主義、自由主義的運動といった時代思潮によって、小波の創作した「お伽話」とは異なる作品が誕生していきます。説話体の単なるお話ではなく、内面描写や情感あふれる「童話」といわれる作品です。1918（大正7）年、芸術的児童雑誌といわれる『赤い鳥』が創刊されます。これ以降、同様の児童雑誌が数多く出版されます。御覧いただいているのは『赤い鳥』の標榜言（モットー）ですが、この中で鈴木三重吉は、明治期の作品を「下劣極まりない」と辛辣に批判しています。三重吉は、文壇作家に要請し、芸術的な童話・童謡運動を展開します。この創刊号には、芥川龍之介（1892-1927）の「蜘蛛の糸」も掲載されています。この時期には浜田広介（1893-1973）や小川未明（1882-1961）らに代表される詩的で叙情的で美しい作品も、数多く書かれます。

②聞くことと読むことの分裂

こうして童話が芸術的・文芸的に認められるようになっていくことを歓迎しつつも、幼児の世界からは程遠いものになっていく傾向にあると、危惧した人がいます。日本の幼児教育の父といわれた、倉橋惣三（1882-1955）です。もちろん倉橋は、幼児の読むものだから文芸的価値が低いものでいいといっているわけではありません。幼児らしく楽しむことができる童話をもっと欲しい、幼児が楽しめないお話は失格であると述べているのです。童話が芸術的な発展を遂げる中で、幼い子どものための文学は主に保育現場を中心とした「聞く文学」と、文学界を中心とした「読む文学」という二つの流れに分かれて、それぞれ展開していくこととなります。

講義の最初に紹介した幼年童話の定義で、「幼児に聞かせる話を幼児童話という」という言葉が出てきたのも、ここに端を発するものと思います。

③現代幼年文学の幕開け～幼児観の転換

現代の幼年童話の幕開けは、1950年代、大正期の童話を否定する動きから始まります。それが作品として結実し始めるのが、1950年代の終わり頃からです。具体的には、資料リストにも挙げた、いぬいとみこ（1924-2002）『ながいながいペンギンの話』³⁶、寺村輝夫（1928-2006）『ぼくは王さま』、中川李枝子『いやいやえん』、神沢利子『くまの子ウーフ』、松谷みよ子（1926-2015）『ちいさいモモちゃん』などです。『ながいながいペンギンの話』は、今では小学校高学年向きとも思われるような長い作品です。当時、幼年童話といえば原稿用紙2、3枚の短い作品がほとんどでしたから、この作品の誕生は、それまでの常識を打ち破った長編の幼年童話の誕生でもあったのです。

この現代幼年童話の誕生期、幼年童話の理想的なかたちとされたのが、昔話や、岩波の子どもの本の一冊として出された『ちびくろさんぼ』でした。特に石井桃子（1907-2008）、瀬田貞二、松居直、渡辺茂男（1928-2006）、いぬいとみこらによって1960年に書かれた『子どもと文学』³⁷では、大正期の詩的で象徴的な童話を否定しています。その上で、物語の筋が明確で、始まりがあり、山場があり、きちんとした結論のあるものが、幼い子どもの文学としてふさわしいと主張します。この「子どもの文学はおもしろく、はっきりわかりやすく」という大変明

36 いぬいとみこ 著、横田昭次 絵『ながいながいペンギンの話』（ペンギンどうわぶんこ）宝文館、1957.

37 石井桃子 等著『子どもと文学』（中央公論文庫）中央公論社、1960.

快な主張は、それゆえに後年批判も多く受けます。しかし、著者らが念頭に置いていたのは、あくまでも幼い子どもの文学ということであったのではないかと思います。実は、先ほどお話しした倉橋惣三も、1927（昭和2）年の段階で、幼児にふさわしいお話について述べています。明るく、筋が単純で、聞いていて心地よいこと、意味を主にしすぎないこと、感情が濃厚なものは避けたいと主張しているのです³⁸。『子どもと文学』の主張と比較すると、共通点がいくつもあることが分かります。

さて、この時期、これまで分裂していた幼年童話の「聞く」要素と「読む」要素が再び一つになり、文学作品として結実したのではないかと私は考えています。『子どもと文学』の著者らが幼い子の文学として理想的であるとした昔話は、本来「聞く文学」として発展してきたものです。耳で聞く文学であるからこそ、細かな描写をせず、物語の筋が脇道にそれることもなく、一本のモノレールのようにずっと進んでいきます。それが幼い子どもに分かりやすいということだったのでしょう。また、著者の一人である松居直は、福音館の編集者として活躍した人で、1953年には保護者向けの雑誌『母の友』を創刊しています。創刊にあたり、「こどもに聞かせる一日一話」を雑誌の主体にしています。つまり親しい大人が子どもに語り聞かせるお話の提供を中心に据えた雑誌を作っているのです。先ほど見た明治期の『女学雑誌』と同じですね。しかもこの雑誌は、新人作家だけでなく幼稚園の先生や母親から幼児に向けた作品を募集し、その中から優れた作品を掲載しています。ここからたくさんの幼年童話が生まれています。例えば寺村輝夫の「おしゃべりなたまごやき」や、中川李枝子の「かえるのエルタ」や「ももいろのきりん」などに加え、一母親として投稿していた神沢利子や、当時幼稚園の先生だった村山桂子らの作品も載っているのです。創作絵本において福音館の『こどものとも』³⁹が果たした役割は大きいといわれますが、幼年童話においては『母の友』が果たした役割が大きいのだらうと思われまます。

さらにこの時期には、観念としての子どもではなく、実際の子どもを理解し近づこう、そこから作品を創作していこうという姿勢が見られます。石井桃子も、いぬいとみこも、寺村輝夫も、それぞれ自身で文庫活動を行い、そこでの子どもたちの反応を創作や作品評価に生かしています。また、古田足日（1927-2014）は保育園に何度も何度も足を運び、『おいしいのぼうけん』⁴⁰や『ロボット・カミイ』といった作品を作りました。

こうした子ども理解や、子どもの方へと向かった作品群は、子どもをどう描くか、子どもをどのようなものとして捉えるのかという「子ども観」にも変化をもたらします。大正期の作品に見られる天使のような純真無垢な子どもから、エネルギーに満ちた生き生きとしたやんちゃな子どもが描かれるようになったのもこの時期の特徴です。例えば『ほくは王さま』の王さまは卵焼きが大好きで、勉強も注射も嫌い、遊ぶのが大好きで、時々うそもつきます。作品の扉にこんなふうにかかれてあります。「どこの おうちにも こんな ^{おう}王さま ひとり いるんですって」。つまり、王さまは子どもの象徴なのです。ちなみに、1960年代、「巨人、大鵬、卵焼き」が子どもの好きなものの代名詞といわれていました。作品には、時代が反映されていますね。

寺村は、童話作家は子どもを教え導く存在ではなく、子どもの共犯者でありたいと述べています⁴¹。まさにこの時代は、作家が子どもと共に同じ目線に立つという関係性が築かれた時代

38 日本幼稚園協会 編『幼児の楽しむお話』内田老鶴圃, 1927, pp.[1]-[6].

39 『こどものとも』福音館書店, 1956-

40 ふるたたるひさく, たばたせいいちえ『おいしいのぼうけん』（絵本・ほくたちこどもだ; 1）童心社, 1974.

41 例えば、神宮輝夫 著『現代児童文学作家対談2（小沢正・寺村輝夫・山下明生）』偕成社, 1988.

だと思います。

④商品の時代・幼年童話低迷言説

さて、こうして現代幼年童話が成立して、幼年童話は可能性を広げていきます。しかし、1970年代には新たな局面を迎えます。古田足日は、幼年童話は1968年を機に「商品の時代」に入ったという言い方をしています⁴²。この1968年、何があったかという、あかね書房やポプラ社から創作幼年童話のシリーズが一斉に出版されはじめ、幼年童話の出版点数が急激に増えたのです。これには、課題図書が1970年代頃から売れ出したという背景もあります。1968年に青少年読書感想文全国コンクールの課題図書に選ばれた『こびとのピコ』⁴³は、20万部を突破したといいます。こうした状況の中、各児童書出版社が課題図書に目を向けたのも自然な流れだったと思います。この当時、幼年童話は「ドル箱」といわれ、出せば売れるという状況でした。そのため、粗製乱造的な状況を危惧する声が聞かれるようになり、『日本児童文学』誌上でも、「幼年文学を問い直す」(1976.2)⁴⁴、「幼年童話の危機」(1980.11)⁴⁵といった特集が度々組まれました。そこでは、幼年童話のパターン化やモチーフの喪失が指摘され、子どもの好きな魔女やおばけ、食べ物を登場させれば一冊の作品になってしまうという状況が批判的に論じられました。

またその一方で、この時期に現在の幼年童話の形状が作られたともいえます。例えば、あかね書房の幼年童話シリーズの第一作、寺村輝夫の『どうぶつえんができた』⁴⁶は、32級という大きな文字を使い、分ち書きにしています。これは現在の幼年童話では見慣れたものだと思いますが、当時あかね書房の編集部長だった寺村さんが発案したものです。こちらに示したのは、寺村さんが当時を振り返っている文章ですが、会社の反対を押し切って実行したと述べています。

その馬鹿でかい活字を使って、短編を一冊の読みごたえのあるかのように見せかける本を、会社の反対を押し切って出した。それはなぜかという、問題作もいい、革命的な作品もいい、けれども子どもに読まれなくちゃいけないんじゃないかと。当時からいられていた子どもの活字アレルギーを克服すべく始めたわけよね。⁴⁷

当時、このシリーズを持って作家に原稿依頼に行ったところ、「こんなの本じゃない」「たかが原稿用紙15枚か20枚で本を一冊作るなんて詐欺だ」と言われたというエピソードも残っています。ですが、1970年代終わりには、多くの出版社がこのかたちで出版するようになりました。しかし、大人に読んでもらって物語を受容するのであれば、文字の大きさは全く関係ないはずで、文字が小さくても、読み手である大人は読むことができるからです。つまり、「初めて一人で読む」という、幼年童話のもう一つの要素が、こうした文字の大きな幼年童話を誕生させたといえるのです。

さて、資料リストを見ていただくと、1980年代の作品が載っていないと思われるかもしれ

42 古田足日 著『現代日本児童文学への視点』理論社、1981.や、座談会「幼年童話を考える」(『日本児童文学』26巻15号、1980.12.)等で発言。

43 寺村輝夫 著『こびとのピコ』(子ども図書館)大日本図書、1968.

44 『日本児童文学』22巻2号、1976.2、pp.10-61.

45 『日本児童文学』26巻14号、1980.11、pp.11-64.

46 寺村輝夫 作、和歌山静子 絵『どうぶつえんができた』(日本の創作幼年童話;1)あかね書房、1968.

47 寺村輝夫、山下明生「対談 新しい流れへの基盤づくり—幼年童話の定着から」『飛ぶ教室』20号、1986、p.124.

ません。1980年代は、エンターテインメント的要素の強い作品がシリーズ物として数多く出版された時期です。例えば、食べ物が登場するシリーズです。食べ物が描かれた作品はヒットするというジンクスがありましたが、寺村輝夫の「こまったさん」「わかったさん」シリーズ、角野栄子の「小さなおばけ」シリーズ、そして山脇恭の「大どろぼう」シリーズも、子どもが好きな食べ物がたくさん登場します。子どもの好きなおばけ、魔女、泥棒、食べ物というのをテーマに、たくさん幼年童話が出版されました。ただ、この時期の幼年童話はあまり文学的評価はされていません。1980年代の幼年童話の状況は、「混迷期あるいは沈滞期」という言葉で表現されました。実際に、この時期に書かれた幼年童話の多くは姿を消していきました。

しかし、それでも読み継がれている作品は存在します。例えばおばけのアッチが活躍する「小さなおばけ」シリーズは、作者の主張や思想がないと批判されましたが、2019年現在続編が出版されています。今なお年二冊の刊行を続けている「かいけつゾロリ」シリーズも、2018年に60巻で休止宣言をした「いたずらまじよ子」シリーズも、この頃に始まりました。つまり、「混迷期あるいは沈滞期」と評された時期に始まり、以来30年以上読み継がれてきた作品がたくさんあるのです。文学的には評価をされなくても、若い子どもたちに支持され続けてきたことは間違いありません。ただ、なぜここまで長期にわたって読み継がれたのか、読み継がれた作品とそうでない作品は何がどのように違うのか。それらの問いに答えられるような幼年童話の詳細な研究も、批評の言葉も、未だ持たずにいるのが実情です。これは、子どもの近くにいらっしゃる皆さんにも、ぜひお力をお借りして解明していきたいことです。

5. 幼い子どもの心に寄り添う

ここからは、幼い子の文学とは何なのかということについて、作品から具体的に考えていきたいと思います。

私は、幼年童話にとって、幼い子どもたちが、作品世界の中で心も体も解放されて、のびのびと生きられることや、作品の中で楽しく遊ぶことができるということは、とても大切な要素だと思います。何と云っても、幼い子どもたちにとって、遊ぶことは生活することですし、学ぶこと、生きることそのものですから。

①遊びの世界～作品世界で遊ぶ

遊びの世界を描いた作品をいくつか見てみたいと思います。『いやいやえん』や『ロボット・カミイ』は、保育園や幼稚園での物語ですので、保育園や幼稚園で日常的に見られるような、子どもの遊びの世界が描かれています。

『いやいやえん』の中に、積み木で作った船で海にくじらを釣りに行く「くじらとり」というお話があります。積み木遊び自体、幼児にとってはなじみのある遊びです。積み木で船を作って、最初に船の名前を決めます。きゃぷてんが「これから、ふねのなまえをきめます。」と言った途端、「ぞう！」「らいおん！」と二人が同時に怒鳴るのです。「ぞうは、どうぶつなかの中で、いちばんおお大きくて、ちからもちだから。」「ちがうよ。らいおんだよ。らいおんは、けものなかの中の、おうさまだもの。」と言いつつ合っていると、4歳でまだ仲間に入れてもらえないしげるが「らいおんだい。らいおんだい。」と船の外からどなります。もうこの辺りから、しげると同じように、この話し合いに参加したくありませんか？ 積み木で作った船で海に乗り出し、嵐に遭ったりしながらも、無事に保育園にくじらを連れて帰ってくるのですが、積み木の船が航海するなんて、まさに魔術的ファンタジーです。子どもたちの、こうなったらいいな、こうなったらどんなに楽しいだろうという思いが、作品の中でそのまま実現されています。しかも、ただ子

どもの遊びをそのままスケッチしたのではなく、言葉の力でどんどん、読者をしげるたちのいる世界に連れていきます。読者は一緒にくじらつりの大冒険をして帰ってくるができるのです。文学として核となるような思想がないという批判は確かに分かりますが、幼い子にとって一番大切な遊びをこんなふう生き生きと描いて、作品世界の中で共に遊ぶことができるというのは、幼い子の文学にとって大切な要素、評価されるべき要素だと思います。

『ロボット・カミイ』のカミイは、たけしとようこが紙の箱でつくったロボットだから、カミイという名前です。「きみはロボット・カミイなのよ。わかったら、へんじしろ」とようこに言われて、カミイは本当に返事をして動き出します。これも魔術的ファンタジーですね。「いいい、だ。ほくは、ひとにほくのなまえをおしえてもらうほど、ばかじゃないよ」といばって走り出した挙げ句に、小さな女の子が持っていたちびゾウを取り上げてしまいます。典型的ないたずらっ子ですね。でも、いたずらっ子といわれる子にも、悪い子といわれる子にも、ちゃんと理由があるのです。たけしとようこがちびゾウを取り返そうとすると、カミイは「ほくもちびゾウがほしいんだ」と逃げます。たけしにちびゾウを取り上げられると大泣きし、紙の体が涙で濡れて壊れていくんです。「ちびゾウをとってしまったら、あの子がかわいそうじゃないの」と言われても「ほくもかわいそうだよ。ちびゾウがないんだよ」と言い返します。その言葉にたけしもようこもはっとして、カミイの言うとおりで思うのです。人と人が理解しあうって、こういうことなのだと思います。それぞれ自分が正しいと思って行動しているけれど、相手の立場や気持ちに立って考えてみると、別の事実が見えてくるのがたくさんあります。いばりんぼうで泣き虫で、いたずらばかりするカミイに周りは振り回され、カミイも時に孤立します。しかしそうして人と一緒に生きることの難しさ、そして何よりも楽しさや素晴らしさを知って、カミイはロボットの世界に戻っていきます。カミイは、それをこんな言葉で表現しています。

ほくはロボット。ひとりじゃないよ。
ひとりだったら
みせやごっこもできないもん。
いいしなものもできないもん。⁴⁸

幼い子どもが、友達と一緒にいいよねと、実感をもって理解できる具体的な言葉だろうと思います。

②世界の豊かさ・あたたかさ

次に、たかどのほうこさんの『へんてこもりにいこうよ』⁴⁹を紹介します。この作品にも遊びの世界が描かれているのですが、言葉遊びがあちこちにあって、耳の時代の子どもたちにとって、とても楽しい作品です。

ヘンテ・コスタさんが作った「ヘンテ・コスタのもり」、通称「へんてこもり」。もう名前からしてヘンテコなことが起こりそうです。そこに遊びにやってきた「そらいろようちえん」の仲良し四人組が動物しりとりをするのですが、「ま」でつく動物が思い浮かばなかったブンタがでたらめに「まるほ！」と答えるんです。案の定、子どもたちは「そんなどうぶつ、いない

48 前掲注 5, pp.86-88.

49 たかどのほうこ作・絵『へんてこもりにいこうよ』偕成社, 1995.

ぞ！」と言うのですが、そこに「おいおい、きみたち！」と言って、なんと「まるぼ」が現れるんです。

「この おれさまが、はなや きに みえるかね。」
 ケケコが、それを きいて いました。
 「はなや きには、ぜんぜん みえないけど、ヤカンに みえるのよ。」
 すると まるぼは、まるいからだを おおげさに ゆすって、カカカカ……と
 うれしそうに わらうと、とくいげに いました。
 「ええ……、『ヤカンもく、マルヤカンか、マルボ』と、まあ これが、どうぶつがくしゃに
 よる、わたしの ぶんるいです。したがって、ヤカンに みえるのは ごもつとも。』⁵⁰

そうして、驚いたことに、まるぼだけでなく、それまで四人が言葉にした動物たちが一列になって現れ、「はやくー！」「はやくー！」としりどりの続きを催促するのです。「ぼ」ではじまる動物が思い浮かばなかったノンコが、困ってでたらめに「ぼさこう」と言うと、なんと「ぼさこう」が現れ、まるぼの尻尾をつかんで列に加わります。次のアキオは、「う」のつく動物はたくさん思い浮かんだのですが、どんな動物が来るのか見たくて、適当に「うるりんぞ！」と言います。すると、今度は「うるりんぞ」が現れます。そうやって四人はへんてこもりで楽しく遊んで帰るのですが、帰り際にまるぼがこう言うのです。「じゃあ きみたち、また こいよ。ここは たのしいところだぞお」。この言葉に、私はとても安心します。この世界はまだ見たこともない不思議なものや楽しいものがたくさんあるんだよ、楽しいところなんだよというメッセージだと、私は思います。大げさにいうと、幼い子を取り囲む世界の在り様を示しているように思うのです。「この世界はいいところだよ」と言うと、なんだか力が湧いてくるじゃないですか。

幼年童話は、生物・無生物を問わず、ありとあらゆるものが主人公になり得るアニミズムの世界ですが、村上しいこさんの「わがままおやすみ」シリーズも、私たちにとって身近なものが登場し、新たな視点を与えてくれます。その中から、『れいぞうこのなつやすみ』⁵¹を取り上げます。ある夏の日曜日のお昼、おとうちゃんがビールを飲もうと冷蔵庫を開けると、ビールが全く冷えていないんです。おかしいなと思って調べていると、冷蔵庫が「うひゃひゃひゃ」と笑い出すのです。夏休みをもらって、一回プールに行ってみたいと言う冷蔵庫に、みんなが唖然としていると、おとうちゃんが「ええやんけ、ええやんけ。わかった。ほないこ」と言って、プールに行くことになるのです。

いいですね。幼年童話って、本当におおらかで自由な世界だなと思います。幼い子どもが現実と非現実を自在に行ったり来たりするように、登場人物たちも当然のように不思議な状況を受け入れるんです。これは昔話も同じです。昔話研究者のマックス・リュティ (Max Lüthi, 1909-1991) は、昔話に現実と非現実の境がないことを、次元性といいましたが、まさに次元性です。

冷蔵庫は「プールで、およぐには、やっぱりみずぎが」と言い出し、おかあちゃんの水着を借りることになります。おかあちゃんは「わたしの 小さい みずぎが、あんたになんか、はいるわけない」と言うんですけど、ちょうどぴったりです。そうして一家と冷蔵庫は、プール

50 同上, pp.17-19.

51 村上しいこ さく、長谷川義史 え『れいぞうこのなつやすみ』(とっておきのどうわ) PHP 研究所, 2006.

を楽しむのですが、帰ってきた冷蔵庫は、日焼けが痛いのであと三日待つてほしいと言って、みんな仕方なく納得します。夏休みがよっぽど楽しかったのでしょうか。その晩、冷蔵庫が「なつやすみは、ええなあ。」「やっぱり なつは、プールや……」と寝言を言います。あと三日も我慢しないといけないのかとほやくおとうちゃんに、おかあちゃんは「なにを いうてんの。たったの ^{みっか}三日や。わたしが、がまんしたら すむことや。れいぞうこかて、なにか、たのしみが ほしいのや」と言うのです。とても温かな、優しい気持ちになる作品だと思います。こうしたアニミズム的な世界は、当たり前とと思っている現実的な日常世界を押し広げて、異なる世界の認識の仕方を示してくれます。

③幼い子の心理を描く

幼い子は、自分の思いや、その時の感情をうまく表現できないことがあります。けれども物語の中で同じ感情に出会って、「ああ、これは私の物語なんだ」と思える作品があります。例えば『くまの子ウーフ』では、ウーフは、自分は一体何で出来ているのか悩みます。

また、資料リストに挙げた『レッツとネコさん』⁵²も、幼い子の心理をよく描いています。私たち大人からすると、5歳の子どもも3歳の子どももあまり変わらないように思えます。しかし5歳のレッツは、3歳の子を見てこのように考えます。

はなくそを ^た食べる。
パンツを ^ぬがな^いで おしっこを ^する。
なく ^{こゑ}声^が うるさい。
わらう ^{こゑ}声^が うるさい。
おもちゃを、おともだちに ^なかなか ^かさない。
(中略)
ゆかで ^きゆうに ^ねて ^しまう。
すなばの ^たアリさんを ^く食べる ^こともある。
アリさんは ^ちっとも ^{おい}しくないのに。
大人^{おとな}ほどでは ^ないが、よく ^わか^らない ^{いき}ものだ。
レッツも、むかしむかし、お〜むかし、あんな ^こども^だったかと ^{おも}うと、ちよつと ^かな^しくなる。
^{いつ}五つで ^よかったと ^{おも}う。⁵³

確かに小さい頃って、そんなふうに使っていたかもしれません。幼児の感性や感覚、思考や内面の動きを描いているなどと思います。

このように、幼い子にももちろん、悩みや葛藤があります。まずは『おさるはおさる』⁵⁴を御紹介しましょう。これもよく知られた本かと思えます。主人公のおさるは、南の島で楽しく過ごしていたのですが、ある日、強情なカニに耳を挟まれてしまいます。それ以来、自分だけが皆と違う「かにみみざる」になったような気がして、どうしようかと思ひ悩みます。みんなが寝てる間に、カニにみんなの耳を挟ませようとするのですが、そのカニたちは全然強情ではなく、ろくに挟んでくれません。どうしようと思っていると、おさるのおじいちゃんがやって

52 ひこ・田中 さく、ヨシタケシンスケ『レッツとネコさん』（まいにちおはなし；3. レッツ・シリーズ；1）そうえん社、2010.

53 同上、pp.4-7.

54 いうひろし 作・絵『おさるはおさる』（どうわがいっぱい；25）講談社、1991.

きて、おじいちゃんの子どもの頃のお話をしてくれます。おじいちゃんも子どもの頃に、しっぽを強情なタコに吸われてしまい、「たこしっぽざる」になったような気がして困っていたのです。そこに、おじいちゃんのおじいちゃんがやって来て、やはり子どもの頃の話をしてくれたのでした。このように展開する物語です。子どもにとっては、かにみみざるや、たこしっぽざるの面白さが先に立つ作品かもしれません。もちろん、いろいろな読みがあるかと思いますが、それぞれの読みを大切にしてほしいと思います。私にとっては、「大丈夫だよ、かについてもたこがついても、君は君のままだよ」という温かい応援のメッセージに読めます。

森絵都さんの『にんきもののひけつ』⁵⁵は、「ぼくは このごろ きぶんが わるい。じんせいに いやげが さしてきた。」と始まります。なぜかという、バレンタインデーに、同じクラスのこまつくんは27個もチョコレートをもらったのに、ぼくがもらったのはたった1個、しかもコンビニの値札が付いているチョコだったからです。どうしてこまつくんは人気者なのか、「ぼく」はその秘訣を探ろうとします。「こまつくんが、かおが よくて、あたまが よくて、スポーツが できるだけで、みんなの にんきもの なんだったら、ぼくは もう、こんな ところには いたくないんだ」という「ぼく」の言葉、とてもよく分かります。そしてこまつくんが教えてくれた秘訣がこれです。何と、小指が、くねっと曲がるんです。ぼくは、その曲がり具合を、「まわりの けしきが、とつぜん あかるく なったくらいに」と表現するのです。

また、タブーの崩壊といわれて以降、児童文学には死も、性も暴力も、あらゆるテーマが描かれるようになりました。それは児童文学の進化だと思えますが、しかしながら、やはり、幼い子の文学には、希望や救いがあるしてほしいと思います。宮川ひろさんの『ずるやすみにかんぱい!』⁵⁶では、小学校2年の雄介が、ほんの些細なことから、クラスの友達にいじわるをされるようになります。そのことをお父さんに打ち明けると、お父さんは「あしたは、〈ずるやすみ〉をするといい。早いうちに、力をもらいにいこう」と言ってくれて、ずる休みをして、雄介と一緒に出かけます。親の存在がとても温かく、こういう親でありたいなと思います。子どもたちには、悩んだり苦しんだりしたときも、決して独りじゃないんだよと知ってほしいのです。

幼い子にも悩みはあります。それでも、幼い子どもの文学には、「大丈夫だよ、一緒にいるよ、乗り越えられない困難はないよ」という救いや希望があるほしいのです。それは、幼い子どもたちの文学の中で、最も大切なことではないかと思えます。

6. おわりに

さて最後に、現代の幼年童話の傾向をお話ししましょう。まず、よく読まれている作品は、視覚的な要素が多いという特徴があります。例えば「かいけつゾロリ」シリーズや「おしりたんてい」シリーズなどがそうです。コマ割りや吹き出しが、漫画のようだと思います。こうした作品は、もちろん、初めて一人で読む子どもたちへの配慮から発展してきたのでしょう。絵探しの要素もあり、見ているだけでも楽しい作品だと思います。幼年童話は絵本から児童文学への橋渡しとよく言われます。しかし、こうした作品は児童文学への橋渡しにはなりにくいようです。

私は、もっと言葉の力を信じたいと思います。

55 森絵都 文、武田美穂 絵『にんきもののひけつ』（にんきものの本；1）童心社、1998。

56 宮川ひろ 作、小泉のみ子 絵『ずるやすみにかんぱい!』童心社、2010。

今、幼児教育に関わっていて気になるのは、言葉がとても貧弱になっているということです。幼児教育や保育を学ぶ学生の言葉もそうですが、子どもたちの言葉が乱暴になっているのも気になります。3歳の子どもが、「死ね」「殺すぞ」と言ったりします。子どもは、聞いたことのない言葉は使いません。その子の周りには、そんな言葉が日常的にあるのです。そう考えたときに、その子の心がとても心配です。

言葉はコミュニケーションの道具であるだけでなく、ものを認識したり考えたりするときにも使います。私たちの心と言葉は密接につながっています。つまり、言葉が貧弱であったり、とげとげしかったりするのは、心の在り様とつながっているのです。言葉の危機は心の危機ともいえるのだと思うのです。

最初に申し上げたように、幼年童話は一番基本的で大切なことを、一番分かりやすく語る文学だと思います。斎藤惇夫さんが「自分の最も深いところが描けた時に、はじめて、子どもの本が誕生する可能性がある」⁵⁷と述べていますが、幼い子どものための文学は、その最も奥深い原初的なところから生まれてくるのではないかと思います。

大人のための絵本は創作されても、大人のための幼年童話はありません。長らく幼年童話は不振・不調といわれていますし、絵本があれば幼年童話はいらないのではないかといわれたこともありました。しかし、幼年童話が無くなってしまふときが来るとしたら、それは児童文学自体が「児童」という冠を外して、児童文学の独自性を放棄するときであろうと思います。幼い子どもに語るという行為は、子どもと真剣に向かい合い、子どもを尊重する社会でこそ可能な行為であるように思います。豊かな言葉で紡がれた幼年童話が、ふさわしい時期に子どもたちに手渡され、この世界に対する信頼や人間に対する愛情を確信させてくれる親しい友であるようにと願ってやみません。

57 斎藤惇夫著『現在、子どもたちが求めているもの：子どもの成長と物語』キッズメイト, 2001, p.90.

「幼年童話事始め」紹介資料リスト

出版事項欄の（ ）内の数字は、初版の出版年です。

(デジタル化) → 「国立国会図書館デジタルコレクション」(館内・図書館送信対象館内限定公開)

注：デジタル化図書については、原則として原本はご利用いただけません。なお、一部の図書については、別途所蔵している複本を御利用いただける場合があります。

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	子どもと文学	石井桃子 [ほか] 著	福音館書店, 1967 (中央公論社, 1960)	909-I583k-h (デジタル化)
2	幼い子の文学	瀬田貞二 著	中央公論社, 1980	KE177-28
3	子どもとファンタジー： 絵本による子どもの「自己」の発見	守屋慶子 著	新曜社, 1994	FA35-E223
4	ひとりでよめたよ!幼年 文学おすすめブックガイド200	大阪国際児童文学振興財団 編	評論社, 2019	UP49-M7
5	ちびくろさんぼ	ヘレン・バンナーマン 文, フランク・ドビアス 絵, 光吉夏弥 訳	瑞雲舎, 2005 (岩波書店, 1953)	Y9-N06-H231
6	ながいながいペンギンのはなし	いぬいとみこ 作, 山田三郎 画	理論社, 1995 (宝文館, 1957)	Y9-2069
7	ぼくは王さま	寺村輝夫 作, 和田誠 絵	理論社, 2000 (1961)	Y8-N00-78
8	いやいやえん	中川李枝子 著, 大村百合子 絵	福音館書店, 1962	児 913.8-N299i (デジタル化)
9	くまの子ウーフ	神沢利子 作, 井上洋介 絵	ポプラ社, 1969	Y7-1711
10	ロボット・カミイ	古田足日 著, ほりうちせいichi 絵	福音館書店, 1970	Y7-2039
11	もりのへなそうる	わたなべしげお さく, やまわきゆりこ え	福音館書店, 1971	Y7-2870
12	ちいさいモモちゃん	松谷みよ子 著, 菊池貞雄 絵	講談社, 1974	Y8-N00-172
13	スパゲッティがたべたい よう	角野栄子 さく, 佐々木洋子 え	ポプラ社, 1979	Y7-7232
14	おさるはおさる	いとうひろし 作・絵	講談社, 1991	Y18-6214
15	へんてこもりにいこうよ	たかどのほうこ 作・絵	偕成社, 1995	Y9-1557
16	にんきもののひけつ	森絵都 文, 武田美穂 絵	童心社, 1998	Y8-M99-300
17	れいぞうこのなつやすみ	村上しいこ さく, 長谷川義史 え	PHP研究所, 2006	Y8-N06-H658
18	レッツとネコさん	ひこ・田中 さく, ヨシタケシンスケ え	そうえん社, 2010	Y8-N10-J682
19	ずるやすみにかんばい!	宮川ひろ 作, 小泉のみ子 絵	童心社, 2010	Y8-N10-J405
20	エルマーのぼうけん	ルース・スタイルス・ガネット 作, ルース・クリスマン・ガネット 絵, わたなべしげお 訳, 子どもの本研究会 編	福音館書店, 2008 (1963)	Y9-N09-J231

レジュメ

国立国会図書館が提供するデータベース紹介 —子どもの本を探すには—

福田 由香

1. 書誌情報等から資料を探す

- ①国立国会図書館検索・申込オンラインサービス（国立国会図書館オンライン）
- ②国立国会図書館サーチ（NDLサーチ）
 - ◇児童書総合目録について
- ③国立国会図書館デジタルコレクション

2. 「調べ方」や「探し方」を探す

- ①リサーチ・ナビ
 - ◇調べ方案内について
 - ◇外国語に翻訳発行された日本の児童書情報について
- ②レファレンス協同データベース（レファ協）

3. 国際子ども図書館ホームページ

国立国会図書館が提供する
データベース紹介
—子どもの本を探すには—
福田 由香



国際子ども図書館資料情報課情報サービス係の福田と申します。普段は、児童書研究資料室でのサービスのほか、図書館間貸出しや文書レファレンス等も担当しています。

本日は、児童書を探すという観点から、当館のデータベースを御紹介します。

1. 書誌情報等から資料を探す

まずは書誌情報等から資料を探すということで、三つのデータベースを御紹介します。

①国立国会図書館検索・申込オンラインサービス（国立国会図書館オンライン）

一つ目は「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス」¹（以下「国立国会図書館オンライン」という）です。2018年1月に、それまで提供していた「国立国会図書館蔵書検索・申込システム」（NDL-OPAC）からリニューアルしたものです。国立国会図書館オンラインでは、国立国会図書館の所蔵資料のほか、デジタルコレクションや電子ジャーナルも検索対象となっています。一部の資料については、雑誌記事や目次データ、あらすじ情報も検索することができます。

当館の登録利用者のうち、機関としての登録利用者になると、国立国会図書館オンラインを通じて、遠隔複写とレファレンスを申し込むことができます。また、機関としての利用者登録に加えて図書館間貸出制度に加入していただくと、図書館間貸出しサービスの申込みも国立国会図書館オンライン経由で行えます。また、個人としての登録利用者であれば、国立国会図書館オンラインから遠隔複写サービスを申し込むことができます。

それでは、主に児童書を検索する際に使う項目について御紹介します。国立国会図書館オンライン検索画面（図1）を御覧ください。ロゴのすぐ下にあるのがキーワード検索欄です。キーワード検索では、一部の児童書のあらすじを検索することもできます。キーワード検索欄の右側にある「詳細検索」ボタンを押すと詳細検索画面が開きます。検索欄の下のタブを選択することで、資料種別を絞り込むこともできます。また、児童書に絞り込んで検索したい場合、「所蔵場所」を「国際子ども図書館」に設定すると、おおよそ児童書に限定して検索することができます。ただし、ヤングアダルト資料等、児童書との線引きが難しい資料は、東京本館所蔵の可能性がります。国際子ども図書館に絞り込むと見つからない場合には、所蔵場所を「指定なし」にしてください。なお、この画面の右上にログインボタンがあります。各種の申込みを行う際は、こちらからログインします。

1 国立国会図書館検索・申込オンラインサービス<<https://ndlonline.ndl.go.jp/>>

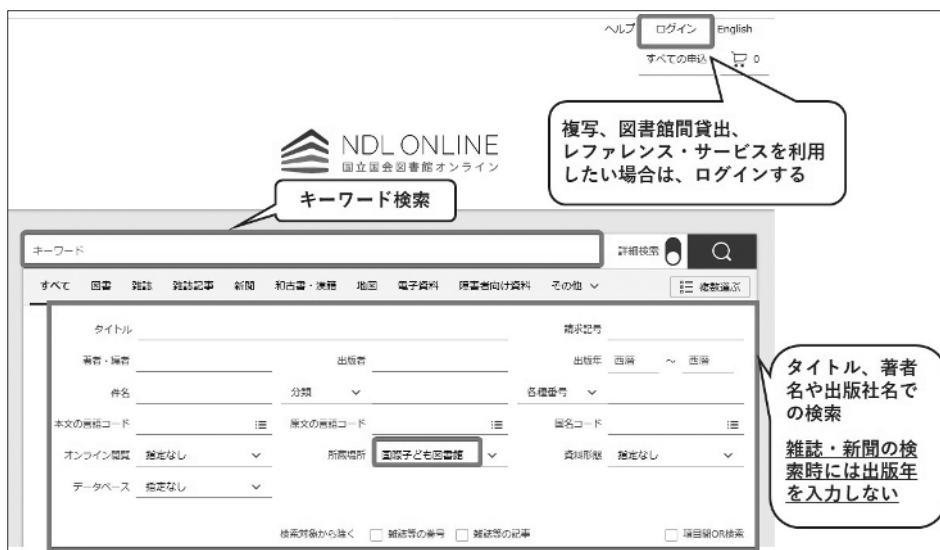


図1 国立国会図書館オンライン検索画面

こちらは、キーワードを「サンタクロース」として検索した場合の、検索結果一覧画面です(図2)。検索結果一覧には、キーワードが含まれるあらすじ情報の内容が一部表示されているものもあります。また、国立国会図書館オンラインには、ファセット検索の機能があります。検索結果一覧画面の左側には、「資料種別」「所蔵場所」「オンライン閲覧」等の項目が表示されており、ここから更に絞り込むことができます。なお、検索結果一覧画面で、オレンジの「デジタル」ボタンが表示されている資料があります。この「デジタル」ボタンを押すと、後述の国立国会図書館デジタルコレクションに遷移することができます。

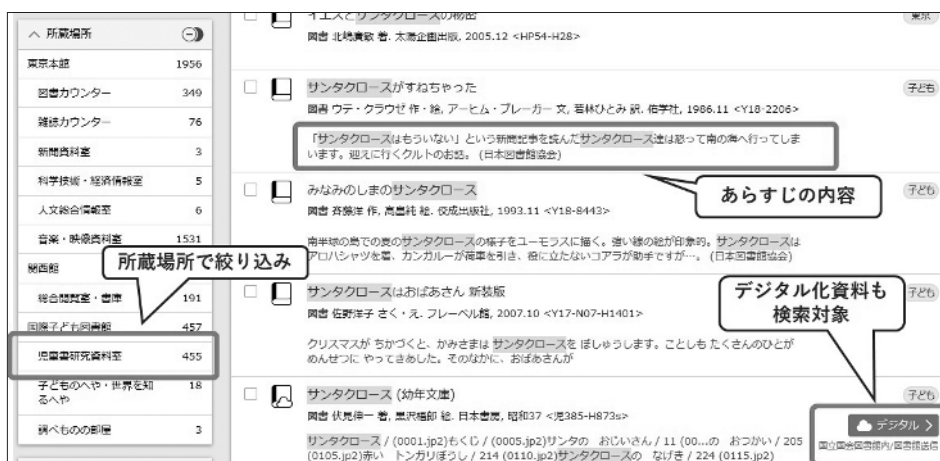


図2 キーワードを「サンタクロース」として検索した場合の検索結果一覧画面

検索結果一覧画面から、資料のタイトルをクリックすると、書誌詳細画面に進むことができます。あらすじは、書誌詳細画面の「解説・抄録」欄に表示されます。なお、あらすじは、児童書及び関連資料のうち、該当する情報を入手できたもののみ付与されています。ログインしている場合、画面右側にカートのボタンが出てきます。このボタンから、遠隔複写や図書館間貸出し等を申し込むことができます。

②国立国会図書館サーチ (NDLサーチ)

次に、国立国会図書館サーチ² (以下「NDLサーチ」という) を御紹介します。NDLサーチは、国内の各機関が持つ豊富な「知」を活用するためのアクセスポイントとなることを目指し、開発されたデータベースです。国立国会図書館の資料のほかに、全国の公共図書館、公文書館、美術館や学術研究機関等が提供するデータベース等を広く検索できるという特徴があります。なお、公共図書館については、都道府県立図書館は全て検索対象になっていますが、市区町村立図書館は網羅的には検索できません。国立国会図書館で利用可能なデジタルコンテンツも含めた所蔵資料・情報や目次情報を検索するなら国立国会図書館オンライン、他の類縁機関の所蔵も含めて検索するならNDLサーチを、という使い分けができます。

・児童書総合目録について

児童書を検索する際に便利なNDLサーチの特徴として、検索対象に「児童書総合目録」を含んでいることが挙げられます。児童書総合目録とは、日本国内で児童書を所蔵する主要類縁機関7機関³の、児童書・児童書関連資料の所蔵情報の目録です。こちらの目録でも、書誌情報に加えて一部の資料のあらすじ情報を検索することができます。以前は独立したサービスとして提供していましたが、現在はNDLサーチの中で検索対象を「児童書」に指定するというかたちで児童書総合目録を使うことができるようになっていました。

こちらが、NDLサーチのトップページです (図3)。ここではキーワードを入力し、「児童書」ボタンを選択して検索対象を児童書総合目録に限定した場合の例を御紹介します。なお、詳細検索タブではキーワード検索欄がありませんので、あらすじを含めてキーワード検索をしたい場合は、簡易検索タブのキーワード検索を使う必要があります。



図3 NDLサーチ トップページ

2 国立国会図書館サーチ <<https://iss.ndl.go.jp/>>

3 大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、白百合女子大学図書館、日本近代文学館、東京都立多摩図書館、梅花女子大学図書館 (五十音順)

検索結果一覧画面（図4）では、入力したキーワードに一致する部分が黄色でハイライトされます。この画面の左側には、資料の種別や検索先のデータベースや所蔵館、出版年などで絞り込みを行うための項目があります。画面右側には、関連するキーワードや連想されるキーワードなどが表示されますので、ここから再検索することもできます。

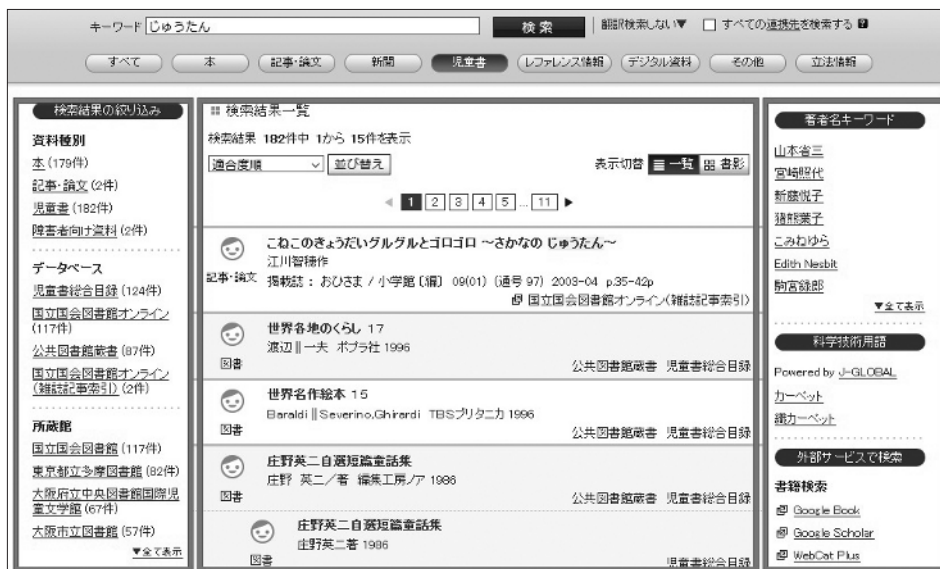


図4 NDLサーチ検索結果一覧画面

資料のタイトルをクリックすると、書誌詳細画面が表示されます。あらずじが収録されている場合は、画面下方の「要約・抄録」という項目に表示されます。書誌詳細画面右側には、当該資料の所蔵館が列挙されています。各館における所蔵の詳細や利用方法等については、各館のウェブサイトへのリンクから確認できます。

児童書総合目録で検索する場合の主な注意事項を御説明します。まず、参加館7館の所蔵情報を全て収録しているわけではありません。つまり、収録対象は児童書・関連資料のみです。加えて、最新の所蔵情報が反映されていない場合があります。また、検索する際の絞り込み方について、①「児童書」を検索対象とした場合と、②検索対象を指定せず検索した後、検索結果一覧を「児童書総合目録」で絞り込んだ場合とで、検索結果が異なります。①の場合、国際子ども図書館又は児童書総合目録参加館のいずれかが所蔵している資料がヒットしますが、②の場合、最終的には児童書総合目録参加館が所蔵している資料がヒットし、国際子ども図書館のみが所蔵している資料はヒットしません。

ここで、詳細検索と障害者向け資料検索についても簡単に御紹介します。詳細検索は、NDLサーチトップページの2番目のタブから行うことができます。タイトルや著者編者等の検索項目ごとの検索や、所蔵館の指定等ができます。また、障害者向け資料検索は、同じくトップページの3番目のタブから行うことができます。

③国立国会図書館デジタルコレクション

最後に御紹介するのが、「国立国会図書館デジタルコレクション」⁴です。こちらは、国立国会

4 国立国会図書館デジタルコレクション <<https://dl.ndl.go.jp/>>

会図書館で収集・集積している様々なデジタル資料を検索・閲覧できるサービスです。所蔵資料をデジタル化したものが主ですが、それ以外に国立国会図書館が収集したインターネット上の刊行物等も含まれます。資料の書誌情報や目次情報はインターネット経由で閲覧可能です。

本文の画像や音源等の提供につきましては、利用資料の著作権等の状況によって、三種類の公開範囲があります。一つ目が「インターネット公開」資料で、インターネット経由でどなたでも閲覧可能です。二つ目が「図書館送信資料」で、図書館向けデジタル化資料送信サービス（図書館間送信）に参加している図書館等の端末で閲覧可能です。絶版等で入手困難な資料が主な対象となっています。三つ目は「国立国会図書館内限定」資料で、国立国会図書館（東京本館、関西館、国際子ども図書館）の端末のみで閲覧することができます。なお、目次情報を検索する場合は注意が必要です。資料タイトルにはよみの情報が含まれていますが、目次については資料からそのまま転記しただけの状態であるため、よみ情報がありません。漢字の送り仮名や旧仮名遣いなど、資料の目次と同じ文字列を入力して検索する必要があります。

当館が所蔵する児童書・児童雑誌のデジタル化状況ですが、国内刊行児童書については、昭和43（1968）年以前のものを中心にデジタル化しています。公開範囲は資料によって異なります。国内刊行児童雑誌については、昭和45（1970）年以前のものデジタル化しています。今のところ、児童雑誌のデジタル化資料は、全て国立国会図書館内限定資料になっています。

では、トップページの画面（図5）を御紹介します。



図5 国立国会図書館デジタルコレクション トップページ

キーワード欄の下に公開範囲のチェックボックスがあります。ここには、アクセスしている端末で本文が閲覧できる範囲でチェックがあらかじめ入っています。現在お見せしている画像は、国立国会図書館内からのアクセスのため、全てにチェックが入っています。

トップページのメニューでは、コレクション毎に資料を絞り込むことも可能です。児童書関連としては、プランゲ文庫のアイコンが表示されています。プランゲ文庫は、連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）による検閲を受けた出版物と文書類のコレクションで、この中にも児童書が含まれます。終戦直後や占領期の児童書を調べる際には有効な情報源となり得ます。プランゲ文庫の詳細については、この後説明するリサーチ・ナビに掲載されていますので、御興味のある方はそちらを御覧ください。

さて、検索ボタンをクリックすると、検索結果一覧が表示されます。国立国会図書館内の端末から見ると、表紙が全て表示されます。館外からのアクセスの場合はその資料の公開範囲によって、表紙の表示の有無が変わります。インターネット公開のものに限定して検索したい場合は、検索結果一覧画面から改めて絞り込むこともできますし、あらかじめインターネット公開に限定して検索することもできます。

検索結果一覧でタイトルや書影をクリックすると、閲覧画面が表示され、本を見るようにコマを送って資料の中身を読んでいくことができます。閲覧画面左上の目次や巻号のタブをクリックすると目次一覧が表示され、特定の章などに直接飛びたいときに使うことができます。本文が閲覧できる環境においては、表紙のブラウジングを経て一気に資料内容まで到達できる点が、デジタルコレクションの長所となります。

2. 「調べ方」や「探し方」を探す

ここからは、資料の「調べ方」や「探し方」を探す方法について、二つのデータベースを御紹介します。

①リサーチ・ナビ

一つ目は「リサーチ・ナビ」⁵です。リサーチ・ナビは「調べ方」を調べるためのデータベースです。国立国会図書館職員が、調べものに有用であると判断した図書館資料、ウェブサイト、各種データベース、関係機関情報を、特定のテーマ、資料群別に紹介しています。目次や内容などの多彩な切り口で資料を検索できる「テーマ別データベース」も含まれており、児童書関係では、「外国語に翻訳発行された日本の児童書情報」を提供しています。

まずトップページ（図6）を御紹介します。一番上の検索窓から「調べ方」を検索すること



図6 リサーチ・ナビ トップページ

5 リサーチ・ナビ <<https://rnavi.ndl.go.jp/rnavi/>>

もできますし、下の各種メニューからリンクをたどって情報を得ることもできます。

検索窓を使って検索した場合、検索結果が表示されます。

・調べ方案内について

検索結果上部に表示される「調べ方」には、国立国会図書館が作成した「調べ方案内」が表示されます。ここから調べ方案内の個別の記事のページに遷移すると、参考図書やインターネット上の情報源等が紹介されています。

また、各種メニューからリンクをたどる方法についても御紹介します。例えば、トップページ下方「専門室のページ」欄の「国際子ども図書館」をクリックすると、「児童書をさがす」というページが開きます（図7）。この中に、「調べ方案内（調べるヒント）」というメニューがあります。この「調べ方案内（調べるヒント）」は8つの項目に分かれており、その下にさらに細かくテーマが分かれています。具体的には、絵本・児童書の探し方、調べ方、作家・画家の調べ方、外国語の絵本・児童書の探し方、教科書や教師用指導書の所蔵の調べ方などがあります。例えば絵本・児童書の探し方の中には、「キーワードから絵本・児童文学作品を探す」という調べ方案内があります。この記事では、タイトルは分からないけれどもこんなテーマで探しているといった場合の参考資料や、インターネット情報から探す場合の情報源も紹介しています。



図7 児童書をさがす

・外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報について

さて、先述のとおりリサーチ・ナビでは、テーマ別データベースも掲載しています。その中で、児童書関係のものとして、「外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報」を御紹介します。これは外国語に翻訳刊行された日本の児童書のうち、当館で所蔵している資料をデータベース化したものです。「外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報」には、リサーチ・ナビのトップページ右側の「テーマ別データベース」からリンクを張っています。開くと、ページ中央に検索窓が表示されます（図8）。こちらに書名や著者名、国名、言語等を入力して検索することができます。

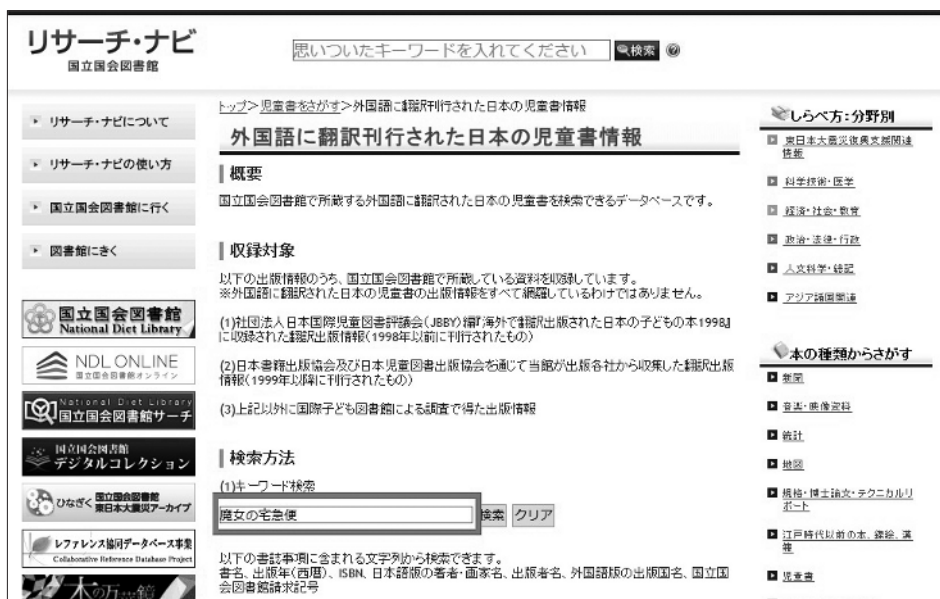


図8 外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報

『魔女の宅急便』⁶を例に、実際の検索結果一覧を見てみましょう。日本語資料の書誌の下に、翻訳版の情報が表示されます。1985年に日本で刊行された第1巻について検索すると、日本語資料の書誌情報の下に、中国、イタリア、韓国等の翻訳書のタイトルや刊行年が表示されています。このタイトルをクリックすると、先ほどの国立国会図書館オンラインの該当書誌に飛びます。この『魔女の宅急便』の翻訳版につきましては、国によっていろいろな表紙絵があります。「魔女は怖いもの」というイメージの強い国では、キキが可愛すぎるといった意見が出たため、現地の画家が描き直したそうです。詳しくは国際子ども図書館ホームページの電子展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」⁷でも御紹介していますので、御覧いただければと思います。

②レファレンス協同データベース（レファ協）

続いて、二つ目のデータベースとして、「レファレンス協同データベース」⁸（以下「レファ協」という）を御紹介します。レファ協は、国立国会図書館や全国の図書館で構築している調べ方、調べもののためのデータベースです。全国の図書館に御協力いただき、データを登録しています。レファレンス事例を共有することで、類似する事例を調べたり、調査手順を確認したりすることにも役立ちます。

トップページ（図9）の検索窓から、キーワード検索が可能です。検索すると、検索結果一覧画面に、レファレンス事例の一覧が表示されます。各事例の質問部分のリンクをクリックすると、その事例の詳細が見られます。詳細画面では、図書館で実際に受けた利用者からの質問と回答の内容、調査のプロセスが記載されています。「調査のプロセス」欄を見ると、参考図書や利用したデータベース等が分かります。調査過程で参考にした、他のレファ協掲載事例へ

6 角野栄子 作, 林明子 画『魔女の宅急便』福音館書店, 1985.

7 国立国会図書館国際子ども図書館開館10周年及び国民読書年記念展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」<<https://www.kodomo.go.jp/anv10th/index.html>>

8 レファレンス協同データベース <<https://crd.ndl.go.jp/reference/>>

のリンクが載っていることもあります。



図9 レファレンス協同データベース トップページ

公開されている事例は、インターネット経由で検索・閲覧が可能です。なお回答は、詳細に入力されている例もあれば、簡潔に書かれている場合もあります。レファ協参加館になりますと、事例を登録することができます。他の図書館や利用者の調査に役に立ちますし、自館内の情報共有にもお使いいただけます。

3. 国際子ども図書館ホームページ

最後に、国際子ども図書館ホームページ⁹を御紹介します。国際子ども図書館ホームページでは、児童書について調べるのに役立つコンテンツを公開しています。具体的には、子どもと本に関するニュース(国内外の子どもと本に関する情報を紹介)や『国際子ども図書館の窓』(年刊、国際子ども図書館の活動報告や統計情報を掲載)、電子展示会のほか、研修の講義録や過去の講演会等の記録も御覧いただけます。

こちらがトップページです(図10)。フッター(ページ最下部)には各ページへのリンクがあります。例えば「児童サービス・学校関係者の方へ」というページでは、図書館や文庫等でサービスを担当している方向けに参考になるような情報を、具体的には、子どもと本に関するニュースや読書活動に関する調査一覧等を御紹介しています。このうち、「子どもの本に関す



図10 国際子ども図書館ホームページ

9 国立国会図書館国際子ども図書館ホームページ<<https://www.kodomo.go.jp/>>

る情報」というページでは、児童文学賞一覧や出版状況一覧、海外の児童書に関する情報を御紹介しています。海外の児童書に関する調査のページでは、当館が毎年外部に依頼して作成している、各国の児童書のブックリストを見ることができます。

4. まとめ

最後に、御紹介したデータベース等についてのまとめです。

国立国会図書館が提供しているデータベースのうち、書誌情報から子どもの本を探すデータベースとして、国立国会図書館オンライン、NDLサーチ、国立国会図書館デジタルコレクションがあります。このうち、児童書総合目録を内蔵し、他館の情報を含めて最も広い範囲を検索できるのはNDLサーチです。資料を絞り込む場合や、国立国会図書館のサービスに申し込む予定がある場合には国立国会図書館オンラインが、デジタル化資料に絞った検索であれば国立国会図書館デジタルコレクションが、それぞれ有効に使える可能性があります。

子どもの本を調べたり探したりする際、調べ方や探し方に迷った場合は、リサーチ・ナビを御活用ください。また、他機関でのレファレンス事例を検索できるレファレンス協同データベースが、調査の助けになってくれることもあるかもしれません。

最後に、国際子ども図書館ホームページでも、児童書に関する情報を随時発信しておりますので、御活用いただければ幸いです。

おわりに

白井 澄子

皆さんお疲れさまでした。なんだかとても、ハッピーな気持ちになっていませんか。私自身、児童文学についてたっぷりとお話を聞かせてもらったなと感じています。

これまでの講義を逆からたどっていきましょう。まずは今の幼年童話のお話。私自身も、幼年童話はとても面白いと思う反面、例えば大学の授業でどう扱ったらいいんだろうと考え込んでしまうのです。でも、そんな必要はないですね。幼年童話は楽しいんです！子どもがこんなことを求めているというのが、とてもよく分かりました。歴史を追ってみると、幼年童話が随分変わってきていることも分かりました。とても奥深いなあと、興味深く聞きました。

そして午前中は絵本の話。絵本もこれまた、いろいろな見方ができますね。子どもだけではなく幅広い人々が楽しむことができるし、様々な表現が可能だということを感じました。皆さんも今日のお話を聞いて、これを土台に、もっと自分で見てみようと思われたのではないのでしょうか。

昨日に遡りますと、金原先生のヤングアダルト文学のお話がありました。ヤングアダルト文学が日本に定着してしばらく経ちますが、まだなんだかちょっと謎めいた感じがします。日本だとライトノベル、英米だとグラフィックノベルも、ヤングアダルト世代向けのジャンルに入ってきています。そのような新しいトピックにも触れられました。なぜ1960年代のアメリカで、ヤングアダルト世代の若者パワーが出てきたのか、文化的背景も併せて示してくださいました。私も聞いていて、なるほどなあと思いました。あの時代の映画等も併せて考えてみると、若者たちが自分のパワーを大人の文化とは違うかたちで表現したいと思ったこと、作家がそれを自分の声で語り始めたこと、そしてそういったものが増えていった様子がよく見えてきたと思います。

最後、私に戻りますけれども、私の話は小学校中高学年向けの児童文学でした。ここもまた作品が非常にたくさんある分野で、それをどう子どもたちに伝えていったらいいか。まずは、私たちがいろいろな作品に触れることで、「子どもがこんな状況のときにこんなふうに関心を持って読んでもらえるといい」と考える上での、ヒントになればと思います。

さて今、皆様はいろいろ思うところがあり、人に何か話したいなと思っていませんか。ちょっと意見交換したり、自分では気付かなかったことや知りたいことを聞いたり、自分の思いを伝えたいのではないのでしょうか。それは、この後の参加者交流で。何が見えてくるか、聞こえてくるか…、それも今後の皆さんにとってのプラスになればと思います。

それでは、さらっとした総括になってしまいましたが、いずれのお話も興味深く面白く聞かせていただきました。このような講座を準備してくれた国際子ども図書館に感謝したいと思います。では、私の話はこれで終わりにいたします。

**The Basics of Children's Literature:
From Picture Books To Young Adult Fiction
Transcript of the ILCL Lecture Series on
Children's Literature, 2019**

Contents

Foreword	HORI Junko	1
Introductory Notes		2
Contents		3
Lecture Programs		4
About the Speakers		5
Introduction	SHIRAI Sumiko	6
Have You Read These Books? —For Children in the Higher Grades of Elementary School	SHIRAI Sumiko	8
Overview of Young Adult Fiction	KANEHARA Mizuhito	30
Fascinating Nature of Picture Books —Connecting Various Readers with Colorful Themes	HOSOE Sachiyo	45
Introduction to Stories for Preschool Children	SASAKI Yumiko	67
National Diet Library Databases to Search Children's Books	FUKUDA Yuka	88
Conclusion	SHIRAI Sumiko	99

令和元年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座講義録
「絵本からヤングアダルト文学まで—児童文学基礎講座」

令和2年9月15日 発行

発行 国立国会図書館
編集 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043
印刷 株式会社 丸井工文社
〒107-0062 東京都港区南青山 7-1-5

ISBN 978-4-87582-862-4

本誌に掲載された記事を全文又は長文にわたり抜粋して転載する場合は、事前に国立国会図書館国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。

本誌のPDF版を国立国会図書館国際子ども図書館ホームページ (<https://www.kodomo.go.jp/>)で御覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。

